

喜田盛遺跡

平成22年度県道真栄里新川線街路改良工事に伴う記録保存目的の発掘調査

2011（平成23）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した平成22年度の県道真栄里新川線街路改良工事に伴う記録保存を目的とした喜田盛遺跡発掘調査の成果をまとめたものです。

喜田盛遺跡は石垣市新川に所在し、この一帯は住宅が密集する市街地となっております。そのため、この市街地を東西に走る県道真栄里新川線は、交通量が多い幹線道路であるのみに限らず道幅が非常に狭いため、早急な改善が求められておりました。

沖縄県では、昭和58年度から継続してこの道路改善のため街路改良工事が実施されてきました。一方、工事に伴って、この一帯には喜田盛遺跡を含め多くの遺跡が確認されることになり、これまで石垣市教育委員会による記録保存のための発掘調査が行われてきました。この調査によって、これらの遺跡より多くの遺構・遺物が確認され、徐々に地域の歴史も明らかになりつつあります。

さて、今回の喜田盛遺跡の調査は、この街路改良工事に伴う最後の発掘調査となりました。調査の結果、15世紀～17世紀を中心とした土坑墓や建物跡と考えられる多くの柱穴群が発見され、地元で作った土器をはじめ、中国や日本本州の陶磁器などが出土しました。

本報告書では、今回の調査成果と共に、本工事に伴う発掘調査が終了することを受けて、この喜田盛遺跡周辺においてこれまで行われた調査成果を整理し、地域における位置付けについても若干の検討を行いました。地域の歴史・文化を学び考え、文化財を保存活用するための基礎資料と役立てば幸いです。

最後になりましたが、様々な御指導・御助言・御協力を戴きました諸機関および関係各位に対し、心から感謝を申し上げます。

2011（平成23）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 守内泰三

例　　言

1. 本報告書は、沖縄県石垣市新川 63 番地 2 に所在する喜田盛遺跡における県道真栄里新川線街路改良工事に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本調査は、沖縄県土木建築部から予算分任を受け、沖縄県教育委員会の指導を元に、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、発掘作業を平成 22 年 7 月 7 日から 8 月 6 日、資料整理作業・報告書作成を平成 22 年 8 月 6 日から平成 23 年 3 月 31 日まで実施した。
4. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の平成 17 年地形図（縮尺 1:25,000、1:50,000）を使用している。
5. 本書に掲載した遺構図の座標軸は国土座標軸（第 X VI 座標系）を使用し、その座標値は日本測地系である。ちなみに、報告書抄録の緯度経度については世界測地系で算出している。
6. 現地調査および資料整理に際して、下記の諸氏・機関に協力・指導・助言を戴いた（敬称略、団体五十音順）。

大演憲二・大演永寛・下地傑（石垣市教育委員会）	金武正紀（石垣市史編集委員会）
島袋綾野（石垣市立八重山博物館）	菅原広史（浦添市教育委員会）
藤田佑樹・山崎真治・羽方誠（沖縄県立博物館・美術館）	新里貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）
角南聰一郎（元興寺文化財研究所）	伊藤慎二（国学院大学研究開発推進機構）
大橋康二（佐賀県立九州陶磁資料館）	大演永亘（先島文化研究所）
坂井 隆（台湾大学）	向井 互（東南アジア考古学会）
7. 本書の編集は、当センター職員の協力を得て、瀬戸哲也が行った。なお、執筆は第 3 章第 3 節 1 を片桐千亞紀、第 4 章を土肥直美・片桐千亞紀・徳嶺里江、それ以外を瀬戸が行った。
8. 土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」2009 年度版を使用している。土質は肉眼で粒径を観察し、地質学によるウェントワース法（那須・趙 2003）で表現している。
9. 石垣島を含む先島地域における時代区分は、『沖縄県史 各論編 2 考古』においても複数説が提示されている状況である。本書では、喜田盛遺跡の主体的な時期である 15 ~ 17 世紀前後について考古資料により具体的に説明されている、金武正紀・阿利直治・金城亀信による編年に基づいた（金武 1994・石垣市総務部 2007）。
10. 本書に掲載された写真は、発掘調査状況を瀬戸哲也、遺物を矢船章浩・伊佐えりなが撮影した。
11. 現地調査で得られた遺物および実測図・写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目 次

序 例 言

第1章 経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過	3
第2章 位置と環境	6
第3章 調査の方法と成果	8
第1節 調査の方法	8
第2節 層序	8
第3節 遺構	10
1. 土坑墓	10
2. 焼土遺構	15
3. 土坑	15
4. ピット	15
5. 貝集中地点	15
6. 磐石	16
第4節 遺物	18
1. 土器	18
2. 中国産陶磁器	30
3. タイ産陶器	34
4. 台湾産陶器	34
5. 本土産陶磁器	35
6. 沖縄産陶器	36
7. 近代陶磁器	43
8. 金属製品	44
9. 骨製品	44
10. 石製品	44
11. 貝製品	44
12. 円盤状製品	46
13. 貝類遺体	46
14. 脊椎動物遺体	55
第4章 喜田盛遺跡土坑墓出土の人骨	61
第5章 総 括	66
第1節 調査成果のまとめ	66
第2節 喜田盛遺跡における中森期の様相について	68
第3節 喜田盛遺跡の四箇地域及び石垣島周辺における位置付け	70
引用文献	73
報告書抄録	90

挿図目次

第1図 石垣島の位置	2
第2図 黒道真栄利新川級事業計画図と喜田盛跡の位置	3
第3図 喜田盛遺跡周辺の御嶽・井戸	7
第4図 石垣島の主なる主要遺跡分布図	7
第5図 道構全体図・南壁断面図	9
第6図 土坑墓1	11
第7図 土坑墓2・土坑墓3・出土遺構	12
第8図 土坑・ピット	14
第9図 土器1	23
第10図 土器2	24
第11図 土器3	25
第12図 土器4	26
第13図 土器5	27
第14図 土器6	28
第15図 土器7	29
第16図 青磁・白磁	31
第17図 青花・中国産色絵	33
第18図 中国産鶲羽陶器・タイ産鶲羽陶器・台湾産陶器	35
第19図 本土産陶器	37
第20図 沖縄産無釉陶器	39
第21図 沖縄産無釉陶器	41
第22図 沖縄産無釉陶器・陶質土器	42
第23図 金萬製品・骨製品・石製品	44
第24図 土坑3出土器・青磁	46
第25図 ピット・土坑の時期区分検討図	47
第26図 喜田盛遺跡道構分布図	49
第27図 四箇地域間連道路	51

図版目次

図版1 発掘作業状況	5
図版2 卷貝（1）	52
図版3 卷貝（2）	53
図版4 二枚貝	54
図版5 魚類・爬虫類	57
図版6 鳥類・哺乳類	59
図版7 人骨（1）	64
図版8 人骨（2）	65
図版9 調査区全貌	75
図版10 土坑墓1	76
図版11 土坑墓2・出土遺構	78
図版12 土坑1・2・3・4	79
図版13 土坑8 ピット1・23・36 2～4グリッド断面	79
図版14 土器（1）	80
図版15 土器（2）	81
図版16 土器（3）	82
図版17 土器（4）	83
図版18 青磁・白磁・青花・中国産色絵	84
図版19 中国産鶲羽陶器・タイ産鶲羽陶器・台湾産陶器・本土産陶器	85
図版20 沖縄産無釉陶器・沖縄産無釉陶器	86
図版21 沖縄産無釉陶器・陶質土器・金萬製品・骨製品・石製品	87
図版22 近代陶器	88
図版23 骨製品・貝製品・円盤状製品	89

表目次

第1表 道構觀察一覧（1）	16
第2表 道構觀察一覧（2）	17
第3表 遺物出土一覧	18
第4表 土器出土状況	19
第5表 土器觀察一覧（1）	20
第6表 土器觀察一覧（2）	21
第7表 土器觀察一覧（3）	22
第8表 青磁出土状況	30
第9表 青磁觀察一覧	30
第10表 白磁出土状況	30
第11表 白磁觀察一覧	31
第12表 青花出土状況	32
第13表 青花・中国産色絵觀察一覧	32
第14表 中国産鶲羽陶器出土状況	34
第15表 タイ産鶲羽陶器出土状況	34
第16表 中国産鶲羽陶器・タイ産鶲羽陶器・台湾産陶器觀察一覧	34
第17表 本土産陶器出土状況	36
第18表 本土産陶器觀察一覧	37
第19表 沖縄産無釉陶器出土状況	38
第20表 沖縄産無釉陶器觀察一覧	38
第21表 沖縄産無釉陶器出土状況	40
第22表 陶質土器出土状況	43
第23表 沖縄産無釉陶器・陶質土器觀察一覧	43
第24表 近代陶器觀察一覧	45
第25表 金萬製品・骨製品・石製品觀察一覧	45
第26表 貝製品觀察一覧	45
第27表 円盤状製品觀察一覧	45
第28表 表貝生息地の分類	47
第29表 表貝遺体の種組成	47
第30表 表貝類遺体の生息地類型組成	47
第31表 表貝類遺体出土状況（春日）	48
第32表 表貝類遺体出土状況（二枚貝）	50
第33表 背椎動物遺体一覧	55
第34表 魚類出土状況	56
第35表 魚類・爬虫類園団観察一覧	56
第36表 カメ出土状況	58
第37表 表トリ出土状況	58
第38表 ニワトリ出土状況	58
第39表 エゾミ出土状況	58
第40表 ネコ出土状況	58
第41表 イヌ出土状況	58
第42表 ヤギ出土状況	58
第43表 鳥類・哺乳類園団観察一覧	58
第44表 イノシシ／ブタ出土状況	60
第45表 マウ出土状況	60
第46表 ウシ出土状況	60
第47表 出土人骨一覧	61
第48表 土坑墓1人骨の上段骨計測値	63
第49表 土坑墓1人骨の下段骨計測値	63

第1章 経緯と経過

第1節 調査の経緯

石垣市の市街地を東西に走る県道 79 号線真栄里新川線は、交通量が非常に多い幹線道路にあるにも係わらず、道路幅員が狭く市民生活及び観光産業の発展のため、その改善が求められていた。そのため沖縄県では、昭和 58 年度より本道路の街路改良工事を実施することになり、平成 22 年度において完了することになった。

一方、本工事に伴って多くの遺跡が確認されることになり、石垣市教育委員会（以下、市教委）が平成元年から 21 年度に亘って、石垣貝塚、平川貝塚、大川東遺跡、登野城遺跡、八重山蔵元跡、そして喜田盛遺跡において、記録保存を目的とした緊急発掘調査を行ってきた（第2図）。

喜田盛遺跡は、この街路改良工事に先立って石垣市教育委員会により平成 12 年 5 月に行われた試掘調査により、石垣市字新川小字喜田盛 53・54・63～67・75・76 番地の範囲において発見された。この結果を受けて、沖縄県土木建築部八重山土木事務所（当時は「八重山支庁土木建築課」、以下、八重山土木）は遺跡発見通知を沖縄県教育委員会（以下、県教委）に提出し、平成 12 年 6 月 22 日付で埋蔵文化財包蔵地として取り扱うこととして、本遺跡は記録保存の発掘調査を実施するよう指示された。それにより、石垣市教育委員会（以下、市教委）が発掘調査を実施することになったのだが、工事範囲の全ての用地取得は終了しておらず、調査が可能な範囲について順に進めることとなった。この調査は平成 12・13 年度に行われ、中森期（15～16 世紀）から近世に至る柱穴群、土坑墓などを検出し、集落跡であることが明らかになった（石垣市教委 2004）。

この調査時において、用地が取得されていなかった 63～2 番地については、平成 21 年度に持ち越されることになった。八重山土木は平成 21 年 11 月に、市教委へ平成 22 年上半期までに発掘調査を終了すべく協議を行った。しかし、市では既に次年度予算要求が終えてしまっており、市教委が発掘調査を受託することは困難となつた。そこで、八重山土木は県文化課と協議したところ、県教委への分任事業として対応することが望ましいと判断され、平成 22 年度に県立埋蔵文化財センター（以下、当センター）が発掘調査・資料整理・報告書作成を行うことで調整がなされた。この内容については、県教委と県土木建築部（以下、土建部）の間で、6 月 1 日付「真栄里新川線街路改良工事における埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」としてまとめた。なお、当該調査に掛かる費用は、本工事の主管課である土建部道路街路課から文化課へ予算分任された。

当センターではこの協定に基づいて、発掘調査の準備を進め、6 月 22・23 日に本道路を管轄する八重山土木の担当部局である河川港湾都市班と調整し、現場は 7 月 6 日から 8 月 6 日までの予定で行うことになった。同時に、発掘作業員確保、重機による掘削、基準点測量などを発掘調査支援業務として、石垣市内に所在する土木設計コンサルタント業者を対象に指名競争入札を行い、有限会社南西土木設計に委託することになった。また、道路使用許可申請書を八重山警察署長あてに 6 月 30 日付で提出し、7 月 2 日付で許可が下りた。

7 月 6 日に、八重山土木担当に調査手順や工程を説明し、市教委にもその旨を説明し協力を仰いだ。また、南西土木設計とともに付近の下水・上水道、NTT ケーブルなどの埋設物の位置を確認し、7 日より調査を開始することにした。

第2節 調査体制

喜田盛遺跡の発掘調査は、当センターが県教委の指導の下に平成 22 年度に発掘作業・資料整理・報告書作成を実施した。実施体制は以下のとおりである。

事業主体 沖縄県教育委員会 金武正八郎（教育長）

事業主管 沖縄県教育庁文化課 大城慧（課長）、島袋洋（記念物班長）、上地博（主任専門員）、久高健（指導

主事)

調査所管 沖縄県立埋蔵文化財センター 守内泰三(所長)

総務班 嘉手効勤(班長)、玉寄秀人(主査)

調査班 総括・金城亀信(班長)

調査・資料整理担当・瀬戸哲也(主任)

調査協力・片桐千ア紀・徳嶺里江・波木基真

資料整理協力・池原直美・伊佐えりな・上田麻紀子・上地由紀子・上原美穂子・上原留美・請盛智秋・荻堂

さやか・国吉咲子・崎原美智子・瑞慶賀尚美・高良三千代・照屋利子・比嘉登美子・比嘉なおみ・野村知子・

宮里繪理

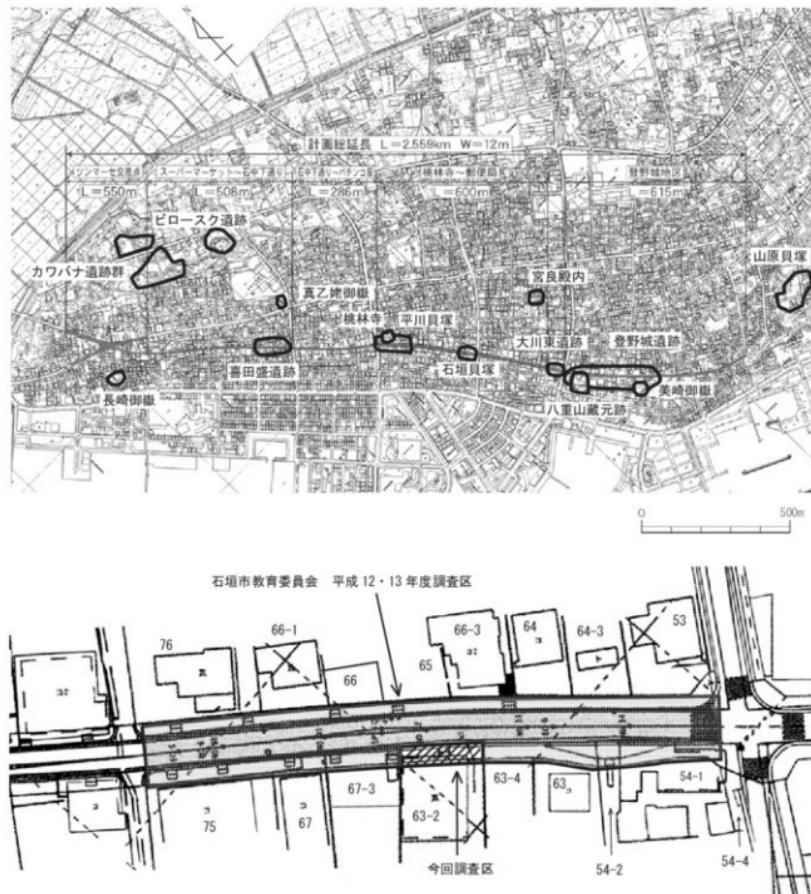


第1図 石垣島の位置

第3節 調査経過

発掘作業

発掘作業は平成 22 年 7 月 7 日から 8 月 6 日まで行った。調査対象地である新川 63-2 番地は、交通量が多い道路に隣接するため、歩道の確保・安全対策を十分に配慮して調査区を設定したところ、その調査面積は 50 m² となった（第 2 図）。以下、調査日誌の抄録で説明する（図版 1）。



第 2 図 県道真栄里新川線事業計画図と喜田盛遺跡の位置

- 7月 7日 重機による掘削を行い、近現代の盛土約 80cm を除去し、近世及び中森期の遺物を含む遺物包含層を検出した。
- 7月 8日 グリッド設定を行い、人力により遺物包含層の掘削を開始した。
- 7月 14日 多くのピットの他、近代の土坑1、土坑2（調査時、水溜遺構）や、焼土遺構などを検出した。
- 7月 20日 地面まで掘削し、近代、近世、中森期のピットを中心とした遺構がほぼ同一面で確認した。遺構検出段階として全景の写真撮影を行った。
- 7月 21日 検出遺構を半裁し、土層確認後、必要に応じて断面図作成、写真撮影を行い、完掘を進めていった。ピットを掘削中に、後に土坑墓1とする人骨頭部を確認した。
- 7月 23日 土坑墓以外の遺構はほぼ掘削が終わったため、完掘段階として全景の写真撮影を行った。
- 7月 27日 南西土木設計により遺構平面について電子平板測量を行った。
- 7月 28日 平板測量図を元に遺構平面図を作成し、ピットの規模を計測した。
- 7月 29日 調査区南壁の断面図作成。片桐主任、徳嶺嘱託員、県立博物館・美術館博物館班（藤田・山崎主任）の協力を受け、土坑墓1の掘削を開始した。調査を進めていくなかで、土坑墓1周辺で更に土坑墓2・3が存在することが判明した。
- 8月 3日 土坑墓の掘削・図面作成を終了した。
- 8月 4日 土坑1の断割りなどを行い、遺構調査を終了させた。
- 8月 5日 重機により埋め戻しを開始した。
- 8月 6日 埋め戻し終了。八重山土木や市教委に調査終了について報告した。

資料整理作業

発掘作業で出土した遺物は、調査面積が 50m²と狭いながら、遺物収納コンテナ 20 箱を数えることになった。この出土遺物は、当センターから 8月 10日にその内容を県文化課へ報告し、八重山警察署には 8月 16 日付にて埋蔵文化財発見について通知することにより遺失物法の手続きを経た。

出土遺物の洗浄は、発掘作業の進捗を見ながら、現場作業員が 7月 13日から 8月 6日にかけて行い、8月 11日に当センターへ搬送された。当センターでは 8月 11日より資料整理を開始し、第一に遺物の出土地点や大まかなる種類の確認を行った。遺物の注記については、非常に短期間での資料整理・報告書作成を行う必要があることから、出土遺物の中でも最も多い土器・瓦の注記については、株式会社バスコに委託し、8月 31日より 9月 13日にかけて行われた。土器は本遺跡で最も多く、破片も比較的大きいため、接合に 1カ月程度の期間を掛けたその復元に努めた。一方、量的には少ないが遺跡の時期や特徴を考える上で重要な中国・本土・沖縄産の陶磁器については産地・時期等の分類を行った。貝類の出土也非常に多く、その同定・集計にも時間を要した。獸魚骨については小片が多く、石垣島ではまだ情報量が少ないので、時間が許す範囲で種類の同定を行った。これらの遺物については、必要に応じて実測図・写真撮影を行い、報告書に掲載する図面・図版を作成していった。

遺構・層序については小面積の調査でもあり図面の量も多くないことから、現地での見解と大きな矛盾はなく、速やかに報告に必要な図面を選び出すことが出来た。本遺跡で最も重要な遺構である土坑墓から出土した人骨については、株式会社文化財サービスに委託し、土肥直美による形質人類学的な分析が行われた。

このような整理を経て作成した図面・図版については当センターでパソコン上により作図ソフト（イラストレーター）を用いてトレース及びレイアウトを行い、編集ソフト（インデザイン）を用いて編集し、全て電子データにより印刷会社へ入稿した。



1. 調査開始前



2. 重機掘削状況



3. 人力掘削状況



4. 土坑墓人骨検出状況



5. 測量状況



6. 埋め戻し状況



7. 埋め戻し後



8. 歩道整備後

図版 1 発掘作業状況

第2章 位置と環境

地理的環境（第1～4図）

喜田盛遺跡（以下、本遺跡）は、石垣市字新川小字喜田盛に所在する。石垣市がある石垣島は、沖縄本島より南西約400kmに位置し、西表島や与那国島とともに大小32の島々で八重山諸島を構成している。石垣島南西部の南北1km、東西3kmの範囲である新川・石垣・大川・登野城地域が市街地となっている。本遺跡が位置する新川を含めた先述の四地域を「四箇」と称して、古くから石垣島の中心地となっている。

石垣島の地形は、島の中央に県内最高峰の於茂登岳（標高525.8m）が位置し、その北側が低山地、南側が台地・砂丘となっている。本遺跡は、現在は埋め立てられてしまっているが、元来は島の南端縁辺に沿って東西に長く伸びていた砂丘上に位置し、標高は約3mである。本遺跡付近から北側に向かって標高が少し高くなり始め、北方約300m一帯からは標高15m前後の石灰岩低位段丘となる。つまり、本遺跡は砂丘と低位段丘の境に位置し、現在でも多くの井戸が見られ豊かな水量を誇っており、昔から住みやすい場所であったようだ。

歴史的環境（第4図）

石垣島における最古の遺跡は、近年の新石垣空港建設に伴って2万年前の人骨が複数発見された東海岸の白保竿根田原洞穴遺跡があるが、石器等は出土していない（片桐他2011）。約3,000～4,000年前とされる下田原期には、西海岸の大田原遺跡（石垣市教委1982）やピュウツタ遺跡（石垣市教委1997a）があり、先述の白保竿根田原洞穴遺跡では炉跡や墓も確認されている。これらの時期の遺跡は、本遺跡周辺では確認されていない。

約2,000年前から11世紀前後は無土器期と呼称される土器が出土しない時期で、東海岸の嘉良嶽東貝塚（県埋文2009）や、北西端の崎枝赤崎貝塚（石垣市教委1987）、西海岸の神田貝塚（県教委1980）などがある。本遺跡から西2kmの竿若西遺跡（県教委1979）で貝斧などが採集されたが、土地改良により半壊されている。

12世紀からは、再び土器が出土し始め、石鍋を模倣したとされるもので、13世紀までを新里村期としている。この時期の遺跡も現時点では数遺跡程度であるが、喜田盛遺跡より北方約300mのビロースク遺跡でこの時期を示す白磁玉縁碗やカムイキヤキなどが多く出土している（石垣市教委1983）。

13世紀末～17世紀初頭を中森期としているが、この時期になると遺跡が増加し、海岸線辺部のほぼ全域に見られ60余遺跡を数える。この時期の遺跡は、ビロースク遺跡、国史跡のフルスト原遺跡（石垣市教委1984）のようにやや小高い標高20m前後の段丘上に位置するものが多く、石垣で建物群を区画するものが見られる。中森期でも15世紀以降に遺跡が増加し、本遺跡周辺でも多く見られ、カワナ遺跡群（県教委1979）・平川貝塚（石垣市教委1993c）・石垣貝塚（石垣市教委1993a・b）・大川東遺跡・登野城遺跡（石垣市総務2010）が見られる。また、富野岩陰遺跡（石垣市教委2000）など洞穴や岩陰の利用も見られることや、名蔵シタダル海底遺跡では15世紀後半の青磁・白磁・褐釉陶器の散布が見られ、沈船の存在も想定されている。

近世、17～19世紀は、バナリ焼を指標としてバナリ期と呼称している。また、この時期には名蔵窯跡などの瓦窯や、黒石川窯跡（石垣市教委1993d）などの陶器窯などの生産遺跡が確認され、発掘調査も行われている。近世の八重山を管轄したとされる八重山蔵元跡（石垣市教委1997b）では、当時の石垣や礎石が確認された。

民俗的環境（第3図）

本遺跡を取り囲むように4つの御嶽が位置している（石垣市総務2002）。遺跡の東端は本宮良の主の御嶽（ムトゥメーラヌシューヌオン）があり、1624年に八重山キリシタン事件とされる元宮良頭であった石垣永将が処刑された場所と伝わる場所で、「オンナー」とも言われている。遺跡より約400m北東へ離れた地点には、真乙姥御嶽（マイティバーオン）、西端には大嵩屋の御嶽（フータキヤーヌオン）、北西約200mには後の御嶽（シヌオヌン）がある。これらの御嶽がいつから存在したのかは不明であるが、遺跡の周囲を取り囲むように位置していることは興味深い。



第3図凡例
●御塚
▲井戸



1000m 0 1000 2000 3000m

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

今回の調査については、新川喜田盛 63番地2の道路整備範囲である面積70m²に対して調査区を設定する予定だった。しかしながら、既に隣接する範囲は工事が完了しており、現在も供用している道路であることから安全面に配慮した結果、約幅3m×長16.5m、合計50m²の調査区を設定することになった（第5図）。

発掘調査は、過去の市教委の調査を踏まえて、現代の盛土である地表面から約60～80cmの土は、重機により全体的に掘削した。人力による掘削時の遺物採取については、調査区内を任意に長軸4mごとに区切り、西から東に向けて1、2、3、4グリッド（略す場合は1G…）と呼称して、4つのグリッドを設定した。

まず、近代の遺物包含層である褐色砂層（後述のI層下部）を人力により掘削したが、中森期から近世の遺物も多く出土した。一方、1グリッドにおいては擾乱が厚さ1.5m以上に及んでいたため、遺物が少なく遺構もほとんど確認できなかった。その後、次第に暗褐色砂層（後述のII層）になると遺物が少くなり、近世・近代の遺物も少量混入していたが主体を占めるのは中森期のものであった。そして、地山と考えた黄褐色砂層（後述のIII層）は、上層からの影響で黒っぽくなっているため、明確な遺構ラインが確認できない範囲もあった。そこで、適宜目安として5cmごとに掘り下げて遺構の有無の確認を行い、ピット・土坑を検出できた。このように検出した遺構は半裁を行い、土色の確認、規模の計測、必要に応じて図面・写真的記録を行った。

一方、土坑墓については、上述のピット・土坑がほぼ検出した段階ではまだ確認できていなかった。しかしながら、ピット39を掘削していた際に頭蓋骨を確認したことにより、明確な平面プランを確認するため周辺を20cm程度下げることで土坑墓1を検出した。後述するが、これは土坑墓が他の遺構より下層に作られたというのではなく、埋土がピットの色調よりも淡く地山との判断が困難であったことが原因と考えられた。この段階で遺構確認は終えたと考え、土坑墓1以外のピットを全て掘削し、遺構平面図を電子平板で遺構プランを抑え、それを元に手実測により縮尺20分の1で平面図を作成した。

最終段階として、土坑墓1の調査を進める際に周辺の地山面も黒ずんでいたため、念押しの意味も込めて掘削を行ったところ、後に土坑墓3とした範囲で人骨がまとまって出土してしまい取り上げてしまった。その失敗を受けて、土坑墓1の西側において慎重に掘り下げたところ、土坑墓2を確認することが出来たのであった。

なお、現地での写真撮影は、35mmのフィルムカメラを用いて、各々白黒とカラーリバーサルフィルムを使用した。また、デジタルカメラ（ニコンD70 624万画素）も使用している。

第2節 層序（第5図・図版13）

前述してきたように、本遺跡では既に市教委による発掘調査が行われており、層序を7層として、遺物包含層が2層、地山である無遺物層が4層、最下層に琉球石灰岩が確認されている（市教委2004）。今回の調査では粒径・土色による分層を行い、大きく5層に分けた。その結果、無遺物層の対応が明確ではない部分も残るが、遺物包含層については同様の理解であった。市調査との対応関係が分かるものについては記載する。

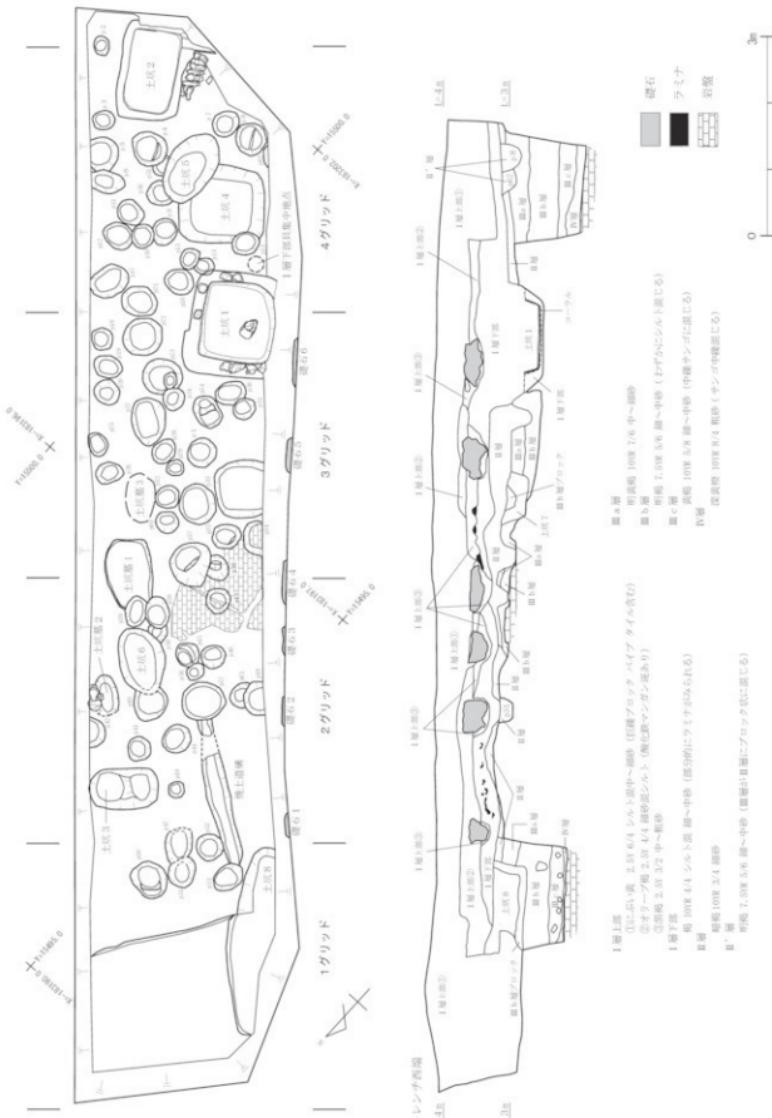
I層上部 現代の盛土及び耕作土

①にぶい黄褐色（2.5Y6/4）シルト混じり細～中砂

巨礫、タイル・コンクリートブロック、パイプ、空缶、プラスチック、ゴムなども多いことから、ここ十数年の造成土と思われる。

②オリーブ褐色（2.5Y4/4）細砂混じりシルト（酸化鉄、マンガン斑あり）

土壤の攪拌も進んでおり、酸化鉄やマンガン斑も見られることから耕作土、水田土壤の可能性もある。



第5図 遺構全体図・南壁断面図

③黒褐色（2.5Y3/2）細～中砂

本層には石灰岩礫石が据えられており、これらを据えるための埋土と思われる。

I 層下部 中森期～近世の遺物も多く含む近代の遺物包含層

褐色（10YR4/4）シルト混じり細～中砂。2・3グリッドでは灰白色中砂がラミナ状に混入している。土坑1・2・6などの埋土でもある。市調査I c層に相当と思われる。

II 層 中森期の遺物包含層

暗褐色（10YR3/4）細砂。近世以降の遺物もわずかに見られるが、混入と考えて良い出土量と思われる。また、多くの遺構の埋土である。石垣市調査II層と相当する。

II' 層 暗褐色（10YR3/4）細砂～中砂

III層がブロック状に混じっていることが多く、砂質の度合いが強い。遺構の埋土でもあるが、ピット8・68では明確にII層を切っていることが南壁断面で確認できた。しかし、このII'層の遺構が全てII層よりも新しいと言い切れるまでは確認できておらず、全体としてはII層の範疇で捉えておく。

III 層 黄褐色砂層

無遺物層のため、地山と思われる。この上面は標高3.3m前後であり、先述したII・II'層を埋土とする遺構はこの面で確認できた。粒径でさらに3層に分けられる。石垣市調査では赤褐色砂層（III層）、白砂層（IV層）、黄褐色砂層（V層）が対応するが、各々の対応関係は確定できなかった。

III a 層 明黄褐色（10YR7/6）中～粗砂

III b 層 明褐色（7.5YR5/6）わずかにシルト混じり細～中砂

III c 層 黄褐色（10YR5/8）サンゴ中レキ混じり粗砂

IV 層 白砂層 浅黄橙色（10YR8/4）サンゴ中レキ混じり粗砂

無遺物層であり、市調査では砂利混じり白砂層としているVI層に相当するものと思われる。

V 層 琉球石灰岩

1グリッドでは深掘りを行い、標高2.1mで確認した。

第3節 遺構

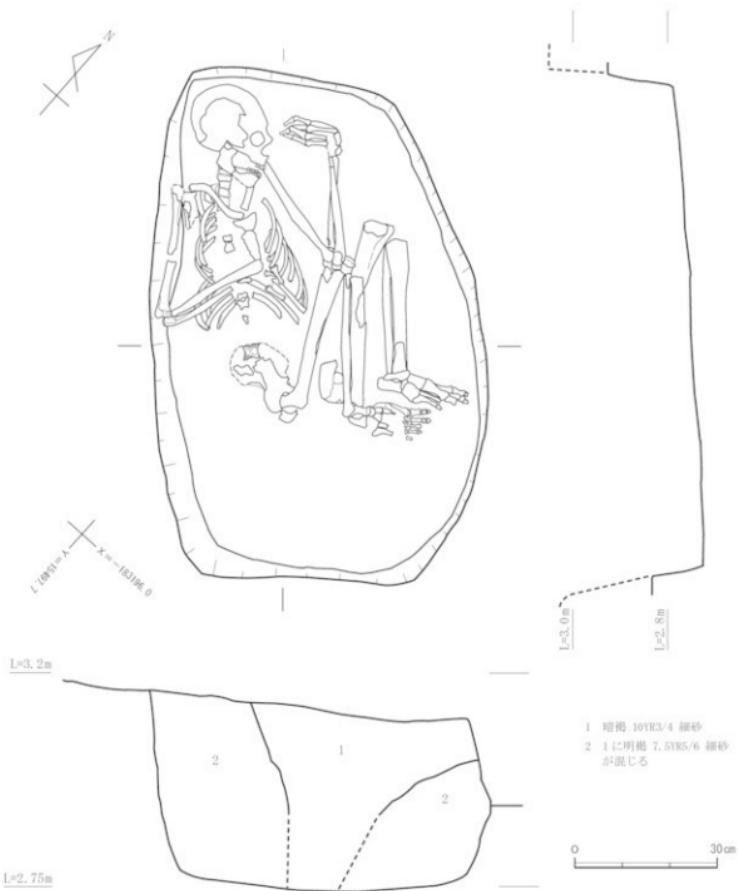
今回の調査で確認した遺構は土坑墓3基、焼土遺構1基、土坑8基、ピット62基、貝集中地点、礫石6基である。全体的な配置を述べると、概然が及んだ1グリッドを除き全体的に遺構が見られるが、2グリッドはその密度がやや低いように思われる。土坑墓は2・3グリッドの北端に集中し、近代の遺構である土坑1・2は4グリッドに位置している。これらの遺構の埋土は大まかに分けると、先述した層序のI層下部、II層、II'層に相当できる。出土遺物との対応であるが、I層下部を埋土とする遺構は近代であるが、II・II'層については瓦や沖縄陶器や染付など近世の遺物が少量見られるが、多くは中森期の土器が主体である。

以下、種類毎に特徴的なものを記載し、個々の規模や遺物等について第1・2表を参照していただきたい。

1. 土坑墓（第6・7図、図版10・11）

2・3グリッド北端に集中するように、土坑墓が3基確認された。壯年女性が埋葬された土坑墓1を中心として、北西側に乳児が埋葬された土坑墓2、南東側に幼児が埋葬された土坑墓3が検出されている。どの土坑墓もその主軸は東に40°の方向である。

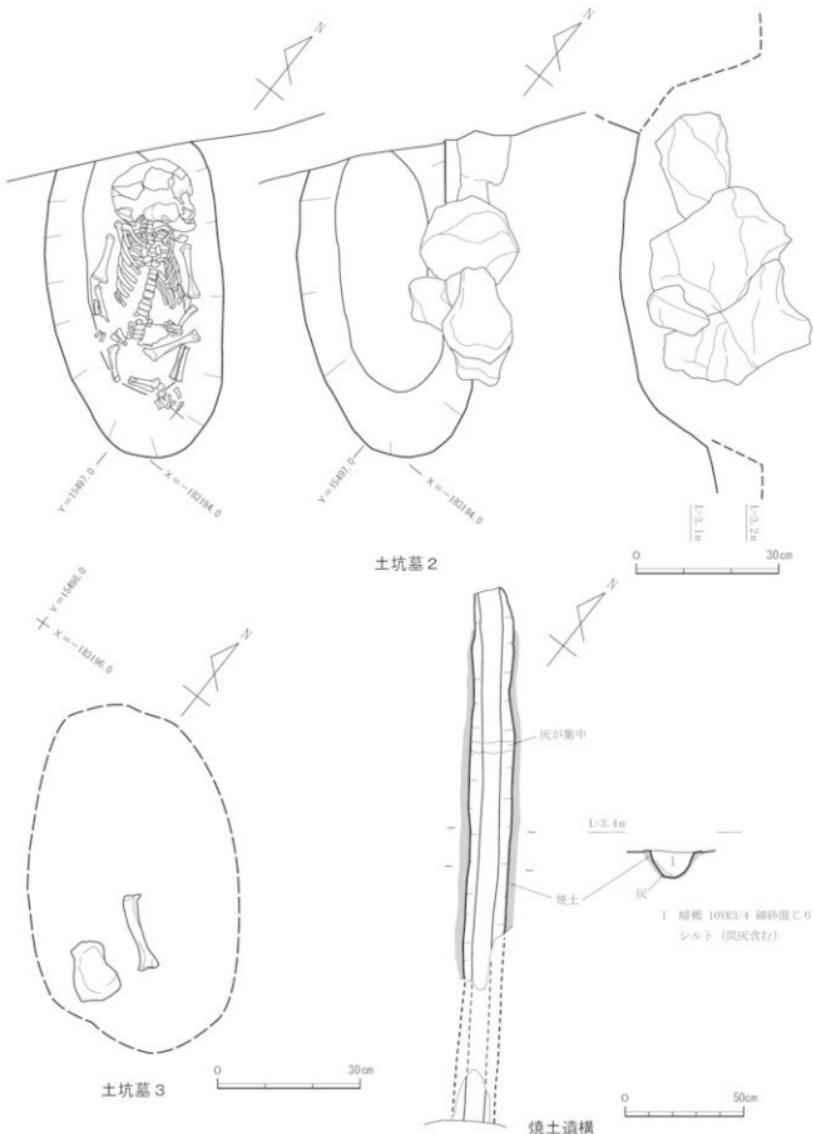
土坑墓1 土中に遺体を埋める埋葬人骨が検出された。土坑は略方形を呈し、その規模は長軸108cm、短軸70cm、深さ40cmを測る。先述したように、本土坑墓周辺は基盤であるIII層自体が黒ずんでいたため、平面プランを明確に抑えられなかったので、周辺を20cmぐらい下げて確認した。被葬者は人骨の状況から壯年女性(30



第6図 土坑墓1

代)と推定される。埋葬姿勢は体を仰向けにし、足を強く曲げる仰臥強屈葬である。頭位は北東を向く。被葬者は、土坑の北西側に偏っており、南西側に $30\text{cm} \times 60\text{cm}$ 程度の空間が見られている。この土坑プランについては先述したように周辺を掘り下げる念押しを行っているので問題はないと考えているが、この空間がある理由については本来は何らかの有機物があったのかなどと考えられるが、現時点では不明である。

被葬者の姿勢を更に細かく記載する。体部は上を向くが、顔は左を向く。左腕は土坑底部に密着しており、上腕を肋骨の脇に配し、肘を上方に強く折り曲げる。手首はさらに折り曲げて指を頭蓋眉間部に向けている。右腕も上腕までは底面壁際に密着させるが、折り曲げた肘はやや上方を向き、肋骨の上に乗せている。椎骨は腰椎骨まで上を向く。左寛骨は上を向くが、右寛骨は内側に倒れている。両足はよく揃っているが、左側に倒れてお



第7図 土坑墓2・土坑墓3・焼土遺構

り、大腿骨を上方に強く折り曲げ、膝から下は下方に向かって強く折り曲げる。踵から先は脛骨とほぼ直角となり、左側を向く。

各関節はそれぞれの骨ときれいに関節し解剖学的位置関係をよく留めており、一部の部分を除いて乱れがほとんどない。乱れが見られる部分は右手骨である。これらは左肱骨内に埋没している。さらに、両膝蓋骨が確認されなかつた。検出時の保存状態は良好で、解剖学的位置関係をきれいに留める人骨であったにもかかわらず、膝蓋骨が確認されなかつたことは大きな疑問である。

以上の検出状況から埋葬状況を考える。人骨は解剖学的位置関係を良く留めており、右手骨を除き乱れがほとんどない。このことは、埋葬直後にはすでに、遺体の周囲が濃密に密閉された環境であったことを示唆する。右手骨のみが乱れている状況は、遺体の腐食にともなって肋骨内に空間が生まれ、肋骨の上に配されていた右手骨が、その中に落ち込んだことを示している。つまり、埋葬された遺体は、肋骨が土圧によって倒れるよりも早い段階に、右手骨が肋骨内に落ち込んでいた可能性が高く、密閉された空間であったことと矛盾しない。

さらに、人骨は強い屈葬姿勢を呈し、両足がきれいに揃った状態で左に倒れて検出された。解剖学的位置関係にみだれない。このことから、埋葬時にはすでに下肢は左を向き、土坑底面にほぼ密着した状態であったことが考えられる。左寛骨は上を向き、右寛骨は内側に倒れる状況で検出されているが、もともと下肢がやや左を向けた状態で埋葬されていれば、遺体の腐食にともなって寛骨が内側に倒れることとなり、矛盾しない。このような状況で埋葬するためには、死亡後、死後硬直が始まる前に下半身を紐などで縛っていた可能性がある。両腕はそろっておらず、自然な配置状況を呈することから、下半身のみを固定していたのだろう。

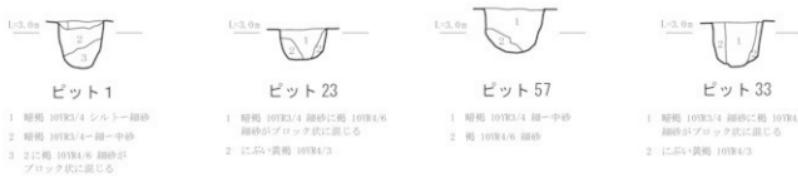
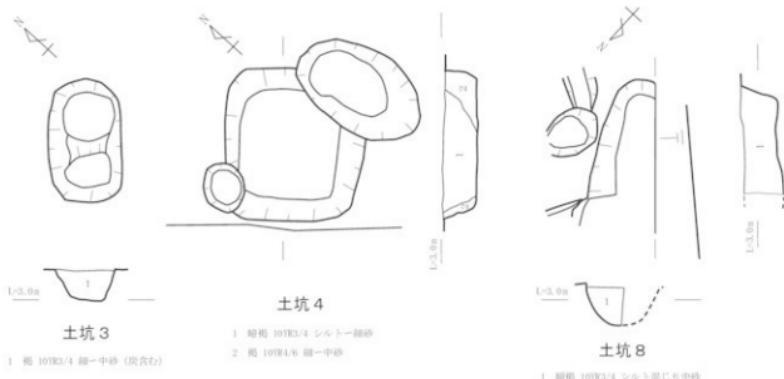
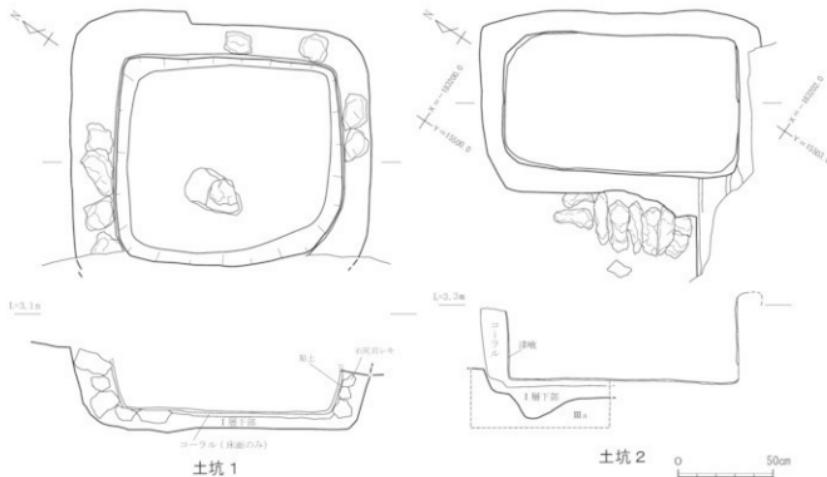
最後に、良好な保存状態で解剖学的位置関係を留めていたのに膝蓋骨が確認されなかつた理由であるが、両大腿骨遠位端、脛骨近位端も壊れた状況であったことから、埋葬前には、すでに膝蓋骨が無くなっていた可能性を指摘したい。その要因として、遺体の下肢を強く折り曲げる必要があったことなどが考えられる。死後硬直が始まっていることや、脆弱なため取り上げが困難だった腰椎骨の向きについても、検出状況で上を向くことが確認できた。人骨は脆く壊れやすいため、検出時点で解剖学的知識に基づき調査を進めることができるとと思われる。

土坑墓2 土中に遺体を埋める埋葬人骨が検出された。土坑は梢円形を呈し、その規模は長軸65cm、短軸33cm、深さ推定20cmを測る。被葬者は9ヶ月前後の乳幼児と推定される。埋葬姿勢は体を仰向けにし、足がやや曲がる。詳しく観察すると、体は上を向くが、顔は土坑墓1人骨と同様左を向く。両腕は土坑墓底面に密着するように両脇に自然に配されており、土坑墓1人骨と異なり折り曲げられてはいない。右足はやや曲がった状況であるが下方を向いている。左足は膝を立てた状態で土坑壁際に支えられる状況であった。一見屈葬に見えるが、乳幼児であることから、もともとやや曲がった状態で自然に埋葬されたものと推定される。この意味で、強い屈葬が意識された土坑墓1人骨とは埋葬状況を異なる。

土坑上部の東側に人頭大の石灰岩礫が3つ配されている。もともと、検出が困難だったため、これ以上の数の石が配されていた可能性もあるが、大きな礫はなかったと記憶する。

土坑墓3 土中に遺体を埋める埋葬人骨が検出された。土坑墓1人が検出されたことから、周辺の掘削を進める過程で確認された。土坑プランを検出することが困難な土壤であり、幼児骨であったことから、その多くを取り上げた状態で確認した。大腿骨のみ現位置で押さえることができた。そのため、詳細な情報を回収することができなかつたが、人骨の所見では、土坑墓2の乳児よりはやや成長した段階の幼児が埋葬されていた。土坑の規模は推測の域をでないが、土坑墓2とほぼ同じサイズであったと考えられる。

人骨の解剖学的所見は、第4章を参照していただきたい。



第8図 土坑・ピット

2. 焼土遺構（第7図、図版11）

焼土遺構は2グリッドで1基確認している。

この遺構は、規模が長軸230cm、短軸18cm、深さ12cmを測り、焼土帯が約2cm見られており、非常に被熱している。埋土はⅡ層で、多くの炭化物が含まれ、部分的に白炭になっているものもある。遺構の両端は別の遺構で切られているため、正確な長軸は不明だが250～280cm程度であったものと思われる。遺物は土器や貝が見られたが多くのない。

3. 土坑（第8図、図版12・13）

土坑は8基確認している。土坑の時期であるが、土坑1・2・6は埋土がⅠ層下部であり、出土遺物では中森期のものも多いが沖縄産陶器・瓦・近代陶磁器が出土しているので、下限は近代とする。土坑4・6・8は清代青花や染付が出土していることから近世の可能性が高く、また土坑5は切り合い関係から土坑4よりは新しい。一方、土坑3・7については土器・青磁・褐釉陶器と中森期の遺物で限定できる。特に土坑3は一定量の土器と青磁剣先蓮弁文碗が共伴してみられ、中森期における食器組成を示す資料と思われる。

土坑の中で特徴的なものとして、土坑1・2がある。これらは形態と構築技法がやや異なるが、時期的に近代であり、漆喰や貼土により床・壁面を固めたという点で共通している。これらの埋土には陶磁器や骨などの多くの遺物が見られ、最終的には廃棄場として利用されていたと思われるが、水を溜めることができるような構造でもある。以下、構築技法を中心にしてそれぞれの特徴を述べる。

土坑1は、約150cmを測る方形の穴を掘削後、土を床面には10cm、壁面は拳大の礫も用いながら20cm程度埋める。次に、床面にはコーラル（石灰岩細礫混じり土）を2cm程度敷き、壁面にかけて厚さ1cm前後の硬く締まった土が貼り付いているような状況で、一辺110cmの方形を呈している。この土の表面は赤褐色を呈しており、いわゆる三和土（叩き土）と呼ばれるようなものに類している。

土坑2は、深さ20cmの穴を掘り、コーラルを床面が5cm、壁面が15cmを積み固めて、その表面に漆喰を張っている。この内法は長軸125cm、短軸75cmで平面が長方形を呈し、深さは47cmを測る。南東隅には南から水を通すような幅17cm、深さ2cmの溝状の注ぎ口がある。

その他の土坑は性格を限定できるものはないので、特徴をまとめる。土坑3・5・6・8は長軸1m前後の平面が梢円形を呈している。また、土坑4は140×105cmの平面が方形を呈しており、埋土は両端が流れ込むような堆積である。

4. ピット（第8図、図版13）

ピットは62基確認している。埋土はピット38・39のみがⅠ層で、他はⅡ層もしくはⅢ層である。径は30～50cmの間である。深さで見ると、10cm以下が14基、11～29cmが30基、30～45cm以上が18基である。

ピットの多くは、その規模から柱穴と考えられるもので、堆積状況からでもピット23・33のように両側と中央部の埋土に違いが見られ、柱痕と柱を立てる際の埋め土という関係が想定される。しかしながら、本調査区は狭小のためもあり、明確な建物プランを確認することは出来なかった。ただ、先述した土坑墓と切り合うものは先述のⅠ層を埋土とするピット39しかなかったため、両者は同時性をもったものと考えられる。

5. 貝集中地点（第5図、図版12）

4グリッドにおいて、Ⅰ層下部を掘削中に、径50cmの範囲にアラスジケマンガイなどの二枚貝が集中していた地点があった。Ⅰ層下部は近代の包含層であるが、後述するが貝種はⅡ層の遺構に近い傾向があった。

6. 磁石 (第5図、図版 13)

南壁際にて長さ40～60cm、厚さ20～40cmの石灰岩礎石を6基確認した。その間隔を(cm単位)で記すと、西から礎石1(170) 純石2(105) 純石3(85) 純石4(205) 純石5(140) 純石6となる。これらは現在の道路の軸線に並行しているので、一つの建物跡であった可能性が高い。時期的には、I層下部を掘り込み、耕作土と考えられるI層上部②に覆われているので、現代の中でも古い段階と思われる。

第1表 請構觀察一覽（1）

第2表 遺構觀察一覽（2）

毫毛例・理上・I (I 層下部) II (II 層) II' (II' 層)・遺物…沖施 (沖縄産施釉陶器)、沖無 (沖縄産無釉陶器)。貝類は各遺構の最低個体数であるので、第31・32表の合計とは合わない。

第4節 遺物

遺物の種類としては、土器、中国産陶磁器（青磁・白磁・青花・陶器）、タイ産陶器、台湾産陶器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、近代陶磁器、金属製品、石製品、骨製品、貝製品、骨製品、円盤状製品、貝類遺体、脊椎動物遺体がある。

遺物の多くはI層下部から出土しており、中森期から近代までのものが出土している。II層からは、量的には少なくなっているが、中森期の遺物が主体である。遺構からの遺物は多くはないが、土坑3では少数の青磁・陶器と一定量の土器が出土しており、その組成を考える上で重要と思われる。一方、ピットからの遺物量は多くはないが、その主体は土器である。

第3表は、獸魚骨・貝類以外の遺物の個体数と全重量である。個体数は、土器・陶磁器は種類ごとに口縁数と底部数の多い方を採用し、胸部や把手等のみの場合は1個体として数えた。陶磁器以外は、全破片数とした。また、瓦は大量ではあったが全て小片であったこと、近代陶磁器は目付くものを取り上げたので、重量のみ計測した。これにより土器・陶磁器類の個体数による比率を算出すると土器68%、中国産陶磁器14%、沖縄産陶器15%、本土産陶磁器2%である。以上のように圧倒的に土器が多く、陶磁器は中国産・沖縄産のものが多い。

以下、種類毎にその特徴を記載し、個々の遺物は観察表にまとめた。

第3表 遺物出土状況

	土器	中国産					タイ産 褐釉陶器	台湾產 陶器	本土產			沖縄產			陶磁器 小計
		青磁	白磁	青花	色絵	褐釉陶器			陶器	染付	色絵	施釉陶器	無釉陶器	陶質土器	
個体数	711	49	22	50	2	5	1	1	10	11	1	92	61	5	310
重量(kg)	91.47	0.99	0.19	0.83	0.02	4.79	1.64	0.04	0.20	0.36	0.04	2.77	19.20	0.13	31.21

	金属 製品	骨製品	石製品	貝製品	円盤状 製品	瓦	近代 陶磁器	総計	
								(kg)	(kg)
個体数	4	3	2	28	6	-	-	1064	
重量(kg)	0.19	0.004	0.05	2.18	0.30	62.02	2.78		190.20

1. 土器 (第9～15図、図版14～17、第4～7表 1～59)

土器の大半は中森式土器（高宮1981）に相当する土器群である。だが、少数ではあるがバナリ焼の特徴が見られるものもあるので、後述する。

中森式土器は、外耳をもち直線的に胸部が伸びる錐形土器が主体とされており、この前身は石鍋を模倣した新里村式土器、「く」の字状口縁をもつビロースク式土器と考えられている（金武1994）。一方、中森式土器は西表島上村遺跡や慶来慶田遺跡で多く出土し様々なタイプがあり細分できるものとされており（県教委1991・1999）、合田芳正（1986）や新里貴之（2004）の研究がある。近年の成果である新里の分類編年案では、緩やかに外反する桃里恩田タイプ→直線的に伸びる石垣タイプ→口縁部がケズりにより厚みが薄くなり断面が傘ブラシ状になる上村タイプの変遷を想定されている。

以下、本調査出土土器について、全体としての特徴をまとめた後に、既往の型式等との対応を検討する。

成形・調整技法 土器の成形は全て粘土紐を積み上げて行っており、底部は全体的に広く平坦なものが多く、まず粘土を円形の板状に加工したものと思われる。

外面の調整については、まずケズリにより大方の形を作るのであるが、その工具幅は0.8～2.5cmのものがあるが、1.5cm前後のものが多い。また、16・17・20・57のように工具の筋目が粗いものもある。

その後はミガキにより平滑に仕上げていくものが多く、明瞭にその痕跡が分かりにくいものもあるが、0.5cm前後の浅い筋状のものが重なっているのが見え、器面が研磨され光沢がある。一方、胸部にナデ調整されている

もの（7・36など）や、ハケ調整されるもの（1）もあるが、量的には少ない。最後の仕上げとして口縁部にヨコナデ調整を行うことにより、胴部との境に稜が生まれ口縁部が横帯状になっているものが多く、これを口縁帶と称する。この口縁帶より下位には、ケズリの痕跡が残るものも多い。

内面は主にヨコナデで調整されるが、幅1.3～2.0cmの板状工具の痕跡を使用した痕跡が残るものもある（7・21・24・34・41～44など）。また、内面でも口縁帯に対応する部分はヨコナデが丁寧に施され、比較的平滑なものが多い。

器形 明確に認識できたものは、鍋と壺である。

鍋については全体のプロポーションからまずA・B類に分け、B類は口縁部の形態からさらに3つに細分した。鍋A(1~5・7) 口縁から脇部へほぼ直角的に伸びていくタイプ。1はほぼ全形を復元でき、底部が平坦である。基本的にはいわゆる外耳、細長い把手を有するものと思われる。また、調整については1・7のようにナデによりほとんどケズリの痕を残さないものが多いようである。

鍋B 約60～70度の角度で伸びていくタイプ。調整は口縁帯のナデが徹底されているが、その下位はミガキによるが、ケズリの痕を残すものも多い。このタイプは口縁帯の形態から3つに細分した。

鍋 B 1 (6・8~20) 口縁帶がほぼ直線的なもの。6・8は把手を有している。胴部まで復元できたもののが少ないが、9は平底で深さは20cmのものであるが、6・10・11のようにそれよりも深い器形で底部の形態は分からぬ。口縁の形態は、胴部とあまり厚さが変わらないものが多いが、13~16のようにやや厚くなり丸みをもつものも見られる。

鍋 B 2 (21 ~ 25) 口縁帯が外反するもの。口縁帯と胸部の稜が B 1 よりも明瞭である。口縁帯の長さを見ると、22・23 は 5 cm 以上と他のものより長い。図化はしなかったが、把手を有するものと思われる。

鍋B3 (26・27・33～36) 口縁帶が断面長方形の肥厚帶をもつもの。胸部との境は明瞭で、B2と同様に口縁帶が外反することから、近いタイプと思われる。把手があるものは確認できなかった。

出土量としては鍋Bが大半を占め、その中でも鍋B-1が多い傾向にある。

上記以外のものについては、これまであまり例が見られていないものである。28・29は口縁が短く直立しやや深めの器形をもつ。30・31は厚手で口縁端部が短く外反する。32は口縁端部が方形状に呈する。

表(37:39~44) 幾つかのタイプが見られるが、量自体が多くないので、個々の特徴を述べる。

37は薄手で口縁端部が短く外反するものであまり例がないタイプと思われる。

39は口縁が狭く脣長の器形をもつ可能性がある。

40・41は口縁の長さがやや異なるが、やや外反するものであまり肩が張らない器形と思われる。

42は直立する口縁で球形の胞子をもつものである。44もやや小振りだがほぼ同様の器形と思われる。

第4表 土器出土状况

43は肩が張る器形である。

底部（46～55・57・59） 今回の資料では、口縁と底部が接合したものは多くない。しかしながら、市教委調査の資料（石垣市教委2004）などをもとに、器形との対応関係を示しておきたい。46・47は平底で脣部は大きく外に伸びることから、壺ではないかと考えられる。48～51は丸みをもった平底で、おそらく鍋A類の可能性が高いが、他遺跡でも接合資料は少なく断定はできない。52・53は平底で脣部は直角的であり、他遺跡でも見られることから、鍋A類のものと思われる。54・55については、鍋か壺かは限定できない。

バナリ焼の特徴をもつもの（38・45・56・58） 八重山地域には近世の土器とされるバナリ焼があり、砂礫や貝殻片等を多く混入させ厚手の土器で、壺・鉢・香炉などの器形がある。1857年まで新城島で作られた土器とされ、古墓で蔵骨器として使用されていることが多い。特徴とする胎土にもバリエーションが見られ、生産地が新城島だけであったかどうかについても色々な議論があり、概念設定も含めて研究途上の土器である。

このバナリ焼は集落跡で出土することは少ないとされるが、市教委が行った本遺跡の調査では一定量出土している（石垣市教委2004）。その特徴として、均一な器厚、断面の色調が黒ずむこと、調整については上半が丁寧なナデ、下半が粗いケズリといった点が挙げられている。また、これらには胎土にサンゴが含まれているものも確認している。今回の調査で量的には少なく、全形が分かるものがないが、この特徴をもつものを説明する。

38は比較的薄手であるが頸部が短く外側に屈曲するもの、45は厚手の壺の把手であるもので、バナリ焼で見られる器形である。

56・58は厚めで丸底の底部で器形は限定できないが、胎土や色調からバナリ焼の特徴とした。

小結 以上、本調査の土器はバナリ焼の特徴をもつものも少量見られるが、大半は中森式の範疇にあるとした。ここでは、既往の研究をもとに量的に多く編年研究がなされている鍋型土器を中心に若干まとめる。

鍋Aは、上村遺跡I類、慶來慶田城遺跡I類、石垣貝塚の外耳のものに類似しており、新里分類（新里2004）では石垣タイプIに対応するものと思われ、14世紀後半～15世紀前半とされているようである。

鍋B 1は上村遺跡II類の一部、石垣貝塚の直口縁のものに類似しており、新里分類の石垣タイプIIに対応するものと思われ、15世紀後半～16世紀とされている。

鍋B 2は上村遺跡III類と同様に外反しているが、口縁帯の長さが短い点が異なっており、つまりこれを指標とする新里分類の上村タイプよりも、石垣貝塚の外反口縁のものに近い印象がある。この特徴からすると、新里分類での石垣タイプIIと上村タイプとの中间的なものと考えられる。そのように考えると、上村タイプは16～17世紀の時期幅で考えられており、その中でも古手と考える16世紀代に収まる資料とも思われる。

鍋B 3は、石垣貝塚の肥厚口縁のものや中森貝塚の口縁に膨らみをもつものに近いものがあり、新里によると上村タイプとほぼ同時期と位置付けているようだ。

第5章で詳述するが、鍋Bが主体的に出土していることから、時期幅としては15世紀後半～17世紀のものと思われる。その中でも鍋B 1・2が多いので、15世紀後半～16世紀が主体的な時期と考えられる。

第5表 土器観察一覧（1）

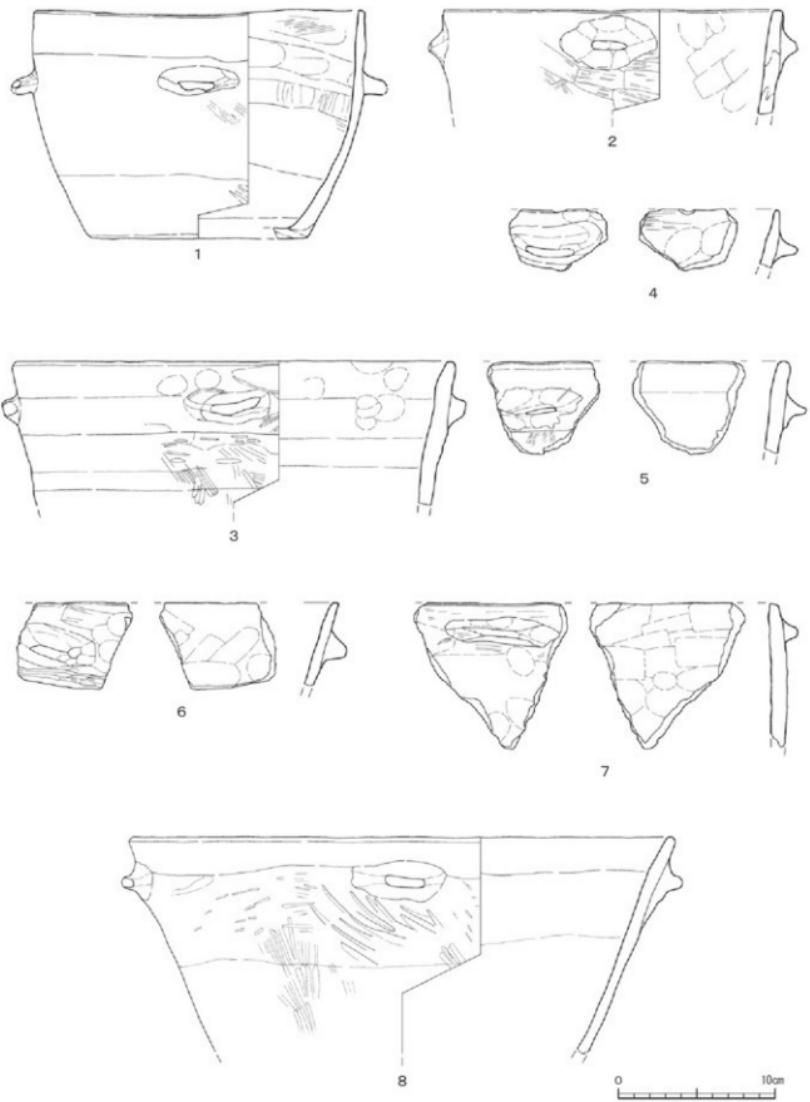
図No.	器形	法量		色調		混入物	成形・調整など		その他	出土地点	
		口縁	基部	底縁	外面		断面	内面			
1 鍋A		21.0	14.6	13.4	明褐色	明褐色	明褐色	少	一部けわち、全面コケ。把手貼付後けわち。	把手（残存長4.1cm、幅1.6cm）	2G 土坂3
2 鍋A		21.6	—	—	橙	純黄橙	橙	少	けわち（0.8cm）後、上部をけわち。把手貼付後けわち不徹底。	把手（長5.0cm、幅0.8cm、厚2.0cm）	I層下部
3 鍋A		27.8	—	—	明赤褐色	純黃橙	明赤褐色	多	けわち後、口縁部（4.6cm）をけわち。右下からけわち。把手貼付後けわち。	把手（長4.2cm、幅1.0cm、厚2.0cm）	不明
4 鍋A		—	—	—	明赤褐色	明赤褐色	橙	少	把手貼付後けわち。	把手（長5.0cm、幅1.2cm、厚1.9cm）	2G I層下部
5 鍋A		—	—	—	明赤褐色	橙	橙	多	口縁部（4.5cm）はけわち。把手貼付後けわち。	把手（残存長4.9cm、幅1.2cm、厚さ1.7cm）	4G I層下部

第6表 土器觀察一覧（2）

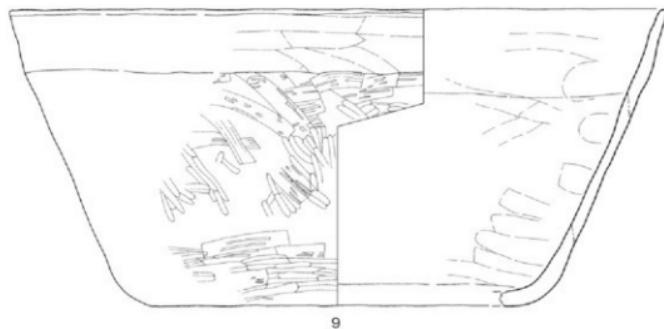
図名	器形	法量		色調		埋入物	成形・調整など		その他	出土地点
		口径	身高	底径	外面		外面	内面		
6-鍋B-1	-	-	-	筒型 灰褐色	筒型 灰褐色	少	33x13mm後、口縁部 (4.6cm) 33x13mm。把手貼付後33x13mm。	粗打。	把手 (焼成灰 5.2、幅1.3、厚 2.4cm)	3G II層
7-鍋A	-	-	-	筒赤褐色 黄赤褐色	赤褐色	多	33x13mm。特に上部は丁寧。	上部は板ひつり、下部は粗江 板比較的の飛出。	把手 (長さ6.7、幅 3.0、厚1.6cm)	4G I層下部
8-鍋B-2	34.8	-	-	筒型 灰褐色	筒型 灰褐色	多	33x13mm (1.4cm) 後、上部は33x13mm、下部は33x13mm。把手貼付後33x13mm。	口縁部 (焼成灰 5.1)、把手 (焼成灰 4.2)不明) が付着。	把手 (長さ3.5、幅 1.1、厚1.6cm) 外面黒斑あり。	4G P13
9-鍋B-1	41.6	20.0	23.0	横 灰褐色	横 灰褐色	多	33x13mm (1.5cm) 後、口縁部 (4.6cm) 33x13mm。把手貼付後33x13mm。	33x13mm。粗江板部分的に理 る。	外面黒斑2ヶ所 (1つは径 11cm)	4G I層下部
10-鍋B-1	40.6	-	-	筒型 横 横	横	多	33x13mm後、口縁部 (5.0cm) 33x13mm。下部は丁寧なびつり。	33x13mm。上半は丁寧。	外面16cm前後の黒 斑、内面は全体的に 黒斑。	2G I層下部・ II層・P36
11-鍋B-1	33.0	-	-	明赤褐色 明赤褐色	横	多	33x13mm (1.6cm) 後、口縁部 (2.0cm) 33x13mm。把手貼付後33x13mm。	上部は33x13mm、下部は板ひつり。 器面2平面。	4G I層下部	
12-鍋B-1	37.5	-	-	横 横	横	少	33x13mm (1.5cm) 後、口縁部 (2.5cm) 33x13mm。下部は33x13mm。	33x13mm、上半は丁寧。	4G 土坂5・ I層下部	
13-鍋B-1	29.5	-	-	赤褐色 明赤褐色	明赤褐色	少	33x13mm (1.5cm) 後、口縁部 (2.5cm) 33x13mm。下部は33x13mm。	33x13mm、上半は丁寧。	2G I層下部	
14-鍋D-1	-	-	-	明褐色 明褐色	明褐色	多	33x13mm (1.5cm) 後、口縁部 (4.5cm) のやや粗いひつり。下部は33x13mm。	33x13mmだが、やや粗く器面が 荒れ。	口縁部等や黒 斑。	1G I層
15-鍋B-1	42.0	-	-	明赤褐色 筒型	横	多	33x13mm (1.3cm) 後、口縁部 (2.5cm) のやや粗いひつり。下部は33x13mm。	やや粗いひつりだが、下部は 板ひつり。	4G 土坂4	
16-鍋B-1	-	-	-	灰褐色 灰褐色	筒型	多	33x13mm (1.3cm) 後、口縁部 (2.5cm) 33x13mm。	33x13mm、粗江板残る。	全体的に色調が暗 く。	4G 土坂1
17-鍋B-1	-	-	-	明赤褐色 明赤褐色	明赤褐色	多	33x13mm (1.3cm) 後、部分的に 33x13mm。	33x13mm、粗江板残る。	ややくろ口縁部のみ の堆存。	1G I層
18-鍋B-1	-	-	-	明褐色 灰褐色	明褐色	多	33x13mm (1.3cm) 後、口縁部 (4.0cm) 33x13mm。	33x13mm、粗江板少し残 るが全体的に平滑。	2G 土坂3	
19-鍋B-1	-	-	-	横 横	横	多	33x13mm (1.5cm) 後、口縁部 (4.0cm) 33x13mm。下部は33x13mm。	33x13mm、口縁部はやや外 反。	内面に黒色物 (炭 か不明) 付着。	1G I層
20-鍋B-1	-	-	-	横 筒型	明赤褐色	多	33x13mm (1.4cm) 後、口縁部 (4.6cm) 33x13mm。	33x13mm、部分的に板の痕跡も 見られる。	外縁、口縁より下 部は黒斑。	4G P8
21-鍋B-2	34.0	-	-	明赤褐色 明赤褐色	明赤褐色	多	33x13mm (1.5cm) 後、口縁部 (4.0cm) 33x13mm。下部は33x13mm。	33x13mm、板 (1.3cm) の痕跡あ る。	3G I層下部	
22-鍋B-2	36.2	-	-	横 横	筒型	多	33x13mm (2.0cm) 後、口縁部 (6.2cm) 33x13mm。	33x13mm。下部は33x13mm。	内面、部分的にう すく黒斑 (黒斑か り)。	3G I層下部
23-鍋B-2	41.4	-	-	横 横	筒型	多	33x13mm (1.5cm) 後、口縁部 (5.2cm) 33x13mm。下部は33x13mm。	33x13mm。器面の剥離が著しいが、おそ らく33x13mm。	内面、うすく黒斑 (黒斑か)。	3G P17
24-鍋B-2	-	-	-	筒型 筒黃褐色	筒型	少	33x13mm (1.5cm) 後、口縁部 (4.0cm) 33x13mm。下部は33x13mm。	33x13mm、板 (2.0cm) の痕跡あ る。	外縁、うすく黒斑 (黒斑か)。	2G 土坂3
25-鍋B-2	-	-	-	筒型 横	横	多	口縁部 (3.5cm) 33x13mm。下部は 33x13mm。33x13mm。	33x13mm。	1G I層	
26-鍋B-3	23.6	-	-	明赤褐色 明赤褐色	筒型	少	口縁部 (3.0cm) 33x13mm。肥厚し、33x13mm。把手 (3.4cm) 33x13mm。	やや粗いひつり、粗江板も目 立つ。	4G I層下部	
27-鍋B-3	-	-	-	明赤褐色 横	筒型	多	口縁部 (4.8cm) 33x13mm。肥厚し、33x13mm。把手 (3.4cm) 33x13mm。	33x13mm、器面は平滑。	内面、部分的に黒 斑 (黒斑か)。	1G P47・51
28-鍋	24.0	-	-	横 筒型	筒黃褐色	多	口縁部 (1.8cm) 33x13mm。下部は33x13mm。器面は33x13mm。	33x13mm。板の痕跡あり。器面 は剥離 (33x13mm)。	外縁、部分的に黒 斑 (黒斑か)。	4G I層下部
29-鍋	-	-	-	横 横	明褐色	少	口縁部 (1.8cm) 33x13mm。下部は33x13mm。器面は33x13mm。	33x13mm。下部は33x13mm、器面は平 滑。	内面は全体的に黒 斑。	3G I層下部
30-鍋	-	-	-	横 横	明褐色	多	33x13mm。端部に棗が見られる。下 部は33x13mm。	33x13mm。	3G I層下部	
31-鍋	-	-	-	明赤褐色 筒型	筒型	多	口縁部 (1.5cm) 33x13mm。肥厚し33x13mm。下部は33x13mm。	33x13mm。脚部との境に稜あ る。	1G P50	
32-鍋	-	-	-	赤褐色 赤褐色	筒型	多	口縁部 (1.5cm) 33x13mm。肥厚し33x13mm。下部は33x13mm。	33x13mm。板による33x13mm。	口縁部は黒斑。	2G 土坂3

第7表 土器観察一覧（3）

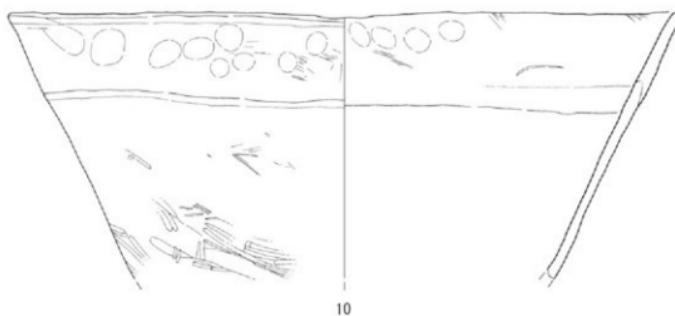
図No	器形	法量		色調	混入物	成形・調整など		その他	出土地点			
		口径	器高			外面	内面					
33 鋼B 3	32.4	—	—	明赤褐色	明赤褐色	多 少 ^(2.5cm)	口縁部 (2.6cm) は ^(2.5cm) 。下部は ^(3.1cm) 。	口縁部 ^(2.5cm) 、指圧が多く残る。	4 G 1層下部			
34 鋼B 3	33.0	—	—	明赤褐色	明赤褐色	多 少 ^(2.5cm)	口縁部 (2.0cm) は ^(2.5cm) 。下部は ^(3.1cm) 。	口縁部 ^(2.5cm) 、指圧があり。	4 G 1層下部			
35 鋼B 3	38.6	—	—	明赤褐色	明赤褐色	純橙	口縁部 ^(2.5cm) 後、口縁部 (4.0cm) は ^(2.5cm) 。下部は ^(3.1cm) 。	丁寧な ^(2.5cm) で、器面は平滑。	4 G 1層下部			
36 鋼B 3	40.4	—	—	明赤褐色	純橙	橙	口縁部 ^(2.5cm) 後、口縁部 (3.5cm) は ^(3.0cm) 。	丁寧な ^(2.5cm) で、器面は平滑。 下部は ^(3.1cm) 。	4 G 1層下部			
37 盆	16.0	—	—	明赤褐色	橙	橙	口縁部は丁寧な ^(2.5cm) 。	口縁部 ^(2.5cm) 。口縁部は丁寧。	2 G 土坑3			
38 盆	20.4	—	—	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	多 少 ^(2.5cm)	口縁部 ^(2.5cm) 、特に口縁部は丁寧。	口縁部 ^(2.5cm) 。指圧部 ^(2.5cm) 。	4 G 土坑1		
39 盆	14.3	—	—	橙	橙	純橙	多 少 ^(2.5cm)	口縁部 ^(2.5cm) 。特に口縁部は丁寧。	口縁部 ^(2.5cm) 。指圧部 ^(2.5cm) 。	不明 1層下部		
40 盆	21.2	—	—	明赤褐色	純橙	純橙	多 少 ^(2.5cm)	口縁部 ^(2.5cm) 、指圧部 ^(2.5cm) 。	口縁部 ^(2.5cm) 。指圧部 ^(2.5cm) 。	2 G 土坑3		
41 盆	21.2	—	—	橙	橙	橙	多 少 ^(2.5cm)	口縁部 ^(2.5cm) 。指圧部 ^(2.5cm) 、板の痕跡後ある。胴部は ^(3.5cm) 。	口縁部 ^(2.5cm) 。指圧部 ^(2.5cm) 。板の痕跡後ある。胴部は ^(3.5cm) 。	4 G 1層下部		
42 盆	19.0	—	—	明赤褐色	橙	橙	多 少 ^(2.5cm)	口縁部 ^(2.5cm) 。指圧部 ^(2.5cm) 、板 ^(2.5cm) 。胴部は ^(3.5cm) 。	口縁部 ^(2.5cm) 。指圧部 ^(2.5cm) 、板 ^(2.5cm) 。胴部は ^(3.5cm) 。	不明 1層下部		
43 盆	14.6	—	—	明赤褐色	橙	橙	多 少 ^(2.5cm)	口縁部 ^(2.5cm) 。指圧部 ^(2.5cm) 、板 ^(2.5cm) 。胴部は ^(3.5cm) 。	口縁部 ^(2.5cm) 。指圧部 ^(2.5cm) 、板 ^(2.5cm) 。胴部は ^(3.5cm) 。	3 G 1層下部		
44 盆	19.6	—	—	明赤褐色	明赤褐色	純橙	少 少 ^(2.5cm)	口縁部 ^(2.5cm) 。指圧部 ^(2.5cm) 後、 丁寧な ^(2.5cm) 。	丁寧な ^(2.5cm) 、板 ^(2.5cm) 。	2 G 土坑3		
45 盆(把手)	—	—	—	赤褐色	灰褐色	赤褐色	少 少 ^(2.5cm)	手づくね成形後。 ^(3.5cm)		3 G 1層下部		
46 底部(蓋)	—	—	—	13.6	純橙	灰褐色	黑褐色	多 少 ^(2.5cm)	胴部 ^(2.5cm) 。底部 ^(2.5cm) 。	内面は全体的に黒褐色。	3 G 1層下部	
47 底部	—	—	—	16.6	明赤褐色	純橙	純橙	多 少 ^(2.5cm)	全体的に ^(3.5cm) 。	内面、黒褐色。	4 G 1層下部(瓦集中地)	
48 底部	—	—	—	17.0	明赤褐色	灰褐色	橙	多 少 ^(2.5cm)	胴部・底部共に ^(14本/1.2cm) 後。 ^(3.5cm)	TF ^(2.5cm)	3 G 1層下部	
49 底部	—	—	—	15.4	明赤褐色	橙	橙	少 少 ^(2.5cm)	胴部 ^(2.5cm) ・ ^(3.5cm) 。	TF ^(2.5cm)	2 G 土坑3	
50 底部	—	—	—	13.4	純橙	橙	橙	多 少 ^(2.5cm)	胴部・底部共に ^(3.5cm) 。	胴部 ^(2.5cm) 、底部 ^(2.5cm) 。	内面、黒褐色。	4 G 1層下部
51 底部	—	—	—	14.0	明赤褐色	明赤褐色	橙	多 少 ^(2.5cm)	胴部板 ^(2.5cm) ・ ^(3.5cm) 。底部 ^(2.5cm) 。	TF ^(2.5cm)	不明 1層下部	
52 底部(鍋A)	—	—	—	16.0	純橙	橙	明赤褐色	多 少 ^(2.5cm)	底部 ^(2.5cm) (1.5cm)。上方は ^(2.5cm) 。	内面、部面的に黒変。	4 G 1層下部	
53 底部(鍋A)	—	—	—	15.2	純黄橙	灰褐色	黄褐色	少 少 ^(2.5cm)	胴部 ^(2.5cm) 。	TF ^(2.5cm)	1 G 1層下部	
54 底部	—	—	—	11.0	純橙	灰褐色	純黄橙	少 少 ^(2.5cm)	器面の剥離が著しい。	胴部 ^(2.5cm) ・板 ^(2.5cm) 。	2 G 土坑3	
55 底部	—	—	—	10.4	明赤褐色	灰褐色	橙	多 少 ^(2.5cm)	胴部板 ^(2.5cm) ・ ^(3.5cm) 。底部 ^(2.5cm) 。	胴部 ^(2.5cm) 。	3 G P28	
56 底部	—	—	—	明赤褐色	灰褐色	明赤褐色	多 少 ^(2.5cm)	TF ^(2.5cm) 。	胴部 ^(2.5cm) ・板 ^(2.5cm) 。底部 ^(2.5cm) 。	4 G 土坑1		
57 底部	—	—	—	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	多 少 ^(2.5cm)	胴部・底部共に粗い ^(2.5cm) (1.6cm)。	TF ^(2.5cm) 。	2 G II層		
58 底部	—	—	—	明赤褐色	灰褐色	明赤褐色	少 少 ^(2.5cm)	TF ^(2.5cm) 後、丁寧な ^(2.5cm) 。	TF ^(2.5cm) ・板 ^(2.5cm) により平滑。	3 G 1層下部		
59 底部(鍋A)	—	—	—	純橙	橙	純橙	多 少 ^(2.5cm)	TF ^(2.5cm) 。	一定方向 ^(2.5cm) 。	内面、部面的に黒変。	2 G 土坑3	



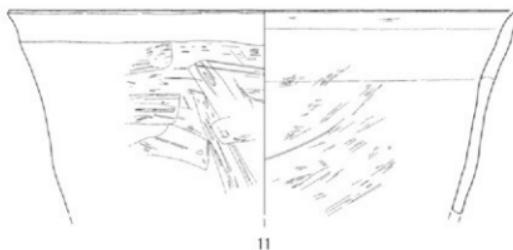
第9図 土器 1



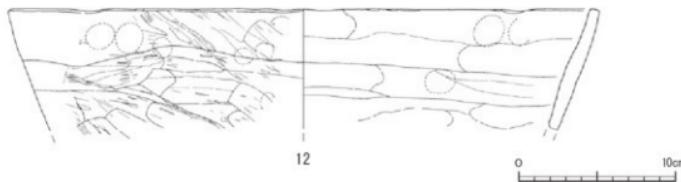
9



10



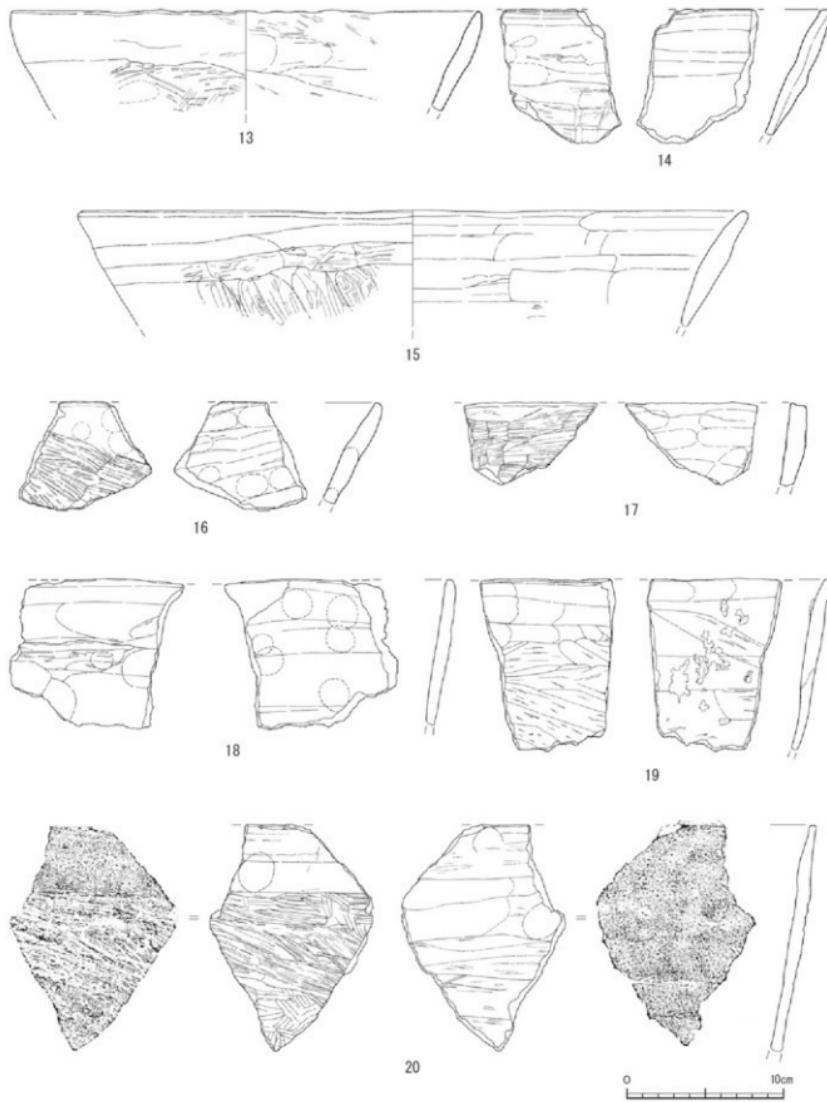
11



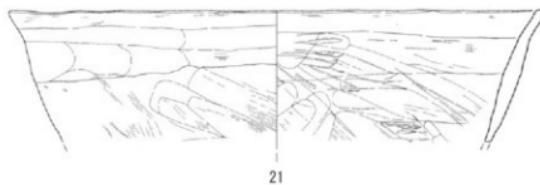
12

0 10cm

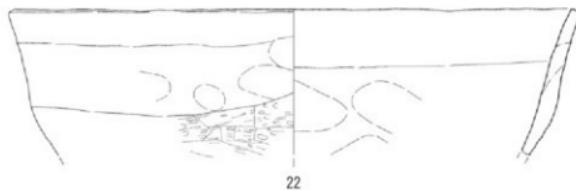
第10図 土器2



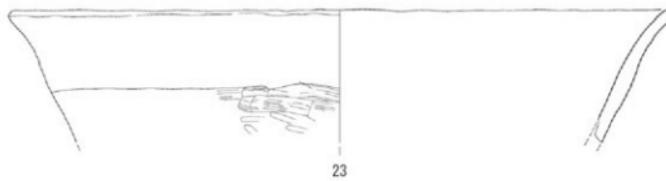
第 11 図 土器 3



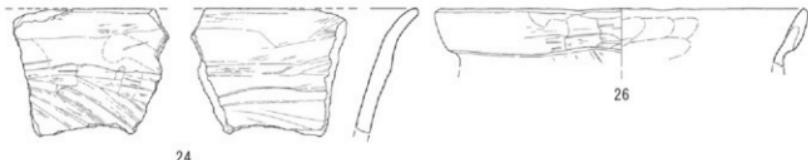
21



22



23



24



26

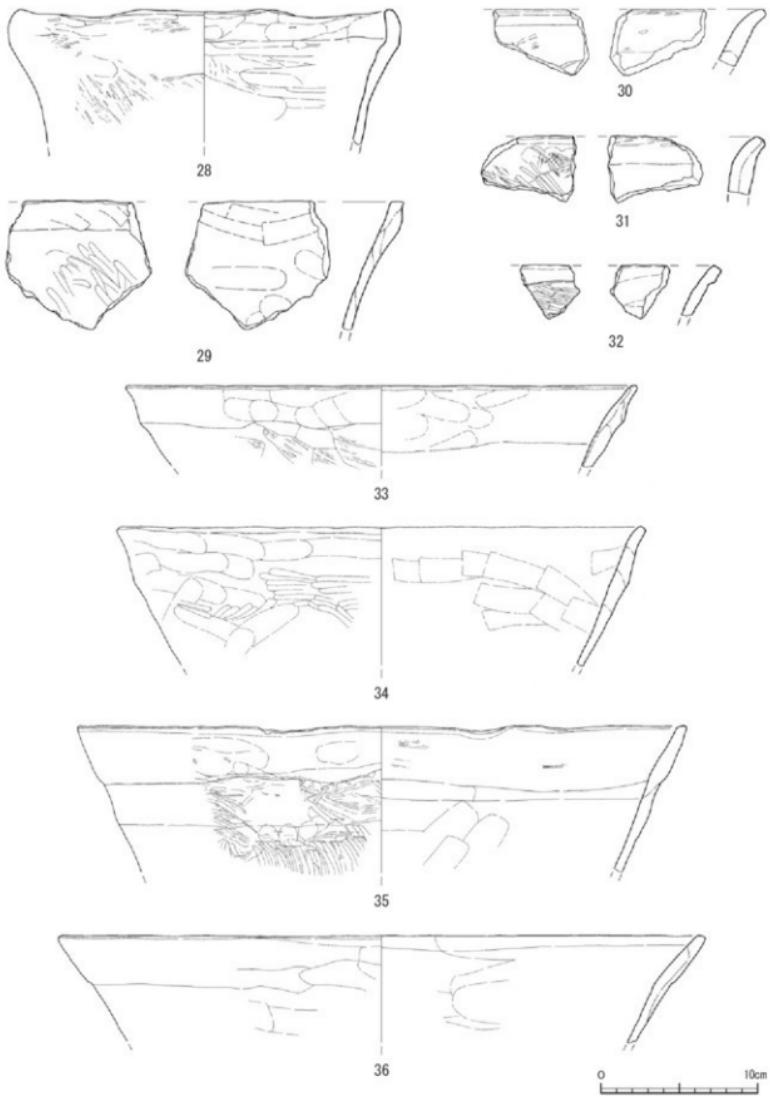


25

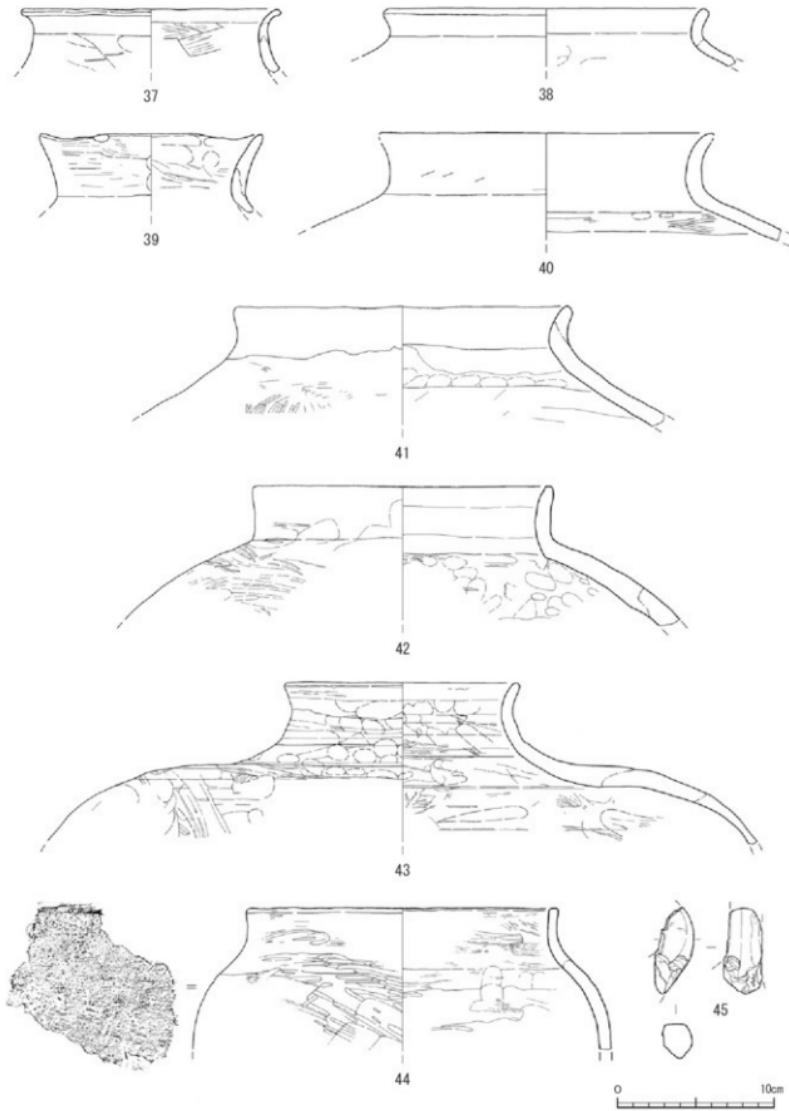
27



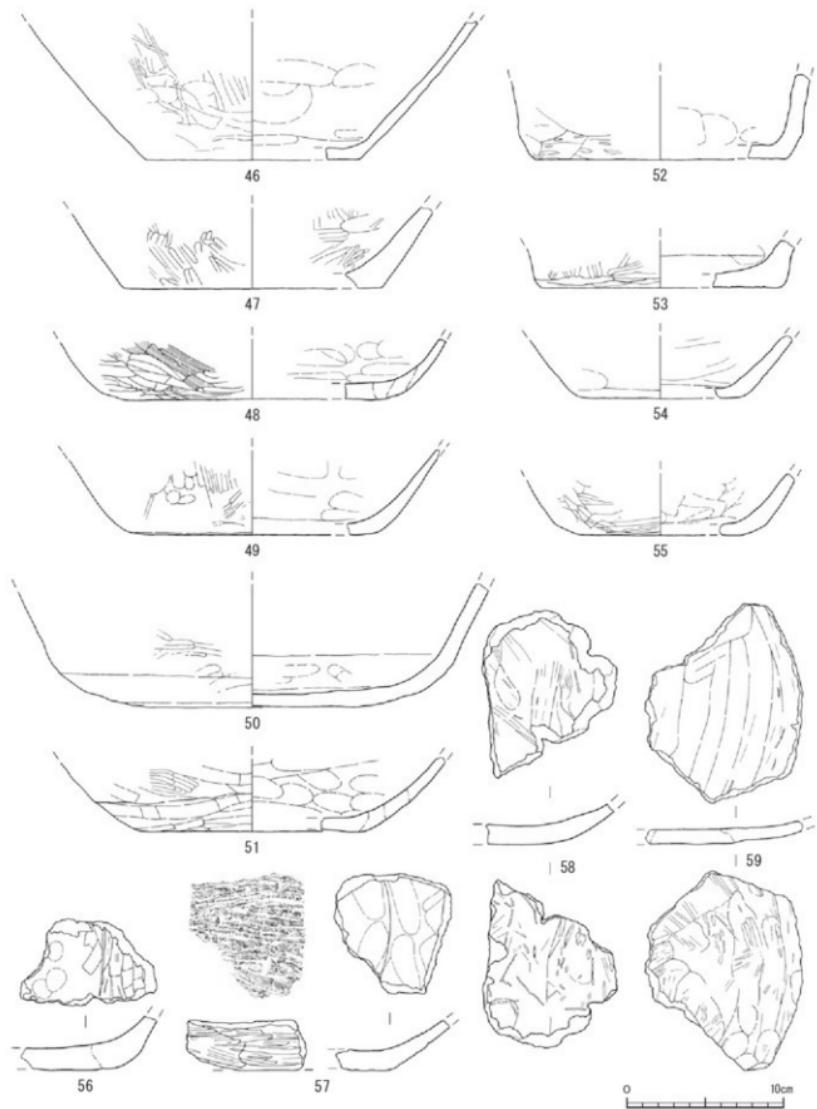
第 12 図 土器 4



第13図 土器5



第14図 土器6



第 15 図 土器 7

2. 中国産陶磁器（青磁・白磁・青花・色絵・陶器）

中国産陶磁器には青磁・白磁・青花・色絵・陶器がある。種類ごとに特徴を述べる。特に説明がない分類記号については、瀬戸・玉城・仁王・宮城・安座間・松原 2007 による。

青磁(第16図、図版18、第8・9表 60~71)

碗・皿が出土しており、碗が圧倒的に多い。

碗は、古手のものではIV類の底部(69)があるが、剣先蓮弁文(62)、雷文(63・64)、玉縁口綱(61・65)、外反口綱(66)、外底を釉剥ぎするもの(67・68)などのV類や線描き細蓮弁文(60)のVI類が主体を占める。67は見込み放射状へ小区画を配した八宝文風の型押し文が見られるもので、比較的良質である。

図は、V類と考えられるゆるく外反する図(70)、VI類である稜花図(71)がある。

自磁(第16図、図版18、第10・11表 72~82)

碗・小碗・皿・瓶がある。中森期のものと近世に分けて説明する。

中森期の中で古手のものは、72 の浦口窯系とされるビロースクタイプⅢ（C 3 群）がある。主体を占めるのは郡武四都窯系（田中 2002）とされる内瀧皿（D 群）で、下半が露胎するもの（74）と、総軸のもの（75～

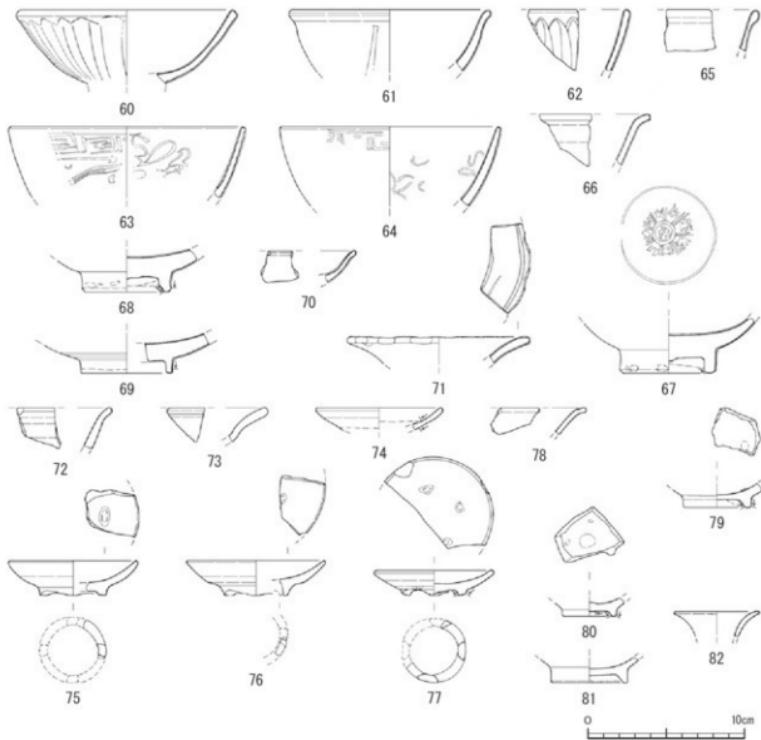
第8表 青磁出土状况

第9表 青磁觀察一覽

図№	器形	文様・形態	分類	法量		色調	観察事項	出土地点
				口(底)	肚			
60 瓢	縦波文	V1-1	13.4	浅黄緑	中真ん真	蓮弁は先が後じ、細縞と大まかに対応。模成不良。頭入物の剥落。	3G 1層下部	
61 瓢	三線縦波	V-1	12.6	灰	暗緑	深い「ラ」形により縱縞があり、蓮弁3-4不明。	2G 1層下部	
62 瓢	崩先蓮文	V-1	-	灰白	黄緑	蓮弁は先が崩先状で、細縞と接し独立している。	2G 土坑3	
63 瓢	瓣壓文	V-2	14.8	灰白	暗青緑	ヘラ形により瓣面は完結した文と草花文?、内面は草花文。	3G 1層下部	
64 瓢	瓣壓文	V-2	13.8	灰白	黄緑	外面は瓣壓による文様、下位は無文。内面はヘラ形の草花文?様解不鮮明。	1・2G 1層下部	
65 瓢	三線縦波	V-0	-	灰	暗緑	瓣面にざらついており、二次焼成の可能性。いわゆる低板タイ	2G B層	
66 瓢	外反	V-0	-	灰	暗青緑	外面のコロコロはやや剥離している。	3G 1層下部	
67 瓢	瓣壓文(八宝?)	V	(4.6)	灰白	黄緑	外底は無釉後手取間に割。見込みは瓣縫間に、小区画を配し宝珠等を象る。	4G 土坑1	
68 瓢	底部	V	(5.2)	灰	暗緑	外底から高台底部の繊維は灰や粗。	3G P1	
69 瓢	底部	IV	(5.8)	灰	青緑	蓋付は、施釉面に形成され平滑。外底は無釉で、黄褐色を呈する。	2G 土坑6	
70 瓢	外反	V-0	-	灰	暗緑	外面の口縁縛部は四隅。	1G 土坑8	
71 瓢	複花	V-0	11.4	灰白	黄緑	内面、口縁に縛部と網縄あり。口縁部は細かく刻痕がある。	2G 1層下部	

第10表 自磁出土状況

グリッド 序号・追加 部品・分類	1グリッド		2グリッド		3グリッド		4グリッド		総計 個体数
	I 層	II 層 下部	I 層	II 層 下部	I 層	II 層 下部	P33	II 層 下部	
外反鏡 破損部									1
優化室A 床頭部									1
小窓 優化室B 床頭部	1		1	1	1	1	1	1	7



第16図 青磁(60～71)・白磁(72～82)

第11表 白磁観察一覧

図No	器形	分類	重量			難読	経考察項	出土地点
			口	器高	底			
72 外反縁	C群	—	—	—	—	緑白色、光沢無	口縁端部が屈曲し外反。無文外反縁、ビロースクタイプIII。	2G 1層下部
73 外反縁	D'群	—	—	—	—	緑白色、光沢無	外面下半は無釉。高台を有し、屈曲する口縁をもつ瓶(浅形瓶)。	3G 1層下部
74 内溝底	D群	7.8	—	—	—	薄灰色、光沢無	脚部下半は無釉。あまり見られないタイプ。	2G 1層下部
75 内溝底	D群	8.0	2.2	4.2	薄灰色、光沢あり	総釉、見込みに目跡、高台に重ね焼き痕あり。胎土に気泡あり。	4G 1層下部	
76 内溝底	D群	8.8	2.2	4.0	薄灰色、光沢あり	総釉、見込みに目跡、高台に重ね焼き痕あり。胎土に気泡あり。	2G 1層下部	
77 内溝底	D群	7.3	1.55	4.0	薄灰色、光沢あり	総釉、見込みに目跡(推定4つ)、高台に重ね焼き痕あり。	3G 1層下部	
78 地反縁	E群	—	—	—	—	乳白色、光沢無	口縁端部が強く、上方にむずかしく拂み上げる。	1G 1層下部
79 小瓶	退化窓A	—	—	4.2	黄灰色、貫入・光沢あり	高台まで袖を掛け。置付けは袖を削り切る。見込みに目跡あり。	2G 1層下部	
80 小瓶	退化窓B	—	—	3.4	黄灰色、貫入・光沢あり	高台まで袖を掛け。置付けは袖を削り切る。見込みに目跡あり。	3G 1層下部	
81 板	退化窓B	—	—	4.8	青白色、光沢あり	総釉、置付け砂付着。	2G 1層下部	
82 板	退化窓B	5.4	—	—	薄灰色、光沢あり	細長板の口縁。	4G 1層下部	

77) がある。その他、邵武四都窯系に近似する D' 群外反皿 (73)、景德鎮窯系の E 群端反皿 (78) がある。

一方、近世のものとして、白く精良な胎土で型作りの徳化窯系のものが多く出土しており、大きく 2 タイプに分けた。A 類 (79・80) は、透明感がなく見込みに目跡を有し外底が露胎とする小碗で、近いものとして大坂城下町跡の 18 世紀前半とされる資料 (森 2001) がある。B 類 (81・82) は透明感があり、沖縄では通常出土するもので、小碗 (81) と瓶 (82) がある。

青花 (第 17 図、図版 18、第 12・13 表 83 ~ 107)

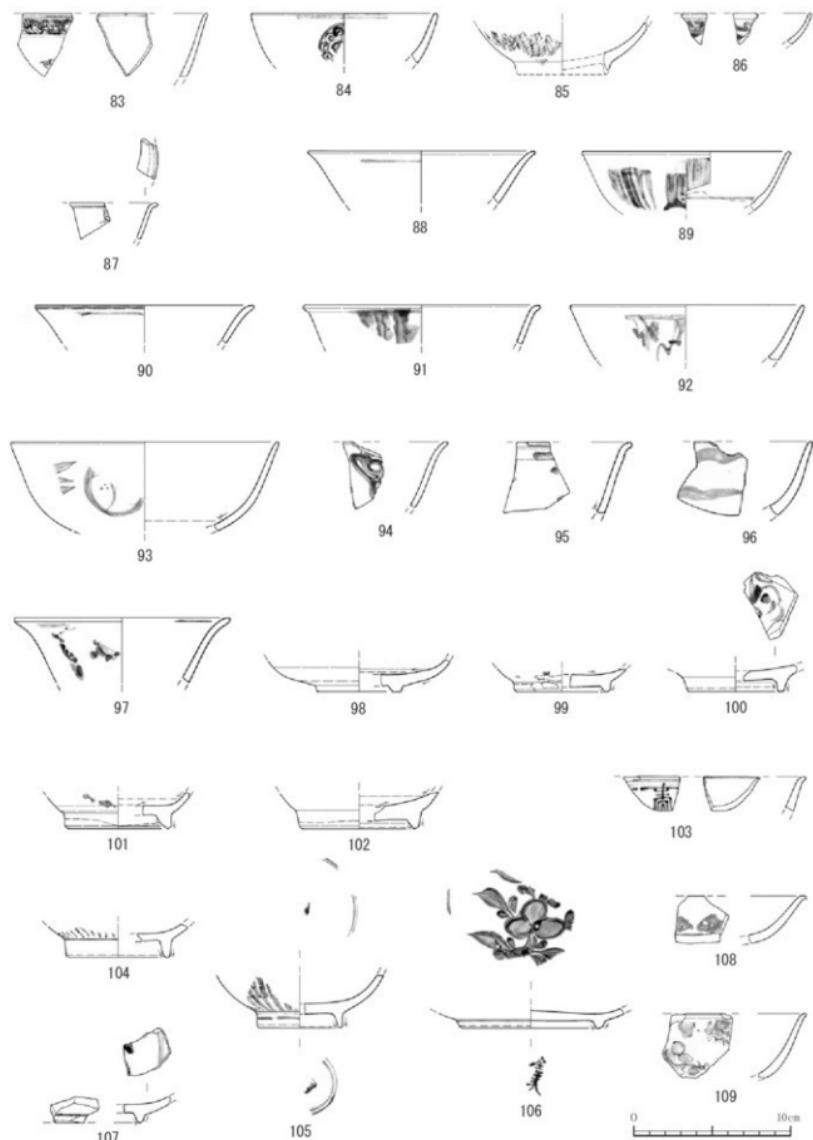
碗・小碗・皿があり、碗が最も多い。生産地により、景德鎮窯系、漳州窯系、徳化窯系、福建・廣東系の大きさ

第 12 表 青花出土状況

グリッド	1グリッド	2グリッド				3グリッド			4グリッド			複合			不明	個体数
		I 層	II 層 下部	III 層 6	P29 P44 P45 P61	I 層	II 層 下部	P18 P33	I 層	II 層 下部	III 層 6+ 30+ 31下	20I 下 + 40I 下	20II 下 + 30II 下	I 層	II 層 下部	
青花	景德鎮	碗	口縁部													3
		碗	底部													1
		小碗	口縁部													1
		小碗	底部													1
		皿	口縁部													1
	徳化窯	碗	口縁部													23
		碗	底部													23
		小碗	底部													10
	福建・廣東	碗	口縁部													1
		碗	底部													1
漳州窯	碗	皿	口縁部													2
		碗	底部													2
	色絵	碗	口縁部													1
		皿	口縁部													1
小計		11	8	1	171	1	1	1	21	33	41	1	21	24	0	11
グリッド小計		9	9	1	23				41				31		10	50

第 13 表 青花・中国產色繪觀察一覧

図No	器形	窯・分類	法量		色調		觀察事項						出土地点	
			口 (底)	輪	輪	真	真	真	真	真	真	真	真	真
83画	景德鎮	D群	—	薄火	不良	全体的に褐色が強い。外面は上部横帯に波浪文。脚部はアラベスク文。							3G	I層下部
84画	景德鎮	E群	11.6	DC白	良好	外面は 2 条の團綱、花弁を駆った円文。							4G	I層下部
85画	景德鎮	C群	(推 5.6)	灰白	良好	外面、焦墨文。							2G + 4G	I層下部
86画	景德鎮	E群	—	灰白	良好	内外面共、團綱 1 条、草花文。							不明	I層下部
87画	小窯	景德鎮	—	灰白	良好	口縁周辺が強く削れる。厚度は 2mm 以下と非常に薄い。							1G	I層
88画	景德鎮	廣東	14.2	薄火	薄い	外面、上面に太目的團綱。							2G	I層下部
89画	景德鎮	廣東	13.0	灰青	良好	外面は只見が薄く、文様は腹面内が不明。内面の團綱は一部無れ、質入多い。							4G	I層下部
90画	景德鎮	廣東	14.0	薄火	良好	口縁周辺にロサビ。外側の斜面が細め、團綱 1 条と小紋文様あり。質入多い。							1G	I層下部
91画	景德鎮	廣東	14.8	灰白	良好	外面は只見が薄く、團綱 1 条と文様は腹面内が不明。質入多い。							4G	I層下部
92画	景德鎮	廣東	14.8	灰青	不良	外面は團綱 1 条、曲綱による文様。草花文か?							不明	I層下部
93画	徳化窯	—	16.8	DC白	良好	外面は行文と折枝文か?							4G	I層下部
94画	景德鎮	廣東	—	黃白	不良	外面の文様は不明。ロクの日が目立つ。質入非常に多い。							3G	I層下部
95画	景德鎮	廣東	—	黃白	良好	外面の文様は不明。純く黒色の斑点立つ。質入非常に多い。							3G	I層下部
96画	景德鎮	廣東	—	灰青	良好	外面は只見が細め、花弁もしくは折枝文。内面は只見文?							4G	土坑 6
97画	景德鎮	廣東	13.6	灰白	良好	外面は只見が細め、花弁もしくは折枝文。内面は 2 条の團綱。							4G	土坑 1
98画	漳州窯	—	(5.4)	薄火	薄い	脚部下より外底は部分的に釉が剥がる。見込みは 1 条の團綱。圓筋部は褐色を呈す。							3G	P23
99画	漳州窯	—	(5.8)	黄白	不良	脚部下より外底は部分的に釉が剥がる。見込みは 1 条の團綱。圓筋部は褐色を呈す。							4G	土坑 1
100画	景德鎮	D群	(6.0)	灰青	良好	胎土の気泡、剥落が目立つ。見込みは草花か草花文か。剥落は褐色を呈す。							3G	I層下部
101画	景德鎮	廣東	(6.4)	黄白	不良	剥付は只見剥ぎ。見込みは只見剥ぎ。外側の文様は不明。							3G	I層下部
102画	景德鎮	廣東	(7.0)	黄白	不良	剥付は只見剥ぎ。見込みは只見剥ぎ。外側の文様は不明。							1G	I層下部
103画	景德鎮	—	灰青	良好	外面は、薄めの只見による團綱 2 条と「寿」文。内面は、1 条の團綱。							3G	II層	
104画	景德鎮	—	(6.4)	灰青	良好	外面は只見による團綱。							4G	I層下部
105画	景德鎮	—	(5.4)	灰青	良好	外面は只見による團綱。外底は褐色を呈す。見込みは不明文様。							1G	I層下部
106画	景德鎮	—	(8.8)	灰青	良好	見込みは只見剥ぎによる團綱 2 条。							2G	I層下部
107画	景德鎮	—	薄火	黄白	良好	見込みは團綱 2 条に不明文様。高台部に團綱あり。							2G	P45
108画	色絵	景德鎮	—	灰白	—	色絵は変異しており、文様は不明。緑・赤・黒を使用。							4G	I層下部
109画	色絵	景德鎮	—	灰白	—	色絵は変異しており、文様は不明。							4G	I層



第 17 図 青花 (83~107)・中国産色絵 (108・109)

く4つに分類した(新垣2003)。量的には徳化窯系が最も多く、次に福建・広東系が多いことから、近世のものが主体と言える。

景德鎮窯系は、83・100が腰折碗(D群)、85が蓮子碗(C群)、84が漫頭心碗(E群)、86が見込みの広い直口皿(E群)、87が端反の小碗である。

漳州窯系(福建博物館1997)は、98が見込みと外底、99が見込みと疊付が無軸の碗である。

徳化窯系(陳1999)は、92・93・96が直口碗、97は端反碗、103は寿字銘の碗、104は同種の可能性がある碗底部、105が梵字文の碗、106・107が直口皿である。

福建・広東系は見込みが露胎もしくは釉剥ぎすることが特徴で、88・90・91・94・95が端反碗、89が直口碗、101・102は蛇の目釉剥ぎの底部である。

色繪(第17図、図版18、第12・13表 108～109)

徳化窯系のものである。碗(108)、皿(109)がある。

褐釉陶器(第18図、図版19、第14・16表 110～113)

褐釉陶器は壺である。110は玉縁状口縁のもの(陶器3類)、111・112は方形口縁で上げ底の底部のもの(陶器5類)、113は平底のものである。

3. タイ産陶器(第18図、図版19、第15・16表 114)

タイ産陶器は、褐釉陶器の壺(114)が出土しており、産地はシーサッチャナライ窯系である(向井2003)。その他、胴部片は軸・胎土の特徴から、本来は数個体があったものと思われる。

4. 台湾産陶器(第18図、図版19、第16表 115)

115は、ロクロ成形された上面が平坦な蓋で耳状の把手が貼り付けられたものである。胎土に赤色鉱物が含まれていることが特徴的である。その特徴から台湾台北郊外の新北市鶯歌などで近代(日本植民地時代)に生産さ

第14表 中国産褐釉陶器出土状況

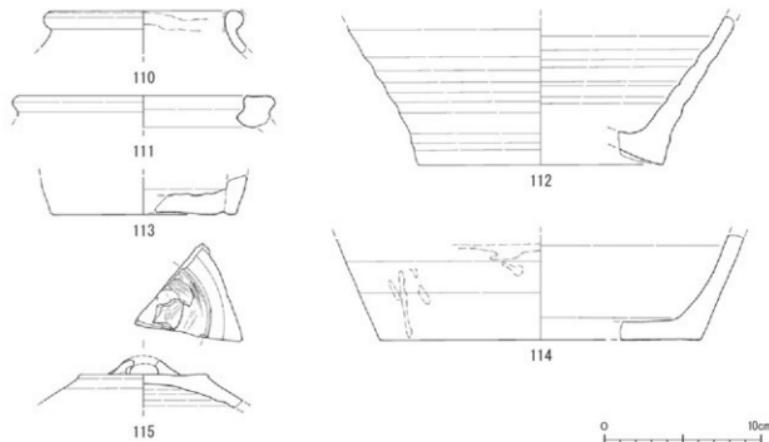
グリッド 層序・遺構	1グリッド		2グリッド		3グリッド				4グリッド		複合		不明		総 個 体 数												
	1層	土坑	1層	土坑	2	土坑	3	土坑	6	P41	P58	土坑墓	2	1層	3	土坑	P17	P21	P23	P28	P30	P33	1 層 下部 全体	土坑	p9	3G17	3GP22
表面																											
口縁部	5	1	1	36	1	2	3	2	2					1									1		2		
肩部																									5		
腹																									5		
底																									5		
小計	50	11	1	280	21	3	21	21	1	21	103	7	21	1	21	21	1	1	1	1	1	1	1	1	262		
グリッド小計	7			38													122								28	262	

第15表 タイ産褐釉陶器出土状況

グリッド 層序・遺構 器形・部位	1グリッド		2グリッド		3グリッド				4グリッド		不明		総 個 体 数
	1層	1層 下部	1層	1層 下部	1層	1層 下部	2層	P28	1層 下部	土坑	1層 下部	土坑	
表面													
胴部	3	1			4	4	16	3	1	3	2	5	42
底					1								1
小計	3	1	1	1	4	4	16	3	1	3	2	5	43
グリッド小計	4		5		24					5			43

第16表 中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器・台湾産陶器観察一覧

図号	種類	器形	法量		観察事項						出土地点	
			口	(底)	観察事項						出土地点	
110	中国素褐色陶器	壺	11.6		胎土は橙色、泥入物は少ない。釉は口縁は薄い黄緑色、玉縁代口縁。						3G	1層下部
111	中国素褐色陶器	壺	15.6		胎土は褐灰色、泥入物は石英等が少ない。釉は黄赤色。方形口縁。						4G	1層下部
112	中国素褐色陶器	壺	(15.4)		胎土は褐灰色、泥入物は少ない。釉は黄赤色。外底は厚く砂礫が付着。						不明	1層下部
113	中国素褐色陶器	壺	(11.8)		胎土は褐灰色、泥入物は石英等が多い。釉は灰黄色。内底はロクロ目が顯著。						2G	土坑墓2
114	タイ産褐釉陶器	壺	(20.6)		胎土は灰白色、泥入物は長石等が少ない。釉は暗赤色。器面は平滑。						2G	1層
115	台湾高麗陶器	壺	8.0		胎土は黄褐色。泥入物は赤色鉱物でやや多い。耳状把手がつく碎片だが、現況では無軸。						1G	1層



第18図 中国産褐釉陶器(110～113)・タイ産褐釉陶器(114)・他の輸入陶磁器(115)



参考写真 沖縄県立博物館・美術館蔵 台湾産陶器

れた狗母鍋の蓋と考えられる（黄2009）。

参考資料として、鶯歌製品として収蔵されていた沖縄県立博物館美術館収蔵品を挙げておく（参考写真）。口縁端部には内側への返し部があり、口径16.4cm、上面径6.5cm、高さ4.3cmである。色調は口縁端部が橙色、他は淡黄色を呈している。また、同様の産地とする短い把手付の鍋と共に収蔵されていたが、その色調や胎土からはやや異なっており、対応するものかは不明である。

5. 本土産陶磁器（染付・陶器・色絵）

本土産陶磁器には、染付・陶器・色絵があり、産地では肥前及び波佐見・薩摩・京系がある。

染付（第19図、図版19、第17・18表 116～126）

碗・皿・瓶・小杯・小碗がある。産地は肥前及び波佐見である（九州近世陶磁学会2000）。時期幅としては肥前II～V期（17世紀中葉～19世紀前半）に当たるが、皿期（17世紀後半～18世紀中葉）のものが多い。

碗（116～119） 118が見込み蛇の目剥ぎの碗で波佐見であるが、他は肥前と思われる。119は見込みの五弁花は大振りで丁寧なもので、外底が「大明年製」銘である。

皿（120・121） 120は青磁に近い釉調である。121は見込みの五弁花は小振りで、外底が2列3文字の「年製」銘である。

瓶（122～126） 122は口縁端部の段が明瞭、126は碁笥底であることから、共にII-2期（17世紀中葉）のものである。

陶器（第19図、図版19、第17・18表 127～133。）

碗・皿・鉢・壺がある。産地は肥前、薩摩、京系がある。

肥前（127～131） 碗（127～129）、皿（130）は銅線釉のもので、内野山窯のIII期に相当する。鉢（131）は、刷毛目調整の三島手のもので、肥前IV期である。

京系（132）軟質な胎土をもち透明釉を施す碗である。

薩摩（133）口縁が平坦面をもつ壺で、苗代川窯製品と思われる。

色絵（第19図、図版19、第17・18表 134）

赤色で絵付がされる瓶（134）があり、肥前III期のものである。

6. 沖縄産陶器

土器の次に多いもので、施釉陶器、無釉陶器、陶質土器がある。これらの生産地であるが、壺屋などの沖縄本島、いわゆる八重山焼とされる石垣島が考えられるが、全てを確定することは困難であるため、特徴的なものについて個別に触れる。

施釉陶器（第20図、図版20、第19・20表 135～161）

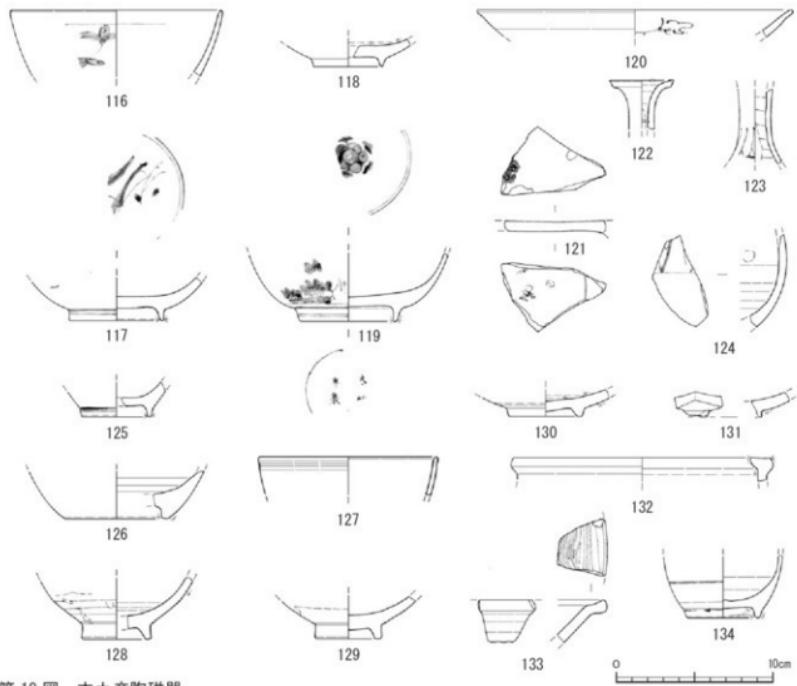
方言では「上焼（ジョウヤチ）」と称され、施釉や絵付を生地土に直接行うものと、化粧土の上から行うものがある。器形には、碗・小碗・皿・鉢・壺・瓶・急須・蓋・火入がある。

碗（135～145） 施釉方法から、大きく2種類に分けられる。

碗A（135～137・141・145） 灰もしくは褐釉を直接生地土に掛けるもので、胴部下半は露胎しており、

第17表 本土産陶磁器出土状況

種類	産地・分類	器形	部位	グリッド		1グリッド		2グリッド		3グリッド		4グリッド		接合		不明		総計	個体数	
				I層	I層下部	I層	I層下部	P45	I層	I層下部	II層	I層	II層	下部	土抗	土抗	1	4		
陶器	肥前	碗	口縁部							2		2						1		5
		胸部		1		3			3								1		9	
		底部				2													2	
	京系	皿	口縁部						1										1	
		底部									1								1	
		鉢	底部									1							1	
薩摩系	急須	碗	口縁部																1	
		胸部		1															1	
		底部																	1	
	壺	急須	胸部																1	
		壺	口縁部																1	
		底部																	1	
染付	肥前（波佐見を含む）	碗	口縁部							2			1	1					4	
		胸部		1		5		5		4	1					1		17	4	
		底部								1		1					1		3	
		小碗	胸部								1								1	
		皿	口縁部								1								1	
		底部							1		1								2	
	小杯	小杯	胸部							1									1	
		袋物	胸部							1									1	
		瓶	口縁部													1			1	
		瓶	頭部							1									2	
色絵	肥前	瓶	胸部							1		1							3	
		底部								1		1							2	
		瓶	底部																1	
小計				1	2	8	1	20	1	16	2	2	2		1	5	1	60	22	
グリッド小計				3		9		21							1	6		40		



第19図 本土産陶磁器

第18表 本土産陶磁器観察一覧

図No	種類	器形	产地・分類	法量 口(底)	釉調	観察事項	出土地点
116	瓶	把前・Ⅲ期		13.4	灰青	外面は圓錐1条、草花文。	4 G 土坑4
117	瓶	把前・Ⅲ期	(6.0)	明灰青		外面は胴部が不明文様、高台2条の圓錐。見込みは圓錐2条、草花文か。	4 G 土坑4+1層下部
118	瓶	波紋見・V-1期		(4.4)	明灰青	見込みは蛇の目焼剥ぎするが、露胎のまま。外面は胴部が圓錐1条、高台に2条。	4 G 1層下部
119	瓶	把前・IV期		(6.2)	明灰青	高台内「大明年製」款。外面は山水文。見込みは手描きの丸みがある五弁花。	不明
120	瓶	把前・Ⅲ期		20.0	白緑	輪郭は青緑に近い。胴部内面は薄削きにより折枝文か?	4 G 1層下部
121	瓶	把前・IV期		—	明灰青	高台内にはおそらく2列3文字で「□□? □年製」款。見込みは小ぶりの五弁花。	4 G 1層下部
122	付 付	瓶	把前・II-2期	4.0	黄白	筋土は軟化で、輪2周。口縁端部外面の筋は明瞭である。内面筋部に絞り目あり。	不明 1層下部
123	瓶	把前・Ⅲ期		—	明灰青	輪郭に「重綱」日文。内面筋部はロクロ目が顯著だが、絞り目は見られない。	4 G 1層下部
124	瓶	把前・Ⅲ期		—	明灰青	輪郭上半に「重綱」日文の下に圓錐1条。	1 G 1層下部
125	瓶	把前・Ⅲ期		(4.4)	灰白	外面の輪は光沢がない。高台に圓錐2条。	3 G 1層下部
126	瓶	把前・II-2期		(6.6)	灰白	底部は基削底、環状のみ袖剥ぎ。界面が屹立しており、二次被熱の可能性。	2 G 1層下部
127	瓶	把前内野山・Ⅲ期		11.4	青緑	輪錐袖、口縁外側に4条の綫錐。	4 G 1層下部
128	瓶	把前内野山・Ⅲ期		(4.2)	灰錆	輪錐袖、腰高で腹状の器形。外面下半は露胎。ロクロ目は明瞭。	3 G 1層下部
129	瓶	把前内野山・Ⅲ期		(4.0)	灰錆	輪錐袖、丸みのある胴部。外底は切り離し跡が残る。外面下半は露胎。	3 G 1層下部
130	瓶	把前Ⅲ期		(4.7)	灰錆	輪錐袖、見込みの目焼剥ぎ。外面下半は露胎。	4 G 1層下部
131	鉢	把前IV期		—	暗赤黃	内面は白化粧の刷毛目調節。口縁は屈曲し輪郭が直立。	4 G 1層下部
132	瓶	京系		—	淡黃緑	透明袖。高台は無袖。	2 G 1層下部
133	壺	典摩・苗代川窯		16.2	暗青	口縁上面は無袖。筋目が見られる。内面は口縁より下は無袖。	1 G 1層下部
134	色絵 色絵	瓶	把前Ⅲ期	(4.4)	灰白	高台、胴部に1条の赤色の圓錐。長付袖剥ぎ、重ね焼き痕あり。外底中央が無袖。	不明 1層下部

方言で「フィガギー」と称される。八重山においてもこの種の碗が生産された可能性が指摘されており、その大きな特徴として釉薬の剥離現象が挙げられているが（阿利 2011）、今回の資料では明確ではなかった。しかしながら、別個体の口縁が付着するもの（137）、本島ではあまり見られない外底が大きく突出するもの（141）などは、この石垣島で生産された可能性も考えられよう。

碗B（138～140・142～144）白土を塗布した上に白釉を全体に掛け、見込みは蛇の目に、疊付を釉剥ぎするもので、白化粧碗と称される。部分的に黒釉などがかかる資料があり、138はごく一部に、

第19表 沖縄産施釉陶器出土状況

第20表 沖繩產施釉陶器觀察一覽

図No	器形	法量 口(底)	胎土の色調 ・混入物等	釉の通称(色調)・施釉範囲・焼成	その他観察事項	出土地点
135	碗	12.0	黄褐、精良	灰釉(灰緑)、脚部上半のみ(ワガト)	直口縁、端部丸い。	4 G 1 層下部
136	碗	14.4	黄褐地、精良	灰釉(灰赤黄)、脚部上半のみ(ワガト)	直口縁、端部丸い。	1 G + 3 G 1 層下部
137	碗	11.6	灰、気泡あり	灰釉(薄黄緑)、脚部上半のみ(ワガト)	直口縁、端部丸い、外面に別個体片が付着。	4 G 土坑 1
138	碗	12.8	灰黄緑、精良	白釉(薄黄緑)、部分的に黒釉(黒褐色)掛かる	ゆるい外反口縁、外面側面によく様あり。	2 G 1 層下部
139	碗	12.6	黄褐色、長石等少 外面黒斑(黒)、内面白釉(薄黄緑)	白釉(薄黄緑)、蛇の目(目錬割ぎ)	外反口縁、外底下にやかめ多く付着。 端部がひびき外反する口縁。	4 G 1 層下部+土坑 1
140	碗	11.8	黄褐色、精良	白釉(薄黄緑)	端部がひびき外反する口縁。	3 G 1 層下部
141	碗	9.23	灰、長石等少	灰釉(灰緑)、脚部上半のみ(ワガト)	高台の削り出しが明顯。外底はやや突出。	4 G 1 層下部
142	碗	(6.3)	黄褐色、褐色色合	白釉(薄黄緑)、口縁・内面部の目錬割ぎ	無文。見込みに重ね地刷毛。底面はやや凸出。	4 G 土坑 1
143	碗	(6.11)	浅黄褐、気泡あり	白釉(薄黄緑)、茎部・内面部の目錬割ぎ	無文。見込みに重ね地刷毛。脚部クロコ目割れ。	3 G 1 層下部
144	碗	(6.8)	浅灰、精良	白釉(黄緑)、斜面斜脚ぎ、肩部(青灰色)	外面の文様は楕円状。外底に同心円状の網目目。	3 G 1 層
145	碗	(6.4)	黄褐色、精良	灰釉(灰赤黄)、高台下部露胎・見込み部の目錬割ぎ	外底は部分的に白釉を帯びる。斜脚ぎ部は露胎。	3 G 1 層下部
146	小網目	(3.8)	黄褐色、気泡あり	白釉(薄黄緑)、口縁・内面部の目錬割ぎ	見込みのみ内底。	4 G 1 層下部
147	網目	(4.7)	褐緑、褐色地等含 網目(網跡)	飛行・内面部の目錬割ぎ	見込みの斜脚ぎ部は露胎。	不明 1 層下部
148	碗	(10.6)	灰、気泡あり	黑釉(黒)、外面部は網目・外底、内面部	釉は外側が 1 mm と厚いが、内面は薄い。	3 G 1 層下部
149	碗	(10.9)	灰黒、気泡あり	黑釉(黒)、外面部高台のみ	内面は褐色色で平ら。脚は 1 mm と厚い。	2 G 1 層下部
150	壺	11.0	灰黒、精良	黑釉(黒墨)、口縁上部・内面部脚部は露胎	内面部網目は部分的に黒い露胎明瞭。	4 G 1 層下部
151	壺	6.6	灰黒、気泡あり	白釉(薄黄緑)、外面部網目(網跡)重ねる	口縁周辺斜脚ぎ。	4 G 土坑 1
152	壺	(3.6)	網目、白色合	白釉(薄黄緑)、外面部網目	丁寧なクロコ成型。内面はクロコ目顯著。	2 G 土坑 6
153	壺	(10.6)	灰、精良	黑釉(黒)、外面部網目高台上り上のみ	高台は貼付により低く、最大径 13.2 cm。	2 G P48
154	急須	(6.9)	灰白、精良	黑釉(黒)、外面部網目下平上り上のみ	丁寧なクロコ成型。内面はクロコ目顯著。	4 G 土坑 1
155	急須	-	灰黒、石英等含	なまこ網(青白)、部分的に練膏	厚み 2.1cm、幅 2.8cm と厚手大型の把手。	1 G 1 層
156	瓶	-	赤褐、石英等含	灰釉(黄緑)、外面部のみ	つまみ高 1.6cm、高径 9cm。	4 G 土坑 1
157	瓶	(4.8)	灰黒、精良	練膏(灰黄緑)、外面部のみ	最大径 6.7cm 上面、縁による縦文状。	2 G 1 層下部
158	火入	10.2	精、石英等含	網目(網跡)、口縁斜面より外側	内面、布目状の練膏が顯著。	4 G 1 層下部
159	火入	10.6	灰白、精良	灰釉(灰黄緑)、口縁斜部より外側、外底は褐色	触感が濃感があり、質が多い。	2 G + 4 G 1 層下部
160	火入	-	灰、精良	黑釉(黒墨)、外面部網目のみ、露胎部は黒褐色	網目径 1.6cm、外底はクロコ目が露板板机足を呈す。	4 G 1 層下部
161	火入	(3.6)	灰黒、石英等含	黒釉(黒)、外面部網目のみ	網目径 0.6cm、底部部は圓筒形。	3 G II 層



第20図 沖縄産施釉陶器

139は外面に見られる。後者には多くの砂礫が付着しており、やや不良品の印象がある。144は、青色の呉須で絵付けがされる。

小碗 (146・147) 小碗は、碗の分類でB類に相当する。

鉢 (148・149) 比較的厚い黒釉が掛けられる資料である。

壺 (150～152) 150は頸部が屈曲しないもの。151は直立する短い頸部をもつ白化粧されるもの。152は油壺と称される徳利形の小壺で、胎土が硬質、暗褐色であり見られない資料である。

瓶 (153) 方言で「カラカラ」と称される注口つきで下膨れの胴部をもつ瓶である。

急須 (154・155) 154は急須の底部で、155は白化粧された大型急須の把手である。

蓋 (156・157) 共におそらく急須の蓋と思われる。

火入 (158～161) 筒型の胴部をもち内面が露胎するものである。

無釉陶器 (第21・22図、図版20、第21・23表 162～184)

方言では「荒焼（アラヤチ）」と称され、比較的高温で焼成された焼き締め陶器で、自然釉やマンガン釉が掛かったものもある。石垣島では、名蔵・阿香花・平田・高山壺屋の各窯跡では無釉陶器が採集されており（佐賀県1998）、黒石川窯跡では発掘調査が行われており無釉陶器が生産されていた（石垣市教委1993d）。現時点では、形態的に八重山と限定できる出土資料は明確とは言えない。しかしながら、胎土や色調の特徴として、石英等の混入物が比較的多く（166・175など）、色調が灰もしくは黒色を呈するもの（177・184）などは本遺跡でも見られる。

器形には、壺・甕・擂鉢・鉢・瓶・蓋・急須・火入・焜炉・香炉がある。

壺 (162～166・168・169) 162は小さな玉縁口縁をもつ小型のもの。163は短い頸部をもち肩が張るもの。

164～166は方形口縁とあまり張らない胴部をもつもので、166は口縁上面に4条の凹線をもちあまり見られない。168はあまり張らない胴部の底部で、棒状工具の痕跡が明瞭に残り、あまり例をみない。169は大型のもので、おそらく水甕とされるものだが、最大径が胴部に見られることからここでは壺とした。

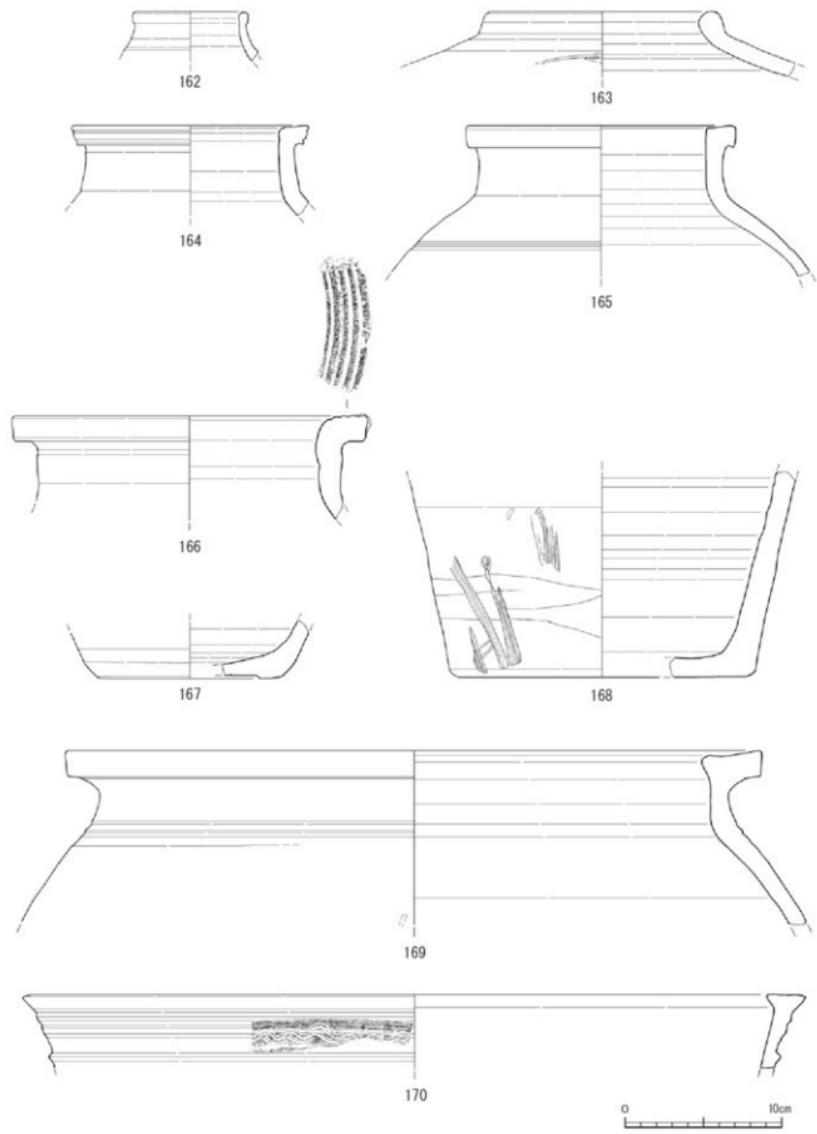
甕 (170) 凹線と波状文が施された直立する口縁のもので、胴部は直線的なものと思われる。

擂鉢 (171～175) 口縁が長く水平に伸びるもの（171）、短く屈曲部をもつもの（172・173）、底部では丸みがあるもの（174）、直線的なもの（175）がある。

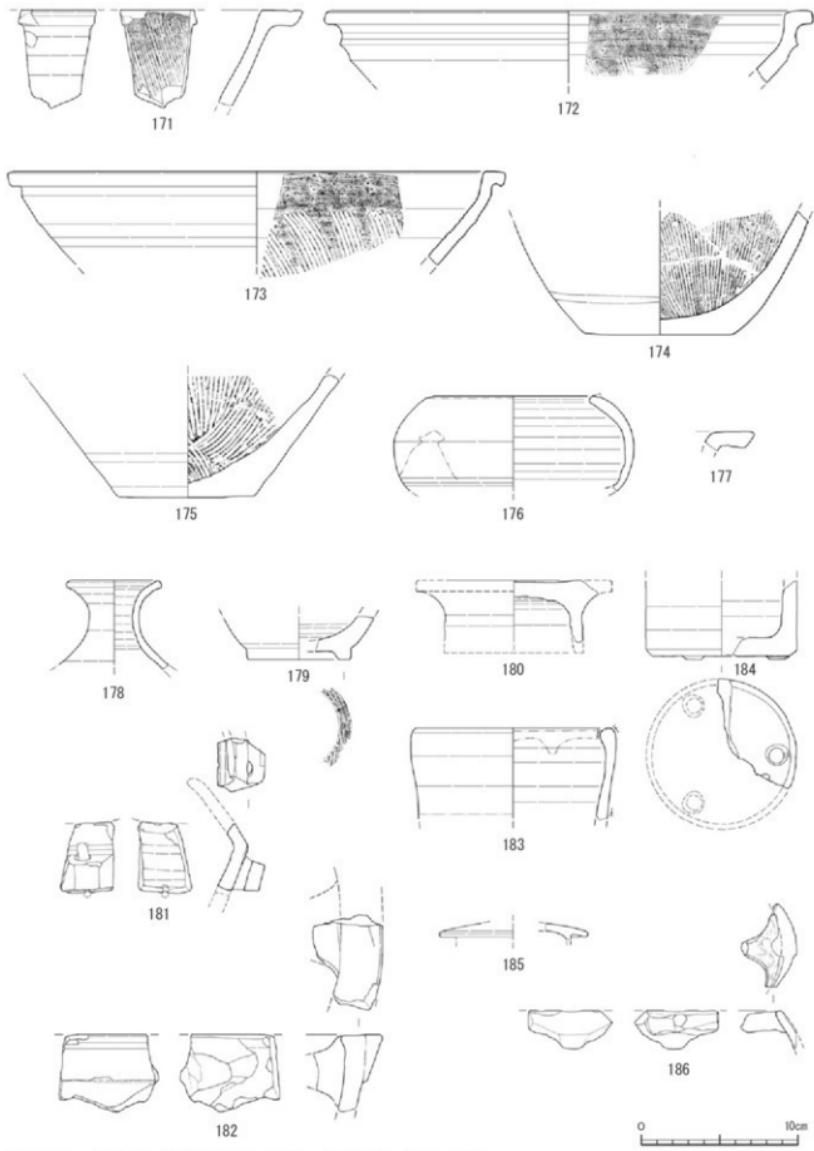
鉢 (176・177) 176は無頸で胴部がまるく寸胴形のもので、自然釉がかかっている。177は深鉢の鉗状口

第21表 沖縄產無釉陶器出土状況

器形・部位	1グリッド		2グリッド		3グリッド		4グリッド		複合		不明		個体数	
	I 層	II 層	I 層	II 層	III 層	P23 P45 P57 P58 P59	I 層	II 層	P1 P23 P60	I 層	II 層下部 + 集中地	II 層 下部	II 層 下部	
壺	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	17
甕														
擂鉢	13	10	45	2	2	1	2	1	3	10	1	1	1	20
鉢	1	1	4								4	1		1
小甕	口縁部													
甕	口縁部													
擂鉢	口縁部													
鉢	口縁部													
水鉢	口縁部													
盆	口縁部													
皿	口縁部													
盤	口縁部													
洗物	口縁部													
皿	口縁部													
火入	口縁部													
香炉	口縁部													
焜炉	口縁部													
器種	口縁部													
不明	口縁部													
底盤	口縁部													
小甕	16	13	11	6.0	2	2	11	2	1	1	3	11.21	30	11
グリッド小計	33		7.5				178				169	3	29	417
														61



第21図 沖縄産無釉陶器



第22図 沖縄産無釉陶器(171~184)・陶質土器(185・186)

縁で、色調が暗灰色で八重山のものに多い特徴である。

瓶（178・179） 178は大形の徳利。179は高台がつく球形の胴部をもち口縁が直立する瓶と思われる。

蓋（180） 石英・雲母等を多く含む軟質で焼成が甘いもので、口が狭い大型壺の蓋と思われる。

煙炉（181・182） 181は直線的な胴部から内側に延びる口縁をもつもの。182は内側に突起を有する七輪状のもの。

火入（183） 筒型の胴部を持つものである。

香炉（184） ボタン状の脚部をもつ筒型香炉で、黒石川窯跡（石垣市教委1993 d）、市教委調査（石垣市教委2004）でも比較的多く出土しているものである。

器形不明（167） 基盤底状の底部であり、植木鉢などであろうか。

陶質土器（第22図、図版21、第22・23表 185～186）

方言では「アカムヌー」と呼ばれ、精良な胎土で、器壁が薄い素焼きの土器である。

185は急須の蓋。186は球形の胴部を持つ煙炉。

7. 近代陶磁器（図版22、第24表 196～216）

近代陶磁器は、大正～昭和初頭のものが多い。特徴的なものについて説明する。

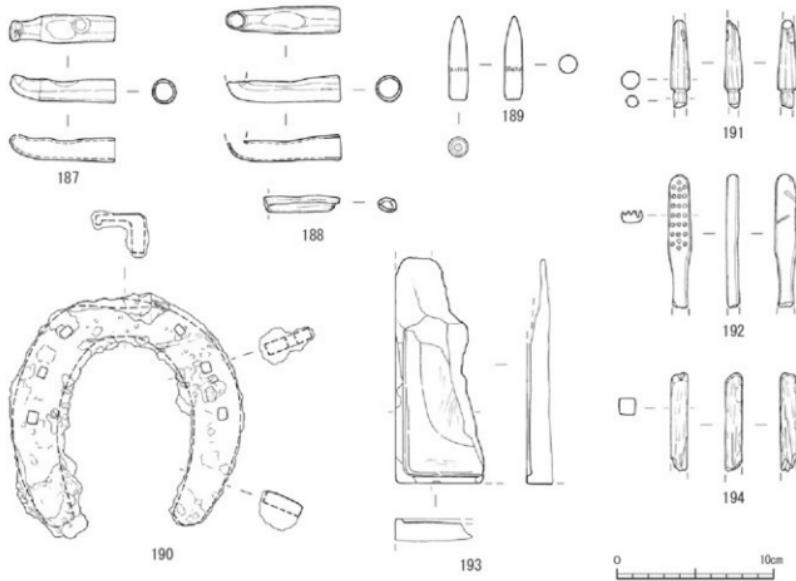
第22表 陶質土器出土状況

グリッド	2グリッド		3グリッド		4グリッド		総計	個体数
	層序	部位	層序	部位	層序	部位		
煙炉	口縁部							
	胴部	1		3	1	5	1	
急須	胴部						2	1
	口縁部						2	1
鍋or急須	胴部	1	1	2	4	8	1	5

グリッド	2グリッド		3グリッド		4グリッド		総計	個体数
	層序	部位	層序	部位	層序	部位		
蓋	口縁部							
	基盤						1	1
器種不明	基盤						2	2
小計		2		1	1	7	8	19
グリッド小計		3		8		8	19	5

第23表 沖縄産無釉陶器・陶質土器観察一覧

図No.	器形	法量			色調		遺物類	観察事項	出土地点
		外側	裏面	断面	外側	裏面			
162	瓶	7.0	暗赤系	暗赤系	暗赤系	ほとんど無し	手彫りの玉縁の縁、丁寧なロクロの形成。	4G 土坑1	
163	瓶	14.4	灰灰	明赤系	明赤系	微量（石英）	玉縁の縁、底面で研ぎ抜く。腹底上半は縦割の不明文様。	2G 1層	
164	瓶	14.8	灰赤系	赤褐	明赤系	微量（石英）	口縁部外側に凹縫2条、上部に削痕あり。	3G 1層下部	
165	瓶	16.6	赤褐	灰灰	赤褐	少量（石英）	口縁部間に凹・凸縫1条。腹底内面に微吐？付着。	4G 土坑1	
166	瓶	22.2	暗赤灰	灰灰	赤灰	中量（石英・褐色粒）	口縁上部に凹縫4条。外面に自然筋か、微細な白斑あり。	4G 土坑1	
167	瓶	(11.0)	灰赤系	赤褐	赤褐	中量（石英）	基盤底、外側のけだらけ感。	3G 1層下部	
168	瓶	(18.0)	灰灰	灰灰	灰	中量（明褐色）	外表面底面から横方向の静止での彫刻の△???	3G 1層下部	
169	瓶	44.2	暗赤灰	赤褐	赤褐	微量（石英）	口縁上部に自然筋か、淡黄色色あり。腹底内面に複数？	1G 1層下部	
170	便	49.0	灰灰	明赤系	灰灰	微量	口縁外側凹縫2条、波状底 (A)×72.0cm 2条 (B)×51.7	3G 1層下部	
171	縁付	—	明赤系	赤褐	赤褐	微量（石英）	口縁上部に凹縫1条。波状底 (A)×62.0cm は底。	2G 1層下部	
172	縁付	30.4	極端赤系	赤褐	赤褐	少量（石英・黑色粒）	縁付 (7本/1.7cm) は上部で1.5cmの間隔を空ける。	4G 1層下部	
173	縁付	30.4	灰灰	赤褐	明赤系	微量（石英）	縁付 (8本/2.0cm) は上部で0.8cmの間隔を空ける。	1G 1層下部	
174	縁付	9.2	明赤系	明赤系	明赤系	微量（石英・褐色粒）	縁付 (8本/1.7cm) は底、見込みには横、底部等に横筋板。	2G P58	
175	縁付	9.6	灰灰	暗赤系	赤褐	多量（石英・褐・黑色粒）	縁付 (10本/2.3cm) は底、見込みには横、底部等に横筋板。	3G 1層下部	
176	縁付	10.0	黑褐	赤褐	赤褐	微量（石英）	自然筋 (縁付) が外面上半、口縁部分は自然筋が剥離。	3G P32+不明1層	
177	縁付	—	暗赤系	暗灰	中量（石英）	口縁部分がやや厚くなっている。	4G 1層下部		
178	瓶	5.6	極端赤系	暗赤系	暗赤系	中量（石英）	全体的に丁寧なロクロ形成。頂部内面は綾り目。	3G 1層下部	
179	瓶	(6.4)	灰灰	赤褐	灰	中量（石英・褐色粒）	発行に静止時の板柱に沿う形が見られる。	3G 1層下部	
180	蓋	0.6	黄褐	黃褐	明黄褐	多量（石英・褐色粒・蛋白）	焼成は比較的で、器面の崩落あり。ロクロ形成。	4G 土坑1	
181	便炉	—	灰赤系	暗赤系	灰赤系	ほとんど無し	外表面は微細な白斑が見られる。自然筋か。	3G 1層下部	
182	便炉	—	灰灰	黒褐	黒褐	微量（石英）	内面底と口縁から腹内側部にかけて、黒変しており被熱か。	3G 1層下部	
183	火入	12.4	灰灰	赤褐	赤褐	微量（石英）	外面上部、底部を除いた口縁内面に自然筋 (縁付) が僅かな。	3G 1層下部	
184	香炉	0.6	暗赤灰	赤褐	暗赤系	中量（石英）	外底の脚部は、様1.2、厚さ0.2cmの円形の粘土を貼る。	3G 1層下部	
185	陶質蓋	—	明黄褐	黃褐	黃褐	微量（蛋白）	最大径9.4cm、厚さ0.3cm。	3G 1層下部	
186	陶質蓋	—	明黄褐	黃褐	明黄褐	中量（石英・赤色粒・蛋白）	内面底部は黒変し、被熱。	3G 1層下部	



第23図 金属製品(187～190)・骨製品(191・192)・石製品(193・194)

200・201は第二次世界大戦中の統制陶器。208は軍杯で方形高台をもつことから、大正期のものとされる(西川2008)。205は不明な漢字、206は簡体字の「銀山」など、これまで県内及び国内で見られない資料である。

8. 金属製品(第23図、図版21、第25表 187～190)

青銅製品(187～189)と鉄製品(190)がある。

187・188は青銅製の煙管であり、187は竹製の羅字が吸口内に残っていた。

189は青銅製の弾丸で6.5mm径の小銃弾である。

190は鉄製の蹄鉄である。X線写真により、6ヶ所の釘穴があることを確認した。

9. 骨製品(第23図、図版21、第25表 191・192・195 ※195は図版のみ)

191は尖頭器、先端及び基部は欠損している。市教委調査でも同様なものが出土している(石垣市教委2004)。

192・195はハブラシである。

10. 石製品(第23図、図版21、第25表 193・194)

193は粘板岩製硯である。194は蠑石製の石筆である。

11. 貝製品(図版23、第26表 217～244)

全て有孔製品で28点出土している。素材で見るとタカラガイ19点(内訳はホシダカラ1、ヤクシマダカラ1、

第 24 表 近代陶磁器観察一覧

図No	器形	技量・名稱等	法量			観察事項	出土地点
			口	器高	底		
196	白磁	空瓶割り・磁頭	10.7	5.9	4.1	口縁2の字で外反する。見込みは平坦。擦痕あり。	1 G 1層下部
197	白磁	脚附船琴	10.9	5.4	4.3	口縁は直口。見込みに擦痕あり。	4 G 土坑1
198	白磁	ラリム青緑・染付	11.6	5.8	4.1	口縁2の字で外反する。見込みはやや凹む。擦痕あり。	4 G 土坑2上層
199	白磁	磁頭	12.0	5.6	5.5	口縁2は直口。断面が逆台形を呈する。見込みは少ししわがある。	4 G 土坑1
200	白磁	白磁(絞物陶器)	11.0	5.5	4.7	外底・腰10.7cmのタクミ印。口縁は直口。湖底は白い。緑色の團練2条。見込みは擦痕あり。	4 G 1層下部
201	白磁	白磁(絞物陶器)	—	—	—	2 外底・腰10.7cmのタクミ印。口縁は直口。湖底は白い。緑色の團練2条。見込みは擦痕あり。	不明 1層
202	小皿	染付・印押	8.0	4.8	2.9	口縁は直口。明瞭な擦痕はない。	不明 1層
203	小皿	脚附船琴	8.0	4.6	3.2	口縁は直口。周縁に砂押付する。見込みにやや擦痕あり。	3 G 1層
204	小皿	脚附船琴	8.0	4.6	3.5	口縁は直口。口縁部はやや太く丸み。明瞭な擦痕はない。	3 G 1層下部
205	小皿	染付	7.0	—	—	胸部に文字(腹部分では2文字)が書かれている。具体的なため解説困難。	4 G 土坑1
206	小皿	染付	—	—	3.6	外底・腰全体に墨り。鶴山文。外底にも文様があり。	3 G 1層下部
207	杯	染付	5.0	2.7	1.7	口縁端部がゆるく外反。脚部に不明支撑あり。	4 G 土坑2上層
208	杯	色絵	6.0	2.6	1.8	方形舟形。裏面、金、赤色で見込みに模様模もしくは日章旗、「七歩」跡を細く。	4 G 1層下部
209	皿	脚附船琴	11.6	2.3	6.0	内面墨。胎土は灰白色で、やや軟質。白釉。	4 G 1層
210	皿	脚附船琴	12.8	2.4	6.6	内面墨。胎土は灰白色で、やや軟質。白釉。	3 G 1層下部
211	皿	脚附船琴	11.0	2.5	6.0	内面墨。胎土は灰白色で、やや軟質。白釉。脚附・測量用に鉛付番。	3 G 1層下部
212	皿	白磁	13.2	2.8	6.6	輪花盤。輪は青色で透感感がある。	4 G 1層下部
213	蓋	緑絵、色絵	—	—	—	1992年3月25日。外縁には赤・白・緑・金色で草花文を細く。	4 G 土坑2上層
214	大皿	空瓶割り・磁頭	—	—	10.0	外底は直口。	不明 1層
215	色絵	色絵	—	—	7.0	底面に金・黒・赤で輪を輪廻的に描く。216と同 因傷か?	2 G P29
216	色絵	色絵	—	—	—	注口部。外底は金・黒・赤で輪を輪廻的に描く。215と同 因傷か?	2 G 1層下部

第 25 表 金属製品・骨製品・石製品観察一覧

図No	種類	形態	法量(gm)			観察事項	出土地点
			長	幅	厚		
187	青銅製品	環	長4.3	小口径1.0	厚0.1	火皿は欠損。軸製摩天炉(底径0.7cm、高さ6.6cm、厚さ0.1cm、残存高3.2cm)が埋在。	4 G 1層下部
188	青銅製品	環	長4.7	小口径1.1	厚0.1	火皿は欠損し、先端がつぶれている。裂返しの見込みが顕著。不明の刻印?あり。	3 G 1層下部
189	青銅製品	環丸	長3.6	口径6.65	—	底部に深3mm、深さ1mmの凹み。ライフルマークは見られない。1系の刻み日。	2 G 1層下部
190	鉄製品	鍔鉄	長9.9	幅0.6	厚0.6	5×4mmの穴六ヶ所。中央左側に幅0.5cm、高2.0cmの突出部あり。	3 G 1層下部
191	骨製品	尖端器	複数	長3.7	最大径0.8	茎部斜径0.4 先端及び茎部は欠損。裂ぎ目には浅い沈痕があり。身に研磨の棱があり。	4 G 1層下部
192	骨製品	ハープラン	複数	長5.6	幅0.9	厚0.4 ノブ状突起。ノブ部の左側が削られ、ノブ部は断続的。	2 G 1層下部
193	石製品	硯	複数	長9.5	幅2.6	厚3.6 底面に刃状の溝。裏面は磨き面。研磨は粗め。	3 G 1層下部
194	石製品	石筆	複数	長4.1	幅0.6	底面は欠損。上部は磨き面。上部は削離している。	不明 1層下部
195	骨製品	ハープラン	複数	長2.3	幅1.2	厚0.3 欠損。ノブ部の小孔は4×4mm。	3 G 1層下部

第 26 表 貝製品観察一覧

図No	素材	法量			出土地点	図No	素材	法量			出土地点						
		長	幅	厚				孔(長・短)	重量(g)	孔(長・短)							
217	ナツカサ	8.5	5.7	2.1	6.4	5.3	3.0	3.0	2.2	1.5	5.6	2 G 土坑3					
218	ナツカサ	5.5	3.9	1.7	4.2	2.8	26.5	1.0	1.0	1.4	7.0	4 G 1層下部					
219	ナツカサ	2.2	1.7	0.6	1.5	1.2	2.1	4.0	1層下部	—	3.0	4 G 土坑1					
220	ナツカサ	2.1	1.5	1.8	1.5	1.0	1.6	3.0	1層下部	—	3.5	4 G 土坑1					
221	ナツカサ	2.2	1.6	0.7	1.5	1.1	2.2	4.0	1層下部	—	3.1	2.0	4 G 1層下部				
222	ナツカサ	2.9	2.2	0.9	2.0	1.5	4.7	4.0	1層下部	—	13.8	10.6	4 G 土坑1				
223	ナツカサ	2.8	1.8*	0.7	4.0	2.8	2.6	3.0	1層下部	—	10.9	7.3	3.2	1.3	1.6	133.2	4 G 1層下部
224	ナツカサ	3.7	2.8	1.0	2.4	1.6	9.1	2.1	1.0	1.0	7.8	5.7	2.3	0.6	0.9	31.6	2 G 1層下部
225	ナツカサ	3.2	2.8	1.0	2.0	1.3	9.2	2.0	1.0	1.0	10.1	6.7	2.7	0.8	0.9	28.2	4 G 土坑1
226	ナツカサ	3.3	2.7	1.1	1.9	1.4	8.6	3.0	2.0	1.0	24.0	7.9	4.7	0.6	0.7	41.6	4 G 土坑1
227	ナツカサ	3.3	2.5	1.1	2.0	1.6	7.0	1.0	1.0	1.0	7.5	6.2	4.9	0.4	0.5	81.2	4 G 土坑8
228	ナツカサ	3.6	2.7	0.9	2.3	1.7	8.2	1.0	1.0	1.0	14.9	13.0	8.9	1.0	1.0	51.0	1 G 1層下部
229	ナツカサ	3.2	2.5	0.8	2.1	1.6	7.2	4.0	P7	—	4.3	1.5	1.3	3.0	0.7	4.5	4 G P6
230	ナツカサ	3.5	2.6	0.9	2.3	1.7	7.8	3.0	1層下部	—	5.3	1.7	1.6	0.3	0.3	11.6	4 G 土坑2下層

第 27 表 円盤状製品観察一覧

図No	素材	法量			出土地点	図No	素材	法量			出土地点	
		長	幅	厚				孔(長・短)	重量(g)	孔(長・短)		
245	升溝度無利西25	3.6	3.5	0.9	21.4	2 G	平真	3.7	3.5	1.7	27.6	4 G 1層下部
246	升溝度無利西25	5.6	5.4	0.8	39.1	3 G	平瓦	6.3	6.0	1.6	84.7	3 G P23
247	升溝度無利西25	6.5	6.2	1.1	68.5	3 G	1層下部	—	—	—	—	4 G 1層
250	近代陶器陶礫(型頃)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

ハナビラタカラ3、ハナマルユキ14)、ヒメジャコガイ4点、リュウキュウサルボウ1点、チョウセンサザエ1点、ヤコウガイ1点、ヌメカワニナ1点、チョウセンフデ1点である。

243は3ヶ所穿孔しており、244は1ヶ所の孔に溝状の摩擦痕が横断して見られる。

12. 円盤状製品(図版23、第27表 245~250)

6点出土している。素材は、沖縄産無釉陶器3点、瓦2点、近代陶磁器1点である。

13. 貝類遺体(図版2~4、第28~32表)

本遺跡では、土器の次に貝類遺体が多く出土した。この貝類遺体は、調査現場において通常の遺物と共に取り上げたピックアップ資料である。貝種の同定は当センターの標本、出土資料により判断した。集計表(第31・32表)については、グリッド・層序ごとに分けて、遺構は明らかに近代の遺構である土坑1と土坑2、まとまって出土した4グリッドI層下部貝集中地点以外は、概ね中森期に当たるII層の遺構として4つに分けている。なお、遺構で出土した貝類の詳細は、第1・2表を参照していただきたい。最低個体数の算出は、巻貝は完形と殻頂の合計、二枚貝は左(L)右(R)ごとに完形と殻頂を合計し、多いものとした。破片だけ出土している場合は、1個体とした。

第29表には、出土最低個体数が多い10種類とそれ以外に分けて出土傾向を示した。

全体の傾向を見ると、アラスジケマンガイが最も多く、オキナワウスカワマイマイ、イソハマグリ、シレナジミが続く。また、巻貝ではチョウセンサザエが目立つ。オキナワウスカワマイマイについては食用にしていたかどうかは様々な見解があるのでここではその是非については保留したい。

グリッド間においては、貝種の差は明確ではないが、出土量については3・4グリッドで70%を占めている。層序においてはI層下部が47%と最も多く、貝種の差はアラスジケマンガイが最も多いという傾向は共通している。しかしながら、遺構ではホソスジナミガイとナミノコマスオが目立つこと、II層ではチョウセンサザエなどの巻貝がほとんど見られないという傾向がある。また、より顯著な貝種の違いが見られるのは、4グリッドI層下部貝集中出土地点で、やはりアラスジケマンガイは一番多いが、ナミノコマスオ・マルアマオブネも比較的見られる点で、他の傾向と異なっている。これらの違いの原因については、他遺跡の調査事例が更に必要だが、採取もしくは消費される貝種に本遺跡においては時期的な違いがあった可能性が指摘できる。4グリッドI層下部貝集中地点は、ナミノコマスオが多いという点でII層の遺構との共通点が見られることから、時期的に近接する可能性も考えられよう。

このような傾向を生息地で見ると、最も多いアラスジケマンガイが生息する干潟・マングローブ域が4割を占め、外洋・サンゴ礁域のものは3割である(第30表)。この傾向について、次に挙げる石垣島南東部に位置する中森期の3遺跡との比較により少し考えてみたい。

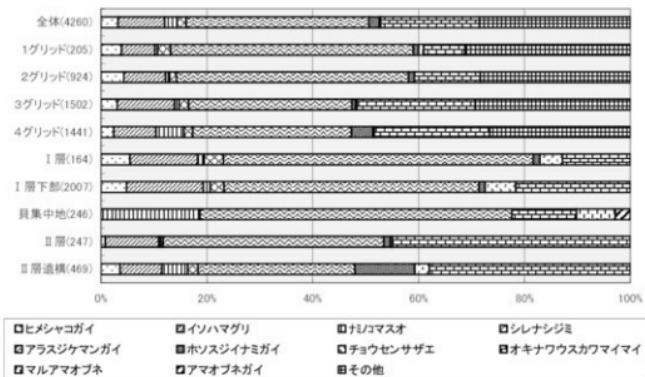
本遺跡とは5kmほど離れた南東部の海岸沿いに位置するカンドウ原遺跡では、マガキガイ・ヒメジャコガイが圧倒的で、サラサバティ・コオニコブシ・アラスジケマンガイ・チョウセンサザエと続く(県教委1984)。これから約2km内陸部に位置するアラスク村跡でもマガキガイが圧倒的に多い(県教委1985)。また、この500m南のウイヌスズ遺跡では、チョウセンサザエ・マガキガイ・オニツノガイ・コオニコブシガイとなる(県教委1985)。

以上より、これらの3遺跡はマガキガイが多いということが言え、これはサンゴ礁域の内側の礁湖(イノー)に生息するものである。他の貝種もサンゴ礁域で採取できるものが多い。本遺跡でもチョウセンサザエやイソハマグリなどサンゴ礁域のものも見られるが、マガキガイは多くはない。このことから、石垣島の中森期の遺跡においては、南東部がサンゴ礁、本遺跡が位置する南西部では干潟・マングローブ域というように、採取できる貝にやや違いがある可能性が現時点では想定できる。

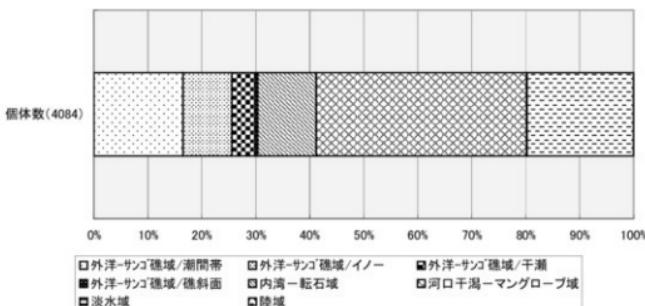
第 28 表 貝生息地の分類 (黒住 1987)

外洋～内洋	水 深	底 質
I 外洋・サンゴ礁域	0 潮間帯上部 (I ではノッチ、III ではマングローブ)	a 岩板
	1 潮間帯中・下部	b 転石
II 内湾・転石地域	2 亜潮間帯上縁部 (I ではイノ一)	c 岩礫底、砂泥底、砂底
	3 干瀬 (I にのみ適用)	d マングローブ植物上
III 河口干潟・マングローブ域	4 碓斜面およびその下部	e 淡水の流入する礫底
IV 淡水域	5 止水	
	6 流水	
	7 休内	
V 陸域	8 林内・林縁部	
	9 林縁部	
	10 海浜域	
VI その他	11 打ち上げ物	
	12 化石	

第 29 表 貝類遺体の種組成



第 30 表 貝類遺体の生息地類型組成



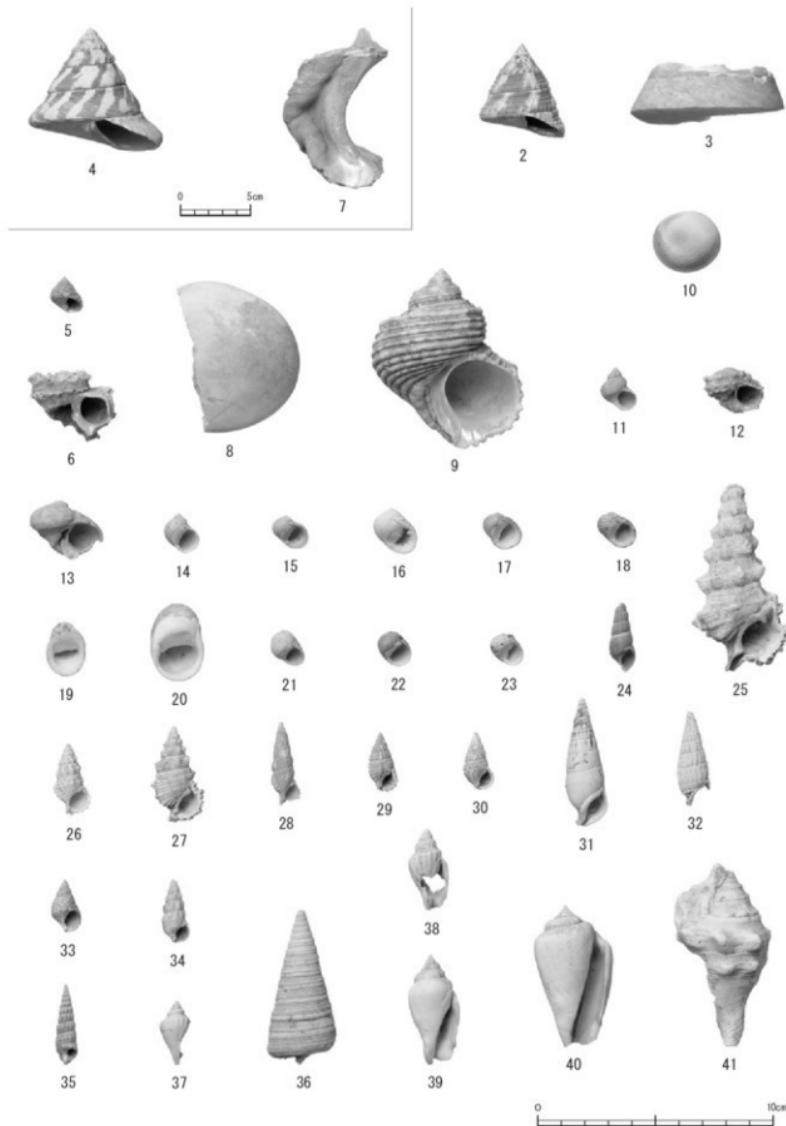
第31表 貝類遺体出土状況（巻貝）

種類	科名	種名	生息地	1グリッド			2グリッド			3グリッド		
				I層 個体	II層下部 個体	III層過橋 個体	I層 個体	II層 個体	III層過橋 個体	I層 個体	II層下部 個体	III層 個体
1	ミミガイ科	ミミガイ科不明		1-2-a	1	1	5	3	4	7	1	4
2		ミミガイ科		1-2-a	1	1	5	3	4	7	1	4
3	ニシウツギワグイ科	メシカハグイ		1-2-a	1	1	5	3	4	7	1	4
4		サラバハイ		1-4-a	2	1	3	4	3	1	10	4
5		オキタウツギダラミ		1-1-b			1					
6		リュウキウカクタベ		1-4-a	1		1					
7		ヤコブギの巻		1-4-a			1					
8		ナツセシナゼ		1-3-a		1	1	1			1	1
9	サザエ科	ナツセシナゼの巻		1-3-a		1	23	33	8	10	1	21
10		コシカラカサガ		1-2-a								
11		カムラカサガ		1-2-a								
12		オオソシマガイ		1-1-b			2	1	8		2	1
13		ヒメシタラミマヨブ		1-1-b			1					
14		コシカラカサガ		1-1-b								
15		キシバマガイ		1-0-a			1				1	
16		コシカラカサガ		1-0-a								
17		オオミツガガイ		1-1-b			1				4	1
18	アマオフネガイ科	オオミツガガイ		1-1-b							1	1
19		アマオフネガイ		1-1-b							1	1
20		ニシアオサブ		1-0-a			3	2	1	1	11	1
21		シシリカコ		1-0-a							1	1
22		イシカコ		1-0-a							1	1
23	トカラタカニワニ科	カノゾガイ		1-0-a							1	1
24		メメカラワチ		1-0-a							1	1
25		オニミツガガイ		1-2-a		1	1	1			2	1
26		ゴロボウ		1-4-a							2	1
27		オノメツガガイ		1-4-a							2	1
28		メイロカニヒリ		1-0-a							1	1
29	オニツノガイ科	カヤミキモリ		1-1-b							2	1
30		イワツナニキ	カニモリ	1-0-a							1	1
31		タコカニモリ		1-0-a							1	1
32		3コカニモリ		1-2-a			4	3	2	2	1	4
33	コマニニ科	ゴマニニ		1-0-a			1			3	1	1
34	ウニニ科	リュウキウウニニ		1-1-b			2	1	2	1	4	1
35		イシウニ		1-0-a							1	1
36		コトヘタリ科	シシリカ	1-0-a	2	1	1	8	4	2	14	1
37		オハラガイ		1-2-a							1	
38		フジツジカシマキモ		1-2-a							1	
39	ソデボウ科	キジガキ		1-2-a	1		7	3	3	1	13	2
40		マダガキ		1-2-a	1		1	4	3	1	17	1
41		マダガキ		1-2-a							1	
42		ヤクシマダラ		1-2-a			1				1	1
43		ホシカラ		1-2-a							1	
44		ヒメシタラミ		1-2-a			1				1	
45		ヒメシタラミ		1-2-a							1	
46	タカラガイ科	ナツカモドキ		1-2-a			1				2	
47		ハナタカラダラ		1-1-b	1		7	3	3	1	13	2
48		キヨダラカ		1-1-b			1				2	1
49		ハナタカラ		1-2-a			1				1	
50		カニモリ		1-0-a							1	
51		トリガイ		1-2-a							1	
52	タマガイ科	リスガイ		1-2-a							1	
53		ホクシユタマ		1-1-b								
54		スミシタラ		1-1-b								
55		フジツガイ科		1-2-a								
56	フジツガイ科	カヌライ		1-4-a		1					1	
57		ゲンジボウ		1-4-a			1					
58		ウキンイイダマシ		1-1-b								
59	アッキガイ科	シシリカタマシ		1-1-b								
60		シシリカタマシ		1-1-b								
61		オニツノガイ		1-0-a								
62	オニコブシガイ科	オニコブシガイ		1-1-b			1				1	
63		コオコブシ		1-1-b							2	1
64	フトヨガイ科	フトヨガイ		1-2-a							1	
65		オニツノガイ		1-1-b			1				4	1
66		アラシシロ		1-2-a							2	1
67	ムシロガイ科	ヒメアリレムシロ		1-2-a			1				1	
68		アラシシロ		1-2-a								
69		アラシシロムシロ		1-2-a			2	1			1	1
70	エゾバイ科	ホラマシ		1-2-b	1		2	1	2	1	1	
71		イドモガラ		1-2-a			2	1	2	1	3	1
72		ナガトモガラ		1-2-a							1	
73		ハナモガラモモガラ		1-2-a								
74	イドモガラ科	カヌモガラツモガラ		1-3-a							1	
75		ブノモタキ		1-2-a								
76		ナトモガラ		1-2-a			1					
77	ツナギ科	ナツセシナゼ		1-2-a		1						
78		クサガラシコエミサン		1-2-a			3	3	2	1	2	1
79		カヌモガラ		1-2-a							1	
80		マダガキ		1-1-a	1		1				4	
81		サヤガキ		1-1-a							1	
82	イモガイ科	ジムシカラセガタイ		1-1-a			1					
83		ナツカモドキ		1-1-a			1					
84		ナツカモドキ		1-2-a			1					
85		セセイモ		1-2-a								
86		キヌカツツギモ		1-2-a								
87	イモガイ科	イモガイ		1-2-a			1					
88		モミイモ		1								
89	タケノコガイ科	ババク		1								
90	タケノコガイ科	オオタケシ		1-2-a								
91	カラツツギ科	コラツツカラツツギ		1-2-a								
92	タケノコガイ科	オオタケツツギ		1-2-a								
93	オナジマイマイ科	オキタウスカラクマイマイ	Y-9	16	1		66	10	10	43	2	1
94	オナジマイマイ科	オキタウスカラクマイマイ	Y-9	16	1						(81)	10
95	コブシ科	コブシ		1			1					105
96	希貝科	希貝		1			1					1
		合計		38	7	6	172	18	10	438	132	

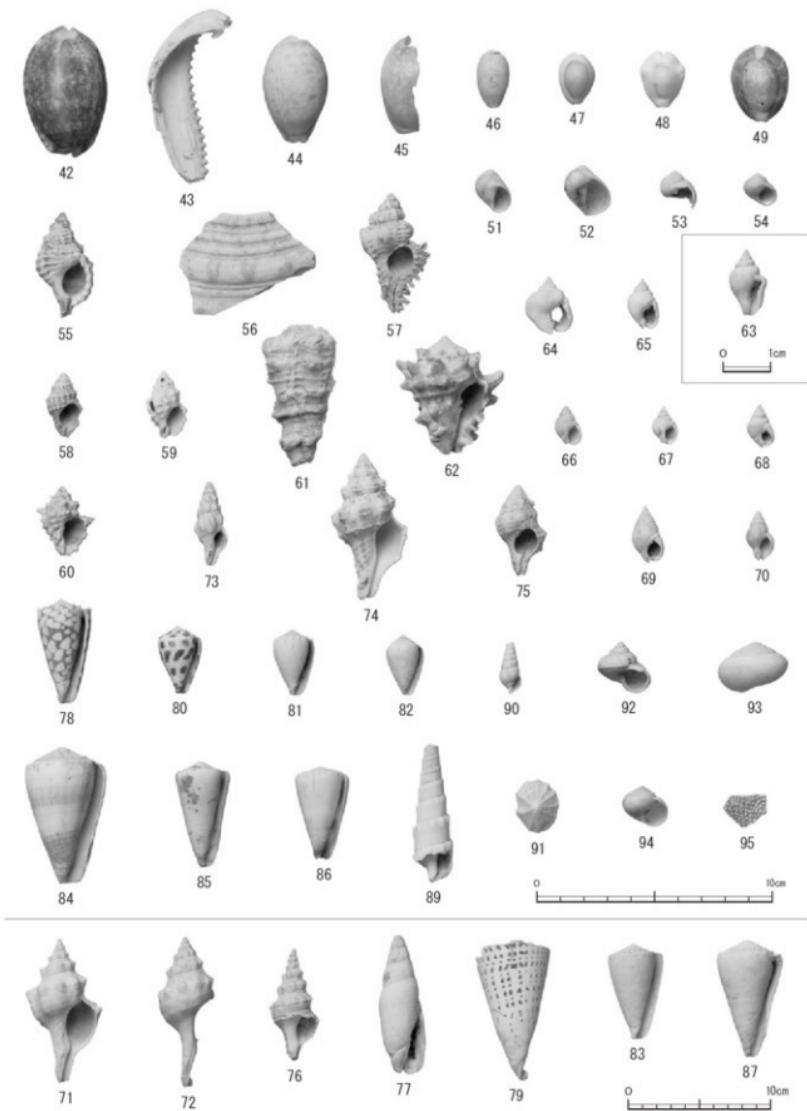
第32表 貝類遺体出土状況（二枚貝）

種類	科名	貝種名	出土地	1グリッド			2グリッド			3グリッド		
				1周	1周下限	上限過帳	1周	1周下限	上限	1周	1周下限	上限
ツノガイ科	エガイ	1-9-a					3	4		3	4	2
ツノガイ科	カリザキヨコガイ	2-9-a					2	3		2	3	2
ツノガイ科	ベニミヤギ	2-9-a	3	1					3	3	3	3
ツノガイ科	リュウキョウサルガウ	2-9-a					1	1		1	1	1
ツノガイ科	タマボシガイ	2-9-a	3	1			2	3		2	3	2
ツノガイ科	ソメウツギ	2-9-a								3	3	3
ツノガイ科	イカイガイ	2-9-a	3	1			3	4		3	4	3
ツノガイ科	リュウキョウセヒバヒガイ	2-9-a	3	1			3	4		3	4	3
ツノガイ科	アコヤガイ	2	1				2	3	3	2	3	2
ツノガイ科	クロマツヨガウ	1-9-a	3	1			1	2		1	2	1
ツノガイ科	カインアシガイの一類	2	1									1
ツノガイ科	ユキノコガイ											
ツノガイ科	メンガイの一類						1					
ツノガイ科	ツノガイ	1-9-a								3	3	3
ツノガイ科	クララツヨガウ	2-9-a	20	13	1	2	1	1	12	14	15	14
ツノガイ科	ヒメツヨガウ	1-9-a					1	1		1	1	1
トマヤガイ科	トマヤガイ	1-9-a					0					0
トマヤガイ科	シロザル	1-9-a					2	2				
キラゲルボ科	カネコキラゲル	1-9-a					1	1	1			1
キラゲルボ科	ヒラゲルボ	1										
ザルガイ科	リュウキョウザル	2-9-a					2	3	3		3	3
ザルガイ科	カワラガイ	2-9-a	6	3	1	5	1	1	10	11	10	10
ザルガイ科	シャコガイ	1-9-a	3	1			1	2		1	2	1
ザルガイ科	ヒメシャコガイ	1-9-a	20	13	1	2	1	1	20	22	21	20
ザルガイ科	ヒレシャコガイ	1-9-a							1	1	1	1
ザルガイ科	オガヒヤコガイ	1								1	1	1
ザルガイ科	オオヒヤコ	2	1	2					2	3	3	1
ザルガイ科	シラコガイ									1	1	1
ザルガイ科	シカゴイケヅ類									1	1	1
バカガイ科	ヒラウキヨウカガイ	2-9-a	3	1	1	1	1	1	1	2	2	1
バカガイ科	オオヒヤコ	2	1				1	1		1	1	1
モガリヤス科	イソハベガリ	1-9-a	10	10		1	1		10	10	11	10
モガリヤス科	ヒジリヤス	1-9-a	3	1			2	3	3	2	3	2
ツノミツカヒ科	リュウキョウナシコ	1-9-a								1	1	1
ツノミツカヒ科	ゼメラ	1-9-a					1	1		1	1	1
ツノミツカヒ科	リュウキョウシタクリ	2-9-a	3	1			2	3	3	2	3	2
シオサザケ科	アズメガイ	2-9-a							1	1	1	1
シオサザケ科	リュウキョウマスガ	2-9-a	3	1	1	1	2	3	3	2	3	2
ツバガリガイ科	ツバガリガイ	1-9-a							1	1	1	1
シラミ科	シラミシラミ	2-9-a	20	13	1	2	1	1	20	22	21	20
シラミ科	エノメガイ	2-9-a					1	1		1	1	1
シラミ科	カノコアサリ	1-9-a								1	1	1
アラスジカツンガイ	アラスジカツンガイ	2-9-a	70	40	1	1	14	11	11	40	40	40
アラスジカツンガイ	ホソスジカツンガイ	2-9-a	70	40	1	1	14	11	11	40	40	40
ホソスジカツンガイ	ホソスジカツンガイ	2-9-a	3	1	1	1	4	3	3	4	3	3
イカミヤギ科	イカミヤギ											
マルスダレガ科	ヒラカツマガリ	2-9-a								1	1	1
マルスダレガ科	オイカタミ	2-9-a					1	1		1	1	1
マルスダレガ科	リュウキョウアサリ	2-9-a								1	1	1
マルスダレガ科	ヒラカツマガリ	2-9-a								1	1	1
マルスダレガ科	スドレハマガリ	2-9-a	2	2			2	3	3	2	3	2
二回目	二枚貝不明	117	31				1	1		1	1	1
合計		117	31	6	1		200	66	100	20	670	100

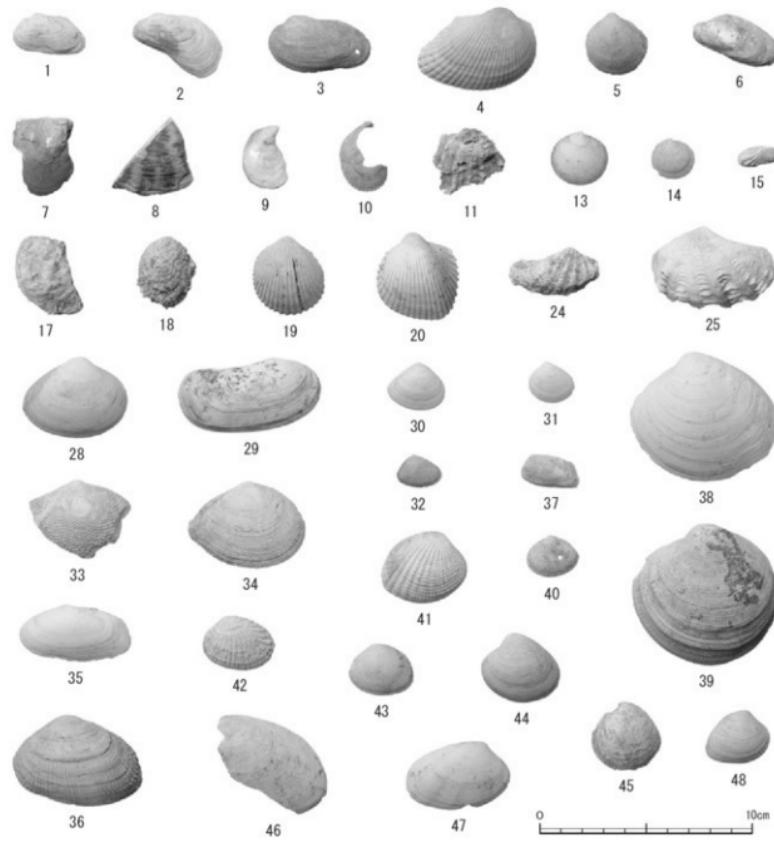
種類	出土地	ヨグリッド	4グリッド												グリッド本数																
			主導地			下野			高崎平地			主役I			主役II(上層)			主役II(下層)			主導地			他の本村			1層			1層下野	
種類名	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物	遺物
エガイ																															
カリヨネエガイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ヘヌエガイ																															
リュウキュウサルコウ																															
ソツワグリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
リュウキュウヒカリガイ																															
アラヤガイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
クロチカラガイ																															
カシタガリの一種																															
ユキモノガイ																															
メンガイの一種																															
ツガガイ																															
ウラキツカガイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
セツリガイ																															
トヤガラガイ																															
シロザル																															
カクシノキウザル																															
リュウキュウサルの一種																															
リュウキュウザル	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
カクシガイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
セミシャコガイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
セシシコガイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ナガシシコガイ																															
オオシラヌヌ																															
シラヌヌ																															
シヤコガイ科半卵																															
リュウキュウシカガイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
オオトリゼガイ																															
イハバハグリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
アガマスオ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
リュウキュウナモノコ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
サザラ																															
リュウキュウシラトリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
マオオガイ																															
リュウキュウスマ																															
フガガイ																															
シレナジミ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ヌメガイ																															
カココサリ																															
アラヌサリヤンガイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ホコジマガイ																															
イリヤガイ																															
ヌカガバマグリ																															
オノカガバ																															
リュウキュウマサリ																															
リュウキュウカクマサリ																															
スダレハマグリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
二枚貝不規	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
合計	45	36	446	298	461	71	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	



図版2 卷貝(1) ※番号は第31表と一致



図版3 卷貝(2) ※番号は第31表と一致



0 1 10cm



0 1 10cm

図版4 二枚貝 ※番号は第32表と一致

14. 脊椎動物遺体（図版5・6、第33～46表）

脊椎動物遺体も貝類遺体と同様にピックアップ資料である。種の同定は当センターの現生標本と県内出土資料の比較により、県埋文（2005）などを参考にして、明確に認識できるものについてのみ行った。なお同定には、魚骨は菅原広史、哺乳類は並木基真の協力を受けた。

出土した脊椎動物遺体の種類は、第33表に示したとおり、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類である。その詳細については、各表に示したが、数量については原則的に種や科が同定できたものに限っている。

魚類 同定対象としたものは、主に前上顎骨、歯骨、主上顎骨、各骨、方骨など顎骨周辺部位と、一部は咽頭骨、棘、椎骨も対象とした。

種別としては、カツオが多く同定できることができたことが注目されるが、大半は近代の遺構である土坑1・2から多く出土しているので、比較的新しい消費のものと思われる。コブダイ型やエフキダイ科の計測できる資料によると、沖縄本島の資料があるが今帰仁城跡や首里城跡などと比べると、全体的に大型の傾向があるようである。また、同定出来なかったが、椎径が3.8cmと大型の椎骨（10）が出土していることも注目される。

爬虫類 ウミガメが出土している。

鳥類 ニワトリと同定できるものと種が不明なものがあった。脛骨・肋骨が多いようである。

哺乳類 ネズミ・ネコ・イヌ・ウマ・イノシシ／ブタ・ヤギ・ウシが確認できた。イノシシとブタの識別については、今回は保留した。出土量から多いものはウシヒイノシシである。

イノシシは、下顎骨があまり摩滅していないものが多く、成獣の中でも若齢の個体が多いと想定される。

ウシは、中手骨（52）の骨長（GL）185mmを測ることから、推定高110～115cmと比較的小型の個体が想定される（西中川編1991に基づく）。

人為的損傷 哺乳類を中心に、イヌ・ウマ・イノシシ／ブタ・ウシで確認された。量的にウシが最も多い。また、魚類の椎骨についても確認している。損傷のタイプについては、久貝（2006）による「カット・マーク」（刃を左右に往復させる傷）が圧倒的に多い。ただ、46は「チョップ・マーク」（比較的厚い刃物による打撃痕）と思われた。イヌ寛骨（11）は深さ2mmの鋭利な傷が平行して2条見られる。ウマ寛骨（17）やウシ肋骨（47）は割口が非常に平滑なため、非常に鋭利な刃物で一度に切断したものであろうか。ウシ仙骨（43）は横位の切傷から下位が折れたような状態であり、刃物で叩き削ったものと思われる。このように、ウシにおいては豪快な解体なされたことが想定される。また、ウシ脛骨（53）は黒変しており、被熱したものと思われる。魚類は傷が残りにくいが、椎骨（8）では横位方向の傷が確認された。

出土傾向 II層及びその遺構からは全般的に脊椎動物遺体の出土は少ないが、ウシ・イノシシ／ブタ・イヌ・トリ、魚類ではハマエキ・クロダイが出土している。このような傾向は、石垣島・西表島などの中森期の遺跡に

第33表 脊椎動物遺体一覧

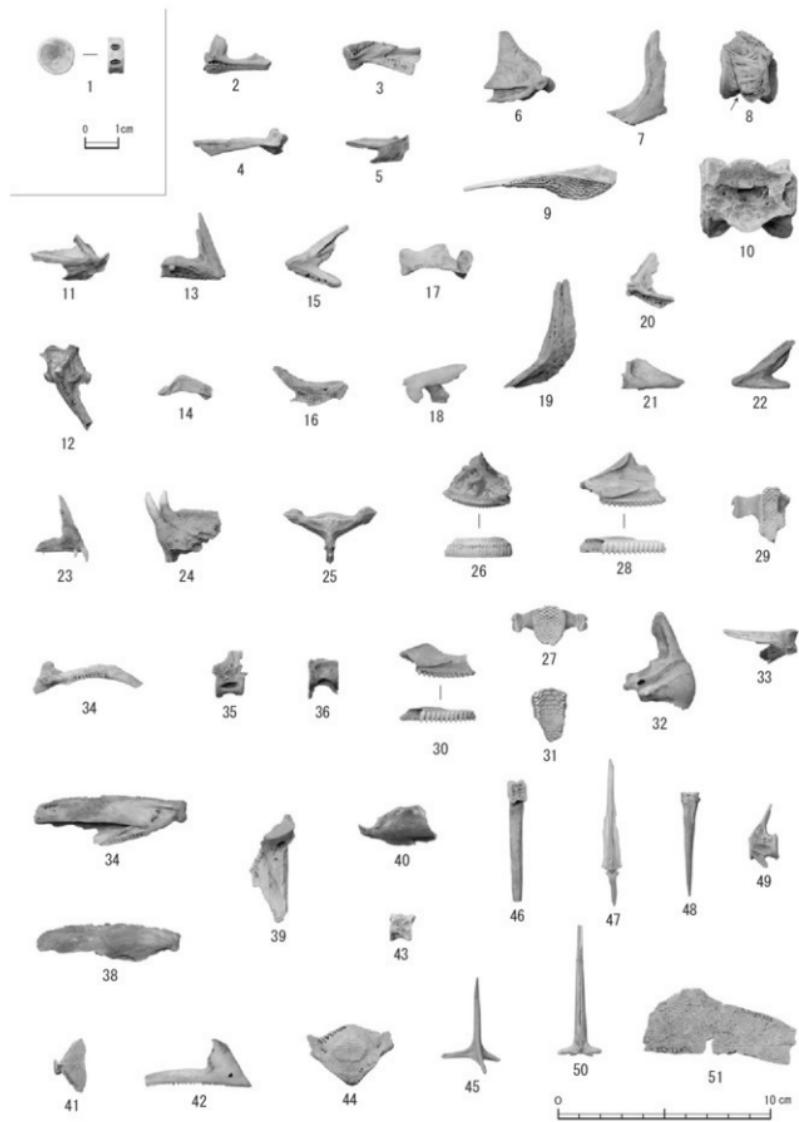
軟骨魚綱	CHONDROICHTHYES	爬虫綱	REPTILIA
メジロザメ科	Carcharhinidae	ウミガメ科	Cheloniidae
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES	鳥綱	AVES
ハタ科	Serranidae	ニワトリ	<i>Galus galus</i>
アジ科	Carangidae		
エフキダイ科	Lutjanidae	哺乳綱	MAMMALIA
クロダイ属	<i>Acanthocybiongryphus</i> sp.	ネズミ科	<i>Murinae</i>
エフキダイ属（ハマエフキ）	<i>Lethrinus</i> cf. L., <i>nebulosus</i>	イヌ	<i>Canis familiaris</i>
エフキダイ属（キツネエフキ）	<i>Lethrinus</i> cf. L., <i>miniatu</i>	ネコ	<i>Felis catus</i>
ペラ科（コブダイ型）	<i>Labridae</i> cf. <i>Semicossyphus reticulatus</i>	ウマ	<i>Equus Ferus</i>
イロブダイ	<i>Balistes polylepis</i>	イノシシ／ブタ	<i>Sus scrofa</i>
ナンヨウウブダイ	<i>Scarus gibbus</i>	ヤギ	<i>Oreamnos americanus</i>
ナガブダイ	<i>Scarus rubroviolaceus</i>	ウシ	<i>Bos taurus</i>
スマ	<i>Euthynus affinis</i>		
カツオ	<i>Katsuwonus pelamis</i>		
ハリセンボン科	<i>Didemnidae</i>		

第34表 魚類出土状況

科 種 部位(左/右)	グリッド 層序・遺構	1グリッド		2グリッド				3グリッド			4グリッド			不明 総数	左/右
		1 層 下部 土 質 基 盤	II 層 下部 土 質 基 盤	III 層 下部 土 質 基 盤	P40 P41 P44 P50	P30 P33	IV 層 下部 土 質 基 盤	P4	II 層 下部 土 質 基 盤	P4	IV 層 下部 土 質 基 盤	P4			
ハタ科	メジロザメ科	前上部骨	0/1											0/1	2/0/2
		上部骨		0/1			1/0		0/1					1/2	6/2/4
		頭骨					0/1							1/0/1	
		下顎骨		0/2										2/0/2	
		方骨		1/0	1/0									2/0/0	
		前頭部骨												0/1/1	
アジ科?	種不明	頭骨												6/2/4	
		上部骨												1/1/0	
		骨盆骨												1/1/0	
フエダイ科	種不明	骨盆骨												1/1/0	
		頭骨												1/1/0	
		下顎骨												3/1/2	
タイ科	クレタイ	頭部骨	0/2	1/0										1/1/0	
		頭骨												1/1/0	
		下顎骨												1/1/0	
フェキダゲ科	キツネヌマ生	頭部骨												1/1/0	
		上部骨												8/1/2	
		頭骨												3/2/2	
		頭骨												1/1/0	
		方骨	0/1	0/1										0/1	3/1/2
		前頭部骨												1/1/0	
ハラ科	コブダイ	頭部骨												1/1/0	
		頭骨		0/1										0/1	2/0/2
		下顎骨	1				2							1/0	
ブダイ科	オロブダイ	上部骨												1/0/1	
		頭骨												1/1/0	
		ナガブダイ												1/1/0	
		上部骨												1/1/0	
		ナシコウブダイ												1/1/0	
	種不明	頭部骨												0/1	0/1/1
カツオ科	カツオ・スマ鰯	頭部骨												1/0/1	
		骨盆骨												1/0/1	
		方骨												3/1/0	
カツオ	カツオ	上部骨												1/0/0	
		骨盆骨												2/2/0	
		方骨												1/2/0	
カツオ?	カツオ?	上部骨												1/1/0	
		頭骨												2/2/0	
		下顎骨												1/1/0	
ハリセンボン科	ハリセンボン	上部骨	1				1							2/1/0	
		頭骨	1											3/2/0	
		骨盆骨												1/1/0	
科・種不明	メジロザメ科	頭部骨												1/1/0	
		上部骨												1/1/0	
		頭骨												1/1/0	
		方骨												1/1/0	
		前頭部骨												1/1/0	
		骨盆骨												1/1/0	
計		31	2	25	11	3	11	1	1	1	1	1	23	29	21
平均		31	2	25	11	3	11	1	1	1	1	1	23	29	21
標準偏差		21	2	23	11	3	11	1	1	1	1	1	17	21	17

第35表 魚類・爬虫類図版掲載一覧

No	科	種	標本	右/左	頭骨	頭骨	頭骨	頭骨	頭骨	頭骨	頭骨	頭骨	頭骨	頭骨	頭骨
1	メジロザメ科	合体骨	90	I層下部											
2		頭上部骨	石												
3		頭骨	石		90	I層下部									
4		主上部骨	石	40	I層下部										
5	ハタ科	種不明	角骨	石	25	I層下部									
6		方骨	石	26		II層下部									
7		頭部骨	石	26	I層下部										
8		合体骨	石	30	I層下部										
9	アジ科?	種不明	頭部骨	40		II層下部									
10		カツオ	骨盆骨	30	I層下部										
11	フエダイ科	種不明	角骨	石	40	II層下部									
12		骨頭	石	40	II層下部										
13	タイ科	クレタイ	頭上部骨	石	20	I層下部									
14		主上部骨	石	20	I層下部										
15		頭骨	石	40	I層下部										
16		頭骨	石	36	I層下部										
17		主上部骨	石	36	I層下部										
18	フェキダゲ科	ハサブエキ	口蓋	石	36	I層下部									
19		頭部骨	石	26		II層下部									
20		方骨	石	26	I層下部										
21		角骨	石	36	I層下部										
22	セツオニス科	頭上部骨	石	40		II層下部									
23		頭骨	石	40		II層下部									
24	ハラ科	オロブダイ	頭骨	石	40	I層下部									
25		骨盆骨	石	40	I層下部										
26		骨盆骨	石	40	I層下部										
27		骨盆骨	石	40	I層下部										
28		骨盆骨	石	40	I層下部										
29		骨盆骨	石	40	I層下部										
30		骨盆骨	石	30	I層下部										
31		骨盆骨	石	30	I層下部										
32		骨盆骨	石	30	I層下部										
33		骨盆骨	石	30	I層下部										
34		骨盆骨	石	40	I層下部										
35		骨盆骨	石	40	I層下部										
36		骨盆骨	石	40	I層下部										
37		骨盆骨	石	40	I層下部										
38		骨盆骨	石	40	I層下部										
39		骨盆骨	石	40	I層下部										
40		骨盆骨	石	40	I層下部										
41		骨盆骨	石	40	I層下部										
42		骨盆骨	石	40	I層下部										
43		骨盆骨	石	40	I層下部										
44		骨盆骨	石	40	I層下部										
45		骨盆骨	石	40	I層下部										
46		骨盆骨	石	40	I層下部										
47		骨盆骨	石	40	I層下部										
48		骨盆骨	石	40	I層下部										
49		骨盆骨	石	40	I層下部										
50		骨盆骨	石	40	I層下部										
51		骨盆骨	石	40	I層下部										



図版5 魚類・爬虫類 ※番号は第35表と一致

おける一般的な傾向である。一方、近代の遺構である土坑1・2は獸骨が出土しておらず、カツオを中心とした魚類が出土している。このカツオはII層では出土しないため、この遺構もしくは近代の特徴と思われる。

第36表 カメ出土状況

種類	部位	グリッド		総計
		1グリッド	2グリッド	
層序・遺構	I 層	P47.	I 層	
科	下部	P51		
ウミガメ科	助骨板	1	1	2

第39表 ネズミ出土状況

種類	部位	残存部位	右/左		出土地	個数
			右	左		
ネズミ	大腸骨	近位端～遠位端	左	3グリッドI層下部	1	
		近位端	左	3グリッドI層下部	1	
	近位端～遠位端	左	2グリッドI層下部	1		
	脛骨	近位端～遠位端	左	3グリッドI層下部	1	

第41表 イヌ出土状況

種類	部位	グリッド		1グリッド	3グリッド	4グリッド	総計
		土坑	I層				
胸椎	IV	—	—	—	—	—	1
中手骨	V (中足骨?)	右	—	1	—	—	1
寛骨	腸骨部、キズあり	右	—	—	—	—	1
脛骨	近位端	右	—	—	—	—	1
中足骨	V	左	—	—	—	—	1
小豆				1	2	1	2
グリッド小豆				1	3	3	7

第42表 ヤギ出土状況

種類	部位	残存部位	右/左		出土地	個数
			右	左		
下顎骨	dm ₁ , dm ₄ , M ₁ , M ₂	右	4グリッドI層下部	1		
頭椎	破片	—	4グリッドI層下部	1		
胸椎	—	—	2グリッドI層下部	1		
椎体	—	—	2グリッドI層下部	1		

第43表 鳥類・哺乳類図版掲載一覧

No.	種類	部位	残存部位	右/左	グリッド	層序	遺構	備考
1	イノシシ	中手骨	右	30	1層下部			
2	イノシシ	近位端～遠位端	右	30	1層下部			
3	イノシシ	近位端	右	30	1層下部			
4	イノシシ	頭骨	—	40	—	711		
5	ホオジロ	大腸骨	近位端～遠位端	左	20	1層下部		
6	ホオジロ	寛骨	近位端～遠位端	左	30	1層下部		
7	ホオジロ	中足骨	近位端	左	20	1層下部		
8	ヤマハク	胸椎	—	40	—	1層下部		
9	ヤマハク	中手骨	右	—	20	1層下部		
10	ヤマハク	Y	左	—	20	1層下部		
11	ヤマハク	脚骨	右	40	—	1層下部		
12	ヤマハク	脚骨	左	40	—	1層下部		
13	ヤマハク	中足骨	Y	左	40	1層下部		
14	ヤマハク	上脚骨	Y	左	40	1層下部		
15	ウサギ	上脚骨+下脚骨	左	1	不明	20	1層下部	
16	ウサギ	下脚骨	右	30	1層下部			
17	ウサギ	脚骨	右	30	1層下部			
18	ウサギ	脚骨	右	30	1層下部			
19	ウサギ	Y	左	30	1層下部			
20	ウサギ	P ^{MF} /M ^F	右	30	1層下部			
21	ウサギ	M ^F	左	40	1層下部			
22	ウサギ	脚骨	左	40	1層下部			
23	ウサギ	脚骨	左	40	1層下部			
24	ウサギ	脚骨	左	40	1層下部			
25	ウサギ	脚骨	左	40	1層下部			
26	ウサギ	脚骨	左	40	1層下部			
27	ウサギ	脚骨	左	30	1層下部			
28	ウサギ	脚骨	右	30	1層下部			
29	ウサギ	脚骨	右	30	1層下部			

第37表 トリ出土状況

種類	部位	残存部位	右/左		出土地	個数
			右	左		
トリ	肋骨	破片	—	—	2G土坑3	1
	脛骨	遠位端	左	3G I層	1	
	趾骨	遠位端	—	3G I層下部	1	
	中足骨	完存	右	3G I層下部	1	

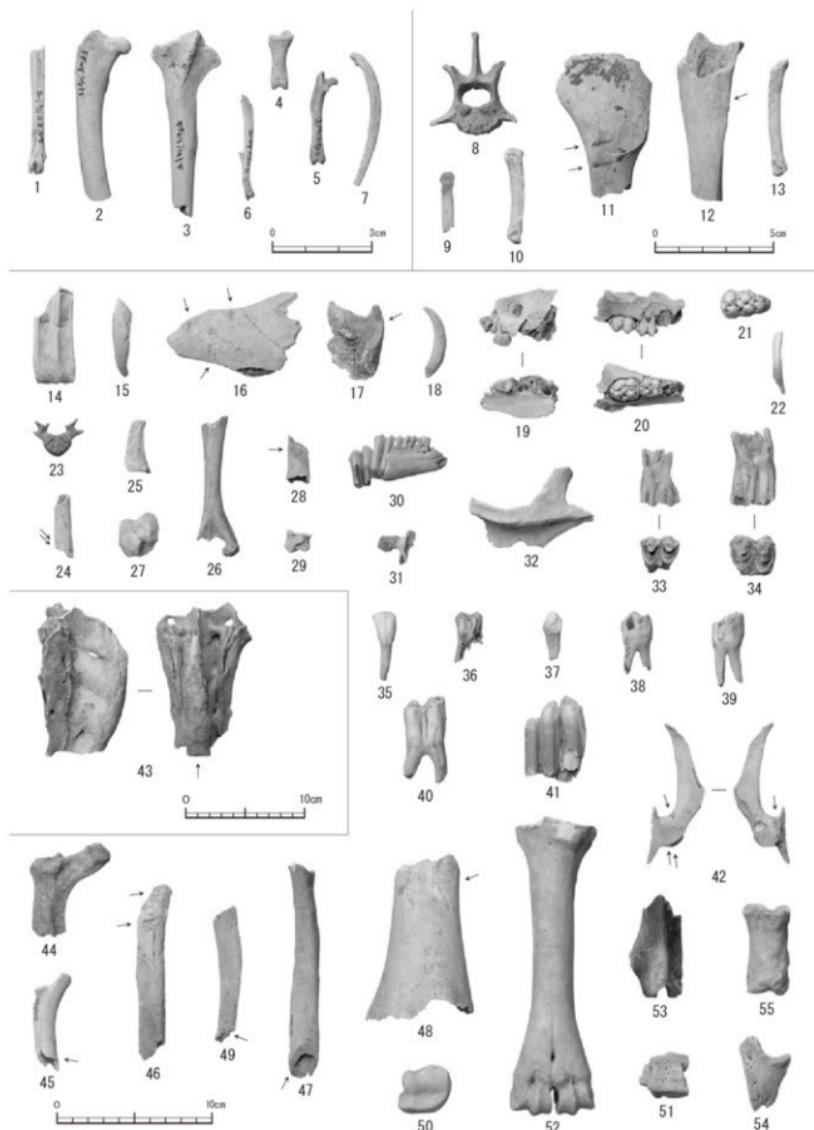
第38表 ニワトリ出土状況

種類	部位	残存部位	右/左		出土地	個数
			右	左		
ニワトリ	大腸骨	近位端～脛骨	右	3グリッドI層下部	1	
	脛骨	近位端～脛骨	左	3グリッドI層下部	1	
	趾骨	完存	—	4グリッドP11	1	
	中足骨	完存	—	4グリッドP11	1	

第40表 ネコ出土状況

種類	部位	残存部位	右/左		出土地	個数
			右	左		
ネコ	肋骨	破片	左	2グリッドI層下部	2	

No.	種類	部位	残存部位	右/左	グリッド	層序	遺構	備考
30	ヤギ	頭骨	dm ₁ , dm ₄ , M ₁ , M ₂	左	40	—		
31	ヤギ	頭骨	破片	—	20	1層下部		
32	ヤギ	頭骨	破片	—	20	1層下部		
33	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
34	ヤギ	上脚骨	M ^F	右	40	1層下部		
35	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
36	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
37	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
38	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
39	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
40	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
41	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
42	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
43	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
44	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
45	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
46	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
47	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
48	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
49	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
50	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
51	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
52	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
53	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
54	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
55	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
56	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
57	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
58	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
59	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
60	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
61	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
62	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
63	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
64	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
65	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
66	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
67	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
68	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
69	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
70	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
71	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
72	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
73	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
74	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
75	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
76	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
77	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
78	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
79	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
80	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
81	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
82	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
83	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
84	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
85	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
86	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
87	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
88	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
89	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
90	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
91	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
92	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
93	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
94	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
95	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
96	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
97	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
98	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		
99	ヤギ	上脚骨	M ^F	左	30	1層下部		



図版6 鳥類・哺乳類 ※番号は第43表と一致

第44表 イノシシ／ブタ出土状況

種類	部位	残存部位	右/左	グリッド		2グリッド		3グリッド		4グリッド		不明	総計
				II層	P40	I層	I層 下部	II層	I層	I層	I層 下部		
イノシシ ブタ	上顎骨	P ¹	右	1							1		1
		M ¹	左										1
		P ³	左				1						1
		P ³ M ¹ M ²	右				1						1
		破片	左				1						1
	下顎骨	I ₁	左					1					1
		I ₂	右			1				1		2	2
	上顎骨or下顎骨 不明	歯の破片	一								3		3
	肩甲骨	遠位端	左			1							1
	上腕骨	近位端～遠位端	左			1							1
鹿	上腕骨	遠位骨頭またはそれ	左			1				1			1
	腰椎	破片	右			1		1					1
	肋骨	破片	キズあり	右									1
	大腸骨	若頭のみ	一										1
	脛骨	遠位骨頭のみ	左					1					1
小計	蛇骨	遠位骨頭のみ	左					1					1
	グリッド小計			1	1	1	8	3	1	7	1	1	24
				2		12			9				24

第45表 ウマ出土状況

グリッド			1グリッド	2グリッド	3グリッド		4グリッド		総計
種類	部位	残存部位	I層 下部	I層 下部	I層 下部	II層 下部	I層 下部	土抗 1	
	上顎骨	P ¹ ～M ¹ 左					1		1
ウマ	下顎骨	P ₁ 石		1	1				2
		破片キズあり				1			1
		破片							1
	上顎骨or下顎骨 不明	切歯片 二 側面破片 二 歯冠 破片 二 歯冠 破片 二 直骨 破片キズあり		1			1		3
小牛	グリッド小牛		1	2	2	1	2	1	9

第46表 ウシ出土状況

種類	部位	残存部位	1グリッド		2グリッド			3グリッド			4グリッド		不規		総計
			I層 下部	II層 下部	土杭 3	土杭 2	I層 下部	II層 下部	P32	P33	土杭 下部	土杭 1	I層 下部	不規	
上顎骨	M ¹	右						1			1				2
	M ²	左						1			1				1
	M ³	右						1			1				1
下顎骨	dmg ₁ or dm ₂	右									1			1	1
	†	左									1			1	1
	P ₁	左									1			1	1
	P ₂	右		2							1			1	2
	P ₃	右									1			1	1
	M ₁	左						1			1			1	1
	M ₂	右					1				1			1	1
	M ₃	右									1			1	1
	底突起(モズあり)	右									1			1	1
上顎骨or 下顎骨 不明	歯の断片	—									6				6
	破片	—													1
側頭骨	頸骨突起	右						1							1
	棘突起	(モズあり)	—				1								1
	蝶骨	(モズあり)	右												1
上顎骨	上顎骨	(モズあり)	右												1
	上顎手根骨	右													1
	上顎骨	右													1
中手骨	中手骨	右													1
	遠位端	左													1
	遠位端	左													1
肋骨	近位端～遠位端	左													1
	破片	左													1
	近位端(モズあり)	右													1
筋	筋	(モズあり)	右												1
	筋	(モズあり)	右												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左												1
筋	筋	(モズあり)	左												1
	筋	(モズあり)	左			</td									

第4章 喜田盛遺跡土坑墓出土の人骨

1.はじめに

沖縄県立埋蔵文化財センターによる平成22年度に行われた石垣島喜田盛遺跡の発掘調査によって、3体の埋葬人骨が出土した。人骨の所属年代は供伴する遺物や層序から15世紀後半～16世紀と考えられている。喜田盛遺跡は平成12年度にも発掘調査が行われており、5体の埋葬人骨が出土している¹⁾。石垣島の同時代埋葬人骨は蔵元跡遺跡²⁾、石垣貝塚³⁾、登野城遺跡⁴⁾などでも報告されているが、今回出土した人骨も石垣島グスク時代人の特徴を知る貴重な追加資料と思われる。以下に人骨の概要を報告する。

2.出土人骨および調査方法

出土人骨

出土人骨の一覧を第47表に示す。この他に1層からも少量の骨片、歯などが検出されているが、詳細は不明である。

第47表 出土人骨一覧

人骨番号	性別	年齢
1号土坑墓人骨	女性	成年
2号土坑墓人骨	不明	乳児
3号土坑墓人骨	不明	幼児

年齢区分と人骨の計測法

人骨鑑定の際に用いた年齢区分はKnussman(1988)⁵⁾を参考に、乳児(出生～1歳)、幼児(1～約6歳)、小児(約6～約14歳)、若年(約14～約20歳)、成年(約20～約40歳)、熟年(約40～約60歳)、老年(約60歳以上)とした。計測はKnussman(1988)⁵⁾に従った。

歯の調査方法

歯はそれぞれの人骨について歯種同定を行い、全体の数量を求め調査を行った。調査項目は咬耗・齶歯・エナメル質減形成とした。咬耗度とそれによる年齢推定についてはBrothwell(1981)⁶⁾を参考にし、歯の萌出による年齢推定については、Ubelaker(1989)⁷⁾を参考にした。また、エナメル質減形成については、山本(1988)⁸⁾の論考を参考にした。

3.人骨所見

1) 土坑墓1人骨(女性・成年)

出土部位：ほぼ全身骨が残存する埋葬人骨である。出土した時点では保存状態は比較的良好と思われたが、骨質が脆く、取り上げる際に破損した部位が多かった。

性別・年齢の推定：四肢骨の筋付着部は明瞭であるが、眉弓および乳様突起の発達が弱いことから、本人骨の性別は女性と推定した。年齢は後述の歯の所見(第4節参照)および頭蓋主縫合のほとんどが癒合していることから30歳代と推定した。

2) 土坑墓2人骨(性別不明・乳児)

出土部位：比較的保存状態の良好な埋葬人骨で、ほぼ全身骨が残存している。

性別・年齢の推定：性別は未成人のため不明である。年齢は残存する歯の形成状態（第4節参照）および四肢骨のサイズ等から生後9ヶ月前後の乳児と推定した。

3) 土坑墓3人骨（性別不明・幼児）

出土部位：下半身のみが検出された。確認できた部位は右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨である。

性別・年齢の推定：性別は未成人のため不明である。年齢は下肢骨のサイズが土坑墓2人骨よりやや大きいことから、1歳～2歳位の幼児と推定した。

4. 健

1) 土坑墓1人骨

咬耗 歯は永久歯21本確認された。歯式を下に示す。下顎左側の第3大臼歯は未萌出だが、上顎右側第2大臼歯遠位側面に齶歯が認められることから、第3大臼歯が萌出していた可能性がある。Brothwell（1981）⁶⁾を参考に、大臼歯の咬耗度によって年齢を推定すると20歳代と考えられるが、上顎右の第3大臼歯が萌出していた可能性も高く、前歯の咬耗も比較的進行しているため、30歳代に達していたと考えられる。人骨の所見を考え合わせると被葬者は大臼歯の咬耗があまり進んでいない30歳代女性が妥当であろう。

7	6	5	4	3	2	1	1	X	3	4	6	
	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7 X

生活痕 歯には全体的に多量の歯石が付着しているが、特に下顎右側に付着する量が多い傾向がある（図版7a）。相対的に右側で頻繁に咀嚼活動を行った可能性が示唆される。上顎右第2大臼歯遠位側面に歯齶空まで達するC4段階の齶歯が認められる（図版7b）。その他の歯に齶歯は認められない。

下顎左犬歯に2本のエナメル質減形成が認められる（図版8c）。山本（1988）を参考に年齢を推定すると、4歳～4.5歳、4.5歳～5歳に連続してなんらかの身体ストレスを受けたことがわかる。右側は多量の歯石により観察することができない。

2) 土坑墓2人骨

歯は乳歯15本確認された。歯式を下に示す。Ubelaker（1989）⁷⁾を参考に、歯の萌出状況による年齢を推定すると9ヶ月前後と考えられる。特徴的な生活痕等は観察されなかった。

E	D	C	B	A	C	D	E
E	D	C	B		C	D	E

5. 人骨の生活痕

土坑墓1人骨において変形性関節症や骨膜炎などの病変が認められた。変形性関節症は、各々の関節にみられ、関節組織の退行性変化（関節軟骨の変性）とこれに伴う増殖性変化（骨棘の形成）などにより関節の形態が変化する現象である。加齢現象や長期にわたる関節への負荷、機械的ストレスなどの要因で発生するとされている^{9) 10)}。

土坑墓1人骨では、上腕骨・尺骨・桡骨・手指骨・足指骨において変形性関節症がみられた（図版8d・e・f）。骨の保存状態が悪く、主に肘関節や指関節の観察しかできなかつたが、やや重度の変形性関節症が確認できた。肘関節は、特に局所的機械的ストレスによって引き起こされることが多く、肘関節を酷使するような肉体労働者に多くみられる⁹⁾のことから、土坑墓1人骨についても肘関節により負荷のかかる動作（労働）に従事してい

た可能性が考えられる。また、手指骨にも認められることから、手作業に従事していた可能性も示唆される。下肢については、足指骨に変形性関節症を認められたが、他の関節が残っていないため、詳細は不明である。

その他に、骨膜炎が認められた。骨膜炎は骨にみられる炎症の一つで、下肢にみられる骨膜炎は衛生状況などの生活環境の厳しさを反映するストレスマークとして用いられることが多い。土坑墓1人骨では、脛骨、腓骨にみられた。より重度な骨髓炎は確認できなかったが、骨の膨隆も確認され、骨膜炎が進行していた状態が確認された（図版8g）。このことから、土坑墓1人骨の生活環境は厳しかった可能性が考えられる。

6. 形質

土坑墓1人骨

骨の保存状態が悪く、特に、頭蓋骨は接合が困難だったため、形態学的調査は四肢骨についてのみ行った。頭蓋骨については、現場での観察および清掃作業時の観察から、一般的に中世人の特徴とされる長頭および歯槽性突窓の傾向が確認されている（図版8h）。

四肢骨は筋付着部が明瞭で筋肉質の体型であったことが推定される。四肢骨の計測値を第48・49表に示す。上肢骨も下肢骨も男性並みの計測値を示しており、全体としては頑丈な体格だったと考えられる。大腿骨の柱状性は認められない。十分な計測値が得られなかつたので、集団の比較など、詳細な分析は出来なかつた。

第48表 土坑墓1人骨の上肢骨計測値

	右	左
上腕骨		
5 中央最大幅	22	23
6 中央最小幅	17	16
7 最小周	57	60
7a 中央周		68
6/5 体断面示数	77.3	69.6
尺骨		
3 最小周		34
11 体矢状径		12
12 体横径		18
11/12 体断面示数		66.7
桡骨		
3 最小周		37
4 体横径	17	16
5 体矢状径	10	10
5/4 体断面示数	58.8	62.5

特記事項

土坑墓1人骨は検出時にはほぼ全身骨が確認されたが、取上げ後の清掃、復元過程では、骨が極端に脆く、また変形した部分も多かったことから、頭蓋骨および下肢骨の接合は難しかつた。全体的にサイズが大きい割に、緻密質の厚さが薄く、特に下肢骨の骨質は脆弱である（図版8i）。写真左の正常な脛骨断面の緻密骨厚に比べて、極端に薄い緻密質であることが分かる。埋葬地周辺環境の影響も否定できないが、本人骨の健康状態はおそらく骨粗鬆症のような状況にあったのではないだろうか。さらに、生活痕の項でも述べたように、本人骨にはほぼ全身の関節に変形性関節症が認められ、関節周辺部の骨破壊も認められる。全身の関節の変形と骨粗鬆症を伴う臨床例として、自己免疫疾患の関節リウマチが考えられるが¹¹⁾、ここでは事実関係の指摘のみを行い、今後の課題としたい。

7.まとめ

1) 石垣島喜田盛遺跡から、埋葬人骨3体（女性1体、幼児1体、乳児1体）が出土した。所属年代は考古学的所見から15世紀後半～16世紀と推定された。

第49表 土坑墓1人骨の下肢骨計測値

	左
大腿骨	
6 体中央矢状径	25
7 体中央横径	27
8 体中央周径	80
6/7 体中央断面示数	92.6

(mm)

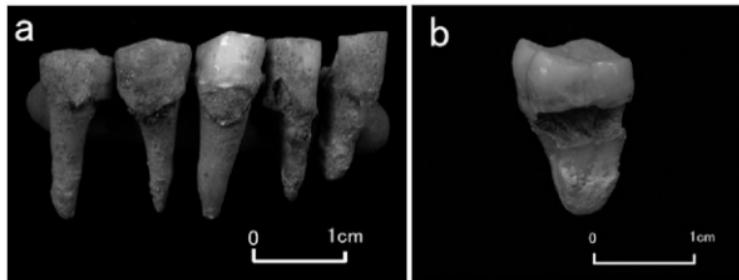
2) 土坑墓1人骨（成年、女性）の調査結果を以下に要約する。

- ・歯には多量の歯石が付着しており、右上顎第2大臼歯には歯槽腔に達する齲歯が認められた。また、左下顎犬歯に4～4.5歳、4.5～5歳に連続して身体ストレスを受けたことを示すエナメル質減形成が2本認められた。
- ・変形性関節症や骨膜炎など、生活環境や衛生環境の厳しさを示す病変が認められた。
- ・骨質が脆く、十分な形態学的分析は出来なかったが、骨の計測値は全体的に筋肉質な体型だったことを示唆している。しかしながら、緻密質の厚さが極端に薄いことから、健康状態はあまり良好ではなかったことも示唆された。

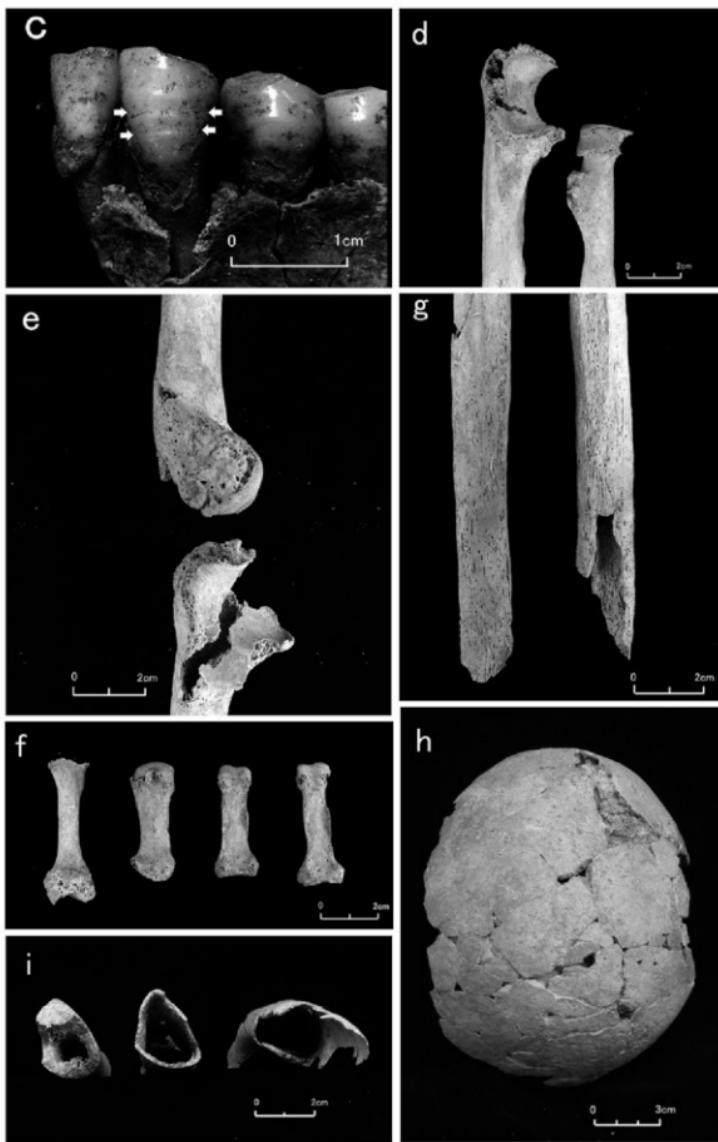
なお、本報告は4を片桐千亞紀、5を徳嶺里江、それ以外を土肥直美で分担執筆した。

参考文献

- 1) 土肥直美・譜久嶺忠彦（2004）喜田盛遺跡出土の人骨、「喜田盛遺跡」石垣市文化財調査報告書第28集、石垣市教育委員会、pp. 129-142.
- 2) 土肥直美・北條真子（1997）八重山蔵元跡遺跡出土の人骨、「蔵元跡発掘調査報告書」石垣市文化財調査報告書第21集、石垣市教育委員会、pp. 129-142.
- 3) 土肥直美（2009）石垣貝塚出土の人骨、「石垣貝塚発掘調査報告書」石垣市教育委員会、pp. 129-142.
- 4) 土肥直美（2009）登野城遺跡出土の人骨、石垣市教育委員会、印刷中。
- 5) Knussman R. (1988) Martin / Knussman Anthropologie. Band 1, Stuttgart, Gustav Fischer Verlag.
- 6) Brothwell DR (1981) Digging up Bones. Cornell University Press.
- 7) Ubelaker DH (1989) Human Skeletal Remains, Teraxacum, Washington, DC.
- 8) 山本美代子（1988）日本古人骨永久歯のエナメル質減形成、人類学雑誌、96, 417-433.
- 9) 鈴木隆雄（1988）『骨から見た日本人』、講談社
- 10) 福島一彦（1988）「西南日本弥生人の骨病変について」『福岡医誌』79 (2)
- 11) 小竹 茂（2005）II. 骨粗鬆症の病型と病態、5. 関節リウマチと骨粗鬆症、日本内科学会雑誌 94, 649-655.



図版7 人骨(1)



図版 8 人骨 (2)

第5章 総括

ここまで、平成22年度の喜田盛遺跡（以下、本遺跡）における発掘調査の事実記載をまとめてきた。今回の調査により、県道真栄里新川線に伴う一連の発掘調査が終了したことになる。そこで、今回の調査成果を整理し、これまでの本遺跡の調査内容もまとめて、現時点での地域における位置付けを検討したい。なお、本稿での中森期の年代観は、土器は新里（2004）、陶磁器は瀬戸ほか（2007）に基づいている。

第1節 調査成果のまとめ

本遺跡は、石垣島南東部の海岸砂丘上に位置し、中森期を主体として近世・近代に及ぶ集落跡である。本節では、今回の調査成果のまとめとして、中森期、近世、近代に分けてその内容を整理する。

中森期 遺物の組成より中森期の主体時期を検討する。土器が全体の約7割と最も多く出土しており、その中でも鍋Bが主体である。更に見ると、外に開く胴部形態である石垣タイプIIに相当する鍋B1、これと上村タイプの中間的なものと考えられる鍋B2が多い。陶磁器で最も多い青磁はV（雷文・外反碗）・VI（細蓮弁文碗）類、白磁はD群皿（内渢皿）が主体である。中森期の青花は少ないので、C（蓮子碗）・D（腰折碗）・E（饅頭心碗）群碗、漳州窯系と時期幅が見られる。このような陶磁器の組成は、14世紀後半～17世紀前半の幅をもつが、その主体は15世紀後半～16世紀前半と考えられる。この年代観は、土器においても大きく矛盾しない。

中森期の遺物の様相としては、土坑3が最も良好である。土器では古い傾向である鍋A（1・59）、鍋B1（18）、鍋B2（24）、壺（18・44）などと、青磁V類（劍先蓮弁文）が共伴しており、中森期の一様相を示している（第24図）。出土個体数は、土器15点、青磁1点、褐釉陶器2点と、土器が8割を占めている。

遺構には、3基の土坑墓、焼土遺構、土坑3・7などやピット群がある。ピットは近世の遺物が少量出土するものが28基あるが、土坑墓を避けるような分布状況であることから、大半は中森期の可能性が高いと考えられる。このような土坑墓とピット群の分布からは同時性があったものと思われ、地上に何らかの目印があったのかもししくは、建物群に近接して墓を営むいわゆる屋敷墓とされる風習などがあったと推測される。

土坑墓は、検出段階より解剖学的見地により取り組んだため、詳細な埋葬姿勢を検討できた。土坑墓1は壮年女性（30代）の仰臥強屈葬でその姿勢から紐などで縛って埋葬されたものと考えられ、また膝蓋骨がないこと



第24図 土坑3出土土器・青磁

から埋葬時には既になかった可能性がある。土坑墓2は乳幼児（9ヶ月前後）が足はやや曲がった状態であるが自然な埋葬と考えられ、土坑墓1との意識の違いが感じられる。土坑墓3は検出時に多くの骨を取り上げてしまつたが、大腿骨は原位置で確認できため、土坑墓2と同様な状況で幼児が埋葬されていたものと思われる。

ピット群はその規模から柱穴と考えられるが、明確な建物プランの復元は困難であった。ただ、一案としてピットの深さが30cmを測る深いものをピックアップしてみると、土坑墓を境界として、東側と西側でピットのまとまりが確認でき、何らかの配列を有していたことは言えよう（第25図）。

焼土遺構は、長さ推定250～280cmの細長い平面形で、断面がU字状を呈するもので、非常によく被熱している。県内での類例はないが、この遺構自体が煙道とも考えられるが、周辺が全く被熱していない。

自然遺物の傾向をまとめる。脊椎動物遺体は、ウシ・イノシシ／ブタ・イヌ・トリ、ハマフエフキ・クロダイ等が出土しており他遺跡と大きな違いはない。貝類はアラスカジケマンガイが圧倒的に多く、マガキガイを主体とする石垣島南東部の遺跡とは異なった傾向である。ちなみに、遺構においてはホソスイジナミガイ・イソハマグリ・ナミコマスオなど、包含層であるII層よりもバラエティがあるといった特徴が見られる。

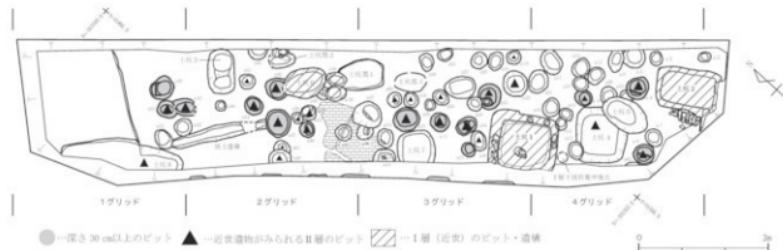
以上、遺物からは15世紀後半～16世紀が主体と考えられ、遺構としては建物が土坑墓3基と同時性をもって存在する集落跡の一部であったことが想定される。

近世 当該期と考えられる遺構は、先述したように埋土がII層のもので近世の遺物が出土しているピットが28基、土坑では4・8などがある（第25図）。しかし、いずれも少量であることからこれらが明確に近世としてよいかの判断を保留せざるを得ない。ただ、I層下部の貝集中地点ではナミコマスオが比較的多いという特徴がII層の遺構との共通性が高いことから、当該期の遺構ではないかと思われる。

遺物から近世における主体年代を検討する。青花では、福建・廣東系が概ね18世紀ごろ（新垣2003）、徳化窯系が18～19世紀（陳1999）と考えられている。本土産では肥前が圧倒的に多く、17世紀後半～18世紀前半のものが主体的に出土している。沖縄産では18世紀代とされる灰釉碗（碗A）が比較的出土しているが、それよりも新しいとされる白化粧碗（碗B）も見られる。また、沖縄産の灰釉碗や無釉陶器には八重山産と考えられるものが若干見られる。バナリ焼の可能性があるものも見られたが、少量である。

以上、17世紀後半～18世紀前半の遺物が多い一方それ以降のものは少ないとや明確な遺構がないことから、当地域では明和（1771年）の大津波で海岸沿いの集落は壊滅したとされておりその影響を想定させる（島袋2002）。上層であるI層下部に白砂のラミナが部分的に見られるが、津波による砂礫の痕跡であった可能性もある。

近代 I層下部を埋土とする土坑1・2・6やピット38・39がこの時期に相当する。土坑1・2は漆喰か貼土を壁・床面に施すことにより水が溜められるような構造となっている。ただ、最終的には廃棄場として使われており、ウシの他、カツオ類の骨が多く出土している反面、貝類が少ない。遺物では、蹄鉄、軍杯や統制陶器、また台湾産陶器などが出土している。また、有孔貝製品の多くはI層下部から多く出土している。脊椎動物遺体



第25図 ピット・土坑の時期区分検討図

や貝類遺体はⅠ層下部が最も多く、カツオ類、ヤギ、チョウセンサザエなど、下層であるⅡ層やその遺構では見られないもしくは少ないものが出土している。

以上、近代においては、この場所は宅地の一角であったものと思われる。なお、Ⅰ層上部で確認された石灰岩製礎石は、層序からは現代となるがかなり古い段階と考えられる。

第2節 喜田盛遺跡における中森期の様相について

平成12・13年度の調査成果（石垣市教委2004）も含めて、本遺跡における中森期の様相を検討する。

平成12・13年度調査の概略 この調査では、中森期（報告書では15～16世紀）、近世（同17～19世紀）に形成された集落跡とされている。中森期の遺構は、土坑墓5基、炉跡4基、石組3基、貝集中地点、柱穴群が検出されている。土坑墓は、姿勢が確認できるものは屈葬で、1号が小児、2号が幼児、3号が熟年男性、4号が若年男性、5号が熟年女性である。柱穴群については非常に密集しており、やはり建物プランは確定できないが、後述するがその分布密度にはやや差がある。炉跡は今回の調査のものと平面形が径約50cmの円形であることが異なっているが、深さ10～20cmで、埋土は多くの炭火物を含み床面が被熱している点は共通する。石組は掘り込みがなく、径約50cmの円形に拳大の礎を完結しない形で弧状に並べており、その性格は不明である。この石組に接して幅0.6m、長さ2mの範囲にアラスジケマンガイが集中する地点がある。

出土遺物においては青磁香炉、メノウ製勾玉、北宋銭など今回の調査で出土していないものも見られるが、全体の傾向では大きく変わらない。近世の遺物は、徳化窯等青花や本土産陶器などが今回よりも多く出土すること、寛永通寶の出土、また東端の16・17地点では完全形に近いバナリ焼が出土することなどが特徴的である。

中森期における遺構の分布状況 第26図は、平成12・13年度及び今回の調査で確認された遺構図をつなぎ合わせたものである。これにより、中森期における遺構の分布状況について見ていただきたい。

土坑墓が近接している範囲をくくると、大きく5グループに分けられる。それによると、東端にA群（1基、幼児）、約20m北にB群（2基、男性）、約20m北西にC群（1基、小児）、約10m西にD群（3基、女性・乳児・幼児）、約45m北西にE群（1基）となり、男性と女性の墓が距離を置くことや女性の墓に子どもが近接する傾向が読み取れる。なお、土坑墓の埋葬方向は、C群のみが東に40°、他は西に40°である。また、炉跡は調査区西側に2地点に分かれており、この間（市グリッド106～109）においては柱穴がまばらである。

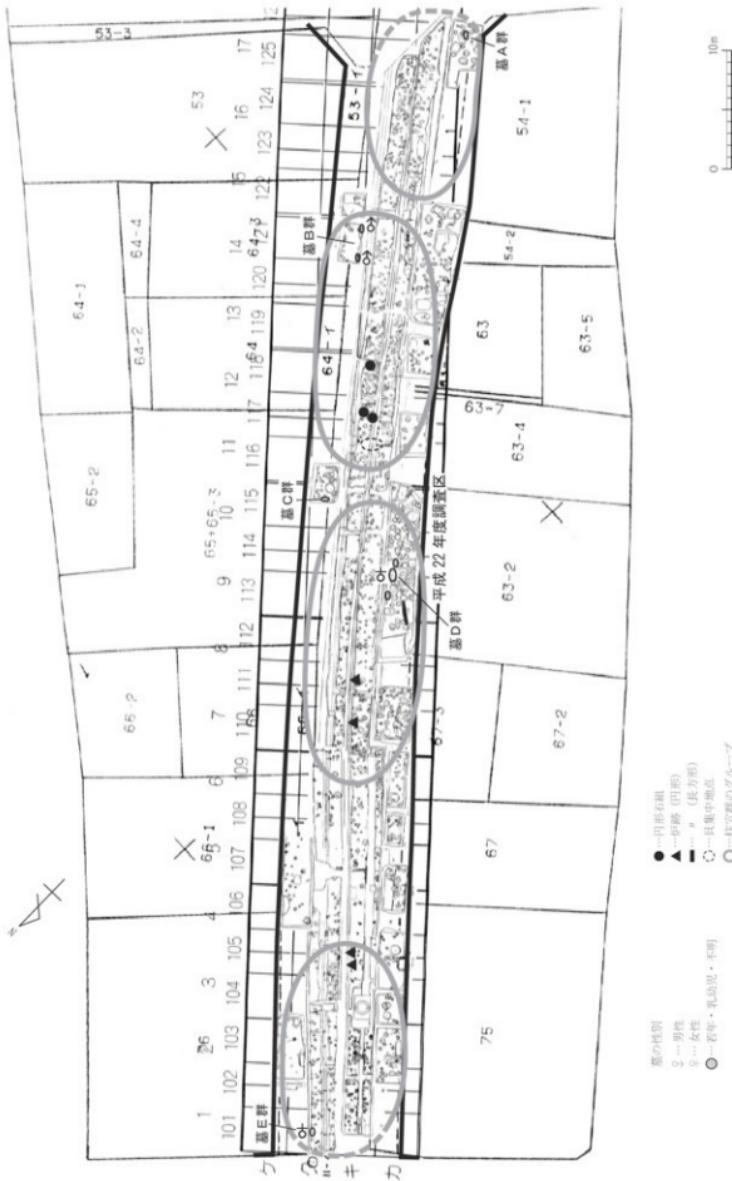
以上の遺構分布から、柱穴群を仮にグルーピングすると、土坑墓や炉跡を境界として一単位20m前後の範囲で捉えるならば、4つのグループがあると考えられる。具体的な建物跡が復元できていない状況で断定は出来ないが、この一単位を緩やかなまとまりをもった屋敷地であったのではないかという仮説を提示しておきたい。

文献・家譜から見た慶田盛村 喜田盛遺跡周辺に関する同時代史料については明確ではないが、近世以降の文献・家譜にはその存在を窺わせる。『八重山島年來記』の1589（万暦17）年には、「慶田盛村いしとの石垣親雲上頭成る、勤続13年間」の記載があり、方言では「キドゥムリイ」と発音され、現在の小字「喜田盛」の由来とされている（石垣市総務2002）。大瀬永亘は文献・家譜に基づき、1500（弘治13）年のオヤケアカハチ・ホンカワラの乱に殺害された那礼当が居住していた場所を、本遺跡に北接する12～15世紀に隆盛したビロースク遺跡一帯と考え、16世紀以降は那礼当の嫡子である美良底大屋宇保久利思（山陽姓の元祖）がこの喜田盛遺跡一帯に移住したと想定している。また、この慶田盛村には、川平村から移住した仲間満慶山の子孫の嘉善姓一門である石垣永将らが1624～42年の八重山キリシタン事件に関係していたとする。参考として、喜田盛遺跡一帯に移住した各一門の大宗（元祖・始祖）の末裔者の屋敷と指摘されている地番を下記に挙げる（大瀬1999・2006）。

① 53番地 憲章姓五世英住小宗（1669～1741年）・六世英定小宗（1724～1755年・五世英住の二男）。彼らの元祖である大宗英乗（不明～1601年）が先述の石垣親雲上とされている。

② 63番地 上官姓五世正房小宗（1654～1734年）。先祖が久米村の程氏京阿波根親雲上とされている。

③ 64番地 山陽姓七世平安座長蔵（1760～1805年）。初代は那礼当を父とする美良底大屋宇保久利思。



第26図 喜田盛遺跡遺構分布図

④65番地 大史姓大宗高教（生卒年不明）。父はオヤケアハカチ・ホンカワラの乱で1500年殺害された波照間島の明宇底獅子嘉殿の三男・環宝と人遠戸。

小結 本遺跡は、15世紀後半～16世紀に隆盛した集落跡で、建物跡に混在し土坑墓が点在する形で分布し、緩やかな屋敷地のなまとりがあつたことを想定した。近世の遺構は明確に把握出来ないため、集落の縁辺部であった可能性も考えられるが、17世紀後半～18世紀前半の遺物は比較的多く、特に調査区東側でパナリ焼が多く出土していることから、この時期にも集落域として機能していたものと思われる。その一方で、18世紀後半～19世紀の遺物は比較的少なく、再び多くなるのは近代以降であることから、先述した津波の影響を受けたものと考えられる。文献・家譜からは、16世紀以降には石垣島における有力者の居住地であったと想定されているが、それを裏付ける顕著な遺構・遺物は確定できない。ただ、本遺跡が16世紀に隆盛していることは文献・家譜とは矛盾がなく、地域の歴史や位置付けを考える上で非常に貴重で重要な事例と思われる。

第3節 喜田盛遺跡の四箇地域及び石垣島周辺における位置付け

さて、石垣島には海岸沿いを中心に中森期の集落跡が多く分布するが、本遺跡が位置する南部地域には特に集中している（第4図）。本遺跡が所在する新川を含めて、石垣・大川・登野城の4字に当たる範囲は、古くから「四箇」と言われた中心地である。この四箇地域は東西に約4kmに亘る市街地で、今回の調査原因となっている県道真栄里新川線が走っており、多くの中森期の集落跡が分布しており、その様相をまとめてみる。

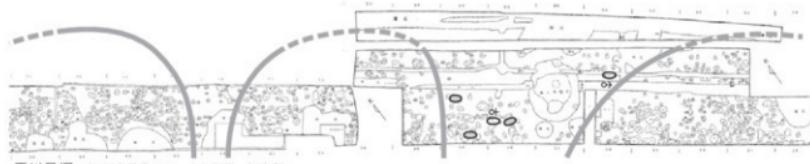
四箇地域における中森期の集落跡の調査 四箇地域の沿岸部は、現在では埋立てが進んでしまっているが、本来は砂丘地に当たり旧海岸線までは100m前後と非常に近い一帯である。この砂丘地には、本遺跡、平川貝塚、石垣貝塚、大川東遺跡、登野城遺跡が分布しており、やや内陸の地点にカワバナ遺跡群、山原貝塚が位置し、ピロースク遺跡のみが丘陵上に立地している（第27図）。以下、これらの遺跡の報告事例を見ていくことにする。

ピロースク遺跡（石垣市教委1983、県教委1994、大漁1999） 本遺跡より約500m北側に、標高約10～20mの小丘陵に位置し、縁辺に石積を設けてその内部に建物跡を配しており、土坑墓も2基確認されている。遺物では白磁玉縁碗やカムィヤキなど12世紀のものが見られるが、その主体は白磁ピロースクタイプに代表される13世紀後半～14世紀である。また、天目などの希少な陶磁器や勾玉や北宋錢が複数出土している。

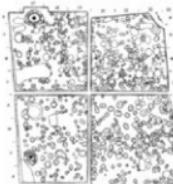
カワバナ遺跡群（県教委1979・大漁1999） ピロースク遺跡より約300m西側の小丘陵に位置し、青磁・白磁・褐釉陶器・天目などが採集されている。この遺物から見ると、15世紀頃が主体と考えられようか。

平川貝塚（石垣市教委1993c） 本遺跡より約500m南東側に位置しており、多くの柱穴群、礫集中部、土坑墓5基、竪穴状遺構が確認されている。柱穴群については、建物プランの復元は出来ていないが、その分布状況から、一案として大きく3つに分けられる。土坑墓は、女性が埋葬される1号墓の中心に、その5m以内に幼児、小児の墓が3基分布する。1号墓より約10m南側に離れた地点に、男性が埋葬される5号墓が位置する。これらの埋葬方向は西に40°である。遺物からは、白磁C3群や土器では石垣タイプが多いことから15世紀前半が主体と考えられるが、16世紀前半までは継続する。青磁では、盤・瓶などの大型もしくは希少品が見られる。

石垣貝塚（石垣市教委1993a・b） 平川貝塚より約200m南東側に位置しており、多くの柱穴群、円形石組7基、焼骨が認められる石組墓の周辺に、礫や板石を配し埋葬された人骨3体が確認された。柱穴群は墓の周辺にはほとんど分布していない。円形石組は、径及び深さ0.5～1mの土坑の周縁・壁面に礫を積み上げた遺構であるが、地山が砂層であることから井戸とは考えにくい。この遺構は、各々が約10m程度の間隔をあけて分布している。墓であるが、石組墓以外も、屈葬された人骨の周辺には多くの礫が見られていること、埋葬方向が西に30°と共に通しており、石組墓と一体の遺構とも考えられる。焼骨も含めて、全て男性の墓である。遺物からは、15世紀代もかなり多いが、景德鎮産・漳州窯系青花が比較的出土することから16世紀にも隆盛し、17世紀前半に及ぶ可能性はある（石垣市總務2010）。青磁は盤・香炉も見られ、勾玉も出土している。



平川貝塚（石垣市教委 1993c より引用一部改変）

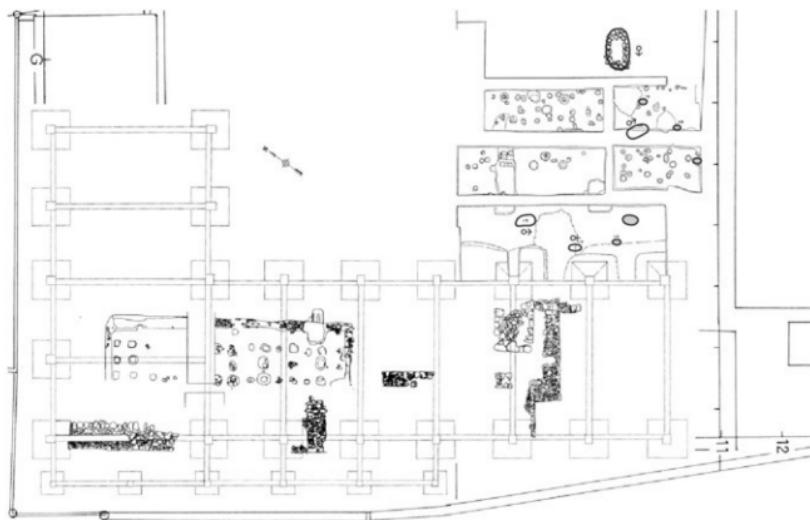


四箇地域関連遺跡位置図



- 墓の性別
- ♀…男性
- ♂…女性
- …若年・乳幼児・不明
- …円形石組
- ◎…柱穴群のグループ

石垣貝塚（石垣市教委 1993a・b より引用一部改変）



登野城跡（八重山藏元跡）（石垣市教委 1997b より引用一部改変）

第 27 図 四箇地域関連遺跡

0 10m

登野城遺跡（石垣市教委 1997 b） 石垣貝塚より約 500 m 南東側に位置しており、近世における八重山地域の中心であった蔵元跡とほぼ重なっているが、中森期にも多くの遺構・遺物が見られ、柱穴群と石組墓 1 基と、土坑墓 9 基が確認されている。柱穴群は比較的まばらであるため、建物が密集しない場所であったと想定される。確認された墓は径 15 m 程度の範囲に集中しており、その被葬者は男性が 3 基、女性が 1 基、若年・乳幼児が 4 基となっており、明確な分布差はここでは見つけられない。ただ、墓の主軸方向が石組墓のみが東に 40°、他は西に 50° となっており、直交するような形で異なる。また、別の調査区では柱穴群が密集する地点で土坑墓が数基分布するところもある（大瀬 2009）。出土遺物からは、青花は少ないようであるから、平川貝塚に近い 15 世紀前半～16 世紀前半が主体と思われる。ここでは、北宋銭や勾玉が複数出土している。

山原貝塚（玉口・西村・大川・浜名ほか 1960） 登野城遺跡より約 600 m 東側に位置しており、標高約 5 m の砂丘上に形成され、北側は台地縁辺となっている。住居跡とされる方形石組が確認されているが、具体的な様相は不明である。出土遺物としては、カムイキヤキも出土するが、白磁 C 3 群、青磁 IV・V 類、褐釉陶器、土器では石垣タイプ I が主体なので、14 世紀後半～15 世紀が主体と思われる。また、北宋銭、鉄鍋も出土している。
集落跡の変遷 以上の事例から、四箇地域における中森期の集落跡の変遷についてまとめる。本地域でも最も古い遺跡は、小丘陵に位置するビロースク遺跡で 12・13 世紀から形成されてピークが 14 世紀である。14 世紀後半になると台地縁辺に位置する山原貝塚が形成されるが、白磁 C 3 群が比較的出土している平川貝塚や登野城遺跡は砂丘地でもこの時期に形成され始めている可能性が高い。15 世紀前半にはビロースク遺跡、後半には山原貝塚が廃絶する一方、他の遺跡は 16 世紀も継続している。これらの遺跡でも 16 世紀後半には出土遺物の量は少なくなっているが、石垣貝塚や本遺跡は 17 世紀前半代の資料も比較的見られるなど、遺跡ごとにピークや廃絶に若干の差があった可能性がある。

このように、四箇地域では 15 世紀にそれまで隆盛を迎えたビロースク遺跡が縮小を迎える一方、砂丘地を中心多くの遺跡が形成されていく。16 世紀後半には、出土遺物から見ると縮小傾向が見え始める集落跡も現れるが、砂丘地の利用は 17 世紀前半まで見られるという傾向を追うことができる。

遺構や遺物から見た集落跡の特徴 四箇地域における集落跡の特徴としては、建物跡と墓が比較的近接して分布することが挙げられる。現時点では小面積であった山原貝塚以外では土坑墓が確認されており、石組墓は石垣貝塚と登野城遺跡でしか確認されていないので、この墓が有力者層の存在を示す可能性も考えておきたい。ただ、墓の埋葬方向を見ると土坑墓と石組墓においても西に 40° 前後であり、この方向は概ね南側の海岸線と並行して分布しており、海の方向もしくは日の入りなどを意識した規範であった可能性も想定される。

さて、墓・建物跡の分布状況については、次の 2 パターンが見られる。

①柱穴群に混在するように、1～数基で 1 グループを形成し、女性と子供の墓は隣接するが、男性はやや離れて位置する（本遺跡、平川貝塚）。

②柱穴群とは明確に場所の区別が見られ、男性が埋葬される石組墓を中心に墓域を形成する（石垣貝塚、登野城遺跡）。

出土遺物では、陶磁器では盤や天目、勾玉や北宋銭、鉄製品などの希少品と思われるものがあるが、今のところ遺跡により明確な偏りはないと言えるが、登野城遺跡ではやや目立つ印象もある。一方、骨製尖頭器が中森期ではどの遺跡でも出土しており、共通点の一つと言える。

このように、四箇地域の集落跡は顕著な階層差は見つけがたい状態ではあるが、15～16 世紀に多くの人々が幾つかの集落に分かれ、各集落では緩やかなまとまりである屋敷地を構成しながら大きな差はないような状況で暮らしており、一部は石組墓に埋葬された人々もいたのであろう。

石垣島及び周辺の様相 それでは四箇地域より視点を広げて、石垣島及び周辺の中森期における集落跡を見てみたい。中森期の集落跡については、大瀬永寛がその概観をまとめており、特に立地の觀点による説明が重要で

ある。それによると、12世紀以前まで海岸低地砂丘に限定されたが、14～16世紀にかけての遺跡は急増し海岸低地砂丘や海岸近くの展望の利く小高い丘、緩やかな傾斜地、丘陵の先端部など様々な展開が八重山諸島内の至る場所に認められ、16世紀を境に利用が破棄される遺跡が目立つことである（大濱2009）。

また、四箇地域の集落跡は石垣による区画はなかったが、石垣島ではフルスト原遺跡に代表されるように八重山地域では、石垣により幾つかの区画を巡らせるものが14～15世紀に隆盛を迎える（県教委1994、国歴民1999）。フルスト原遺跡では、15基の野面積の石垣が平面略方形状に幾つもくっつくように石開いがある集落跡である。標高20～25mの石灰岩台地上の縁辺に位置し、遺跡の北東は崖になっており、海岸までは約1kmである（石垣市教委1984）。この遺跡では16世紀の遺物は少ないため、四箇地域とは隆盛時期にやや差がある。

一方、西表島を見ると、例えば上村遺跡（県教委1991）や慶來慶田城遺跡（県教委1999）では同様に幾つもの石開いで構成される集落跡であるが、15～18世紀の遺構・遺物が確認されており、フルスト原遺跡などと比べると長期間継続したものと思われる。ここでは、青磁は盤・香炉・小杯などの様々な器形、綠釉水注やタイ産鉄絵陶器など希少品が見られ、また貯蔵具とされる褐釉陶器壺も比較的見られる。このことは、大濱永寛が言うようにこれら石開いを有する集落跡が貿易の拠点であった可能性を示すものと考えられ（大濱2009）、この両遺跡ではその重要性からより長く継続したとも想定される。

まとめと課題 以上、本遺跡は15世紀後半～16世紀に隆盛した集落跡で、この遺跡を含む四箇地域の砂丘地には当該期には数箇所の集落跡が比較的密集する形で分布する。集落内部は建物跡が密集して見られ、屋敷地的なまとまりをもち墓が幾つかのグループで点在するような状況である。この様相から、明確な有力者の存在は見えがたいが、墓には土坑墓と石組墓があり、後者は少なく地点的にも限られており、階層差である可能性も想定される。一方、当地域から北東約3kmに位置する石垣開いがあるフルスト原遺跡は14～15世紀を中心としており、16世紀については廃絶・縮小していた可能性が高い。一方、本遺跡を含めた当地域では16世紀も隆盛している。このような中森期における集落様相は、1500年のオヤケアカハチ・ホンカラワラの乱を契機として琉球王府が八重山諸島を直接的な関与した影響とする見解もあり（島袋2005・大濱2006）、今後、様々な侧面から検討していくことが必要であろう。

引用文献

- 新垣力 2003『沖縄出土の清朝陶磁』『紀要沖縄埋文研究1』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 阿利直治 2011『壺屋焼と八重山焼について』『琉球陶器の来た道－展覧会講座、講演会資料編一』沖縄県立博物館・美術館、那覇市立壺屋焼博物館
- 石垣市教育委員会 1982『大田原遺跡』石垣市文化財発掘調査報告書第4号
- 1983『ビロースク遺跡』石垣市文化財発掘調査報告書第6号
- 1984『フルスト原遺跡』石垣市文化財発掘調査報告書第7号
- 1987『崎枝赤崎貝塚』石垣市文化財発掘調査報告書第10号
- 1993 a『石垣貝塚』石垣市文化財調査報告書第17号
- 1993 b『石垣貝塚発掘調査報告書－宅地建設に係る記録保存調査－』『黒石川窯址』同報告書第15号
- 1993 c『平川貝塚』石垣市文化財調査報告書第18号
- 1993 d『黒石川窯址』石垣市文化財調査報告書第15号
- 1997 a『ピュウツア遺跡発掘調査報告書』『名蔵貝塚発掘調査報告書』同市文化財発掘調査報告書第22号
- 1997 b『八重山蔵元跡』石垣市文化財調査報告書第21号
- 2000『石垣島の岩陰遺跡』石垣市文化財調査報告書第25号
- 2004『喜田盛遺跡』石垣市文化財調査報告書第28号

- 石垣市総務部市史編集課 2002『村むら探訪－新川村の移り変わり』石垣市史巡検 Vol. 7
- 2007『研究史－八重山考古学のあゆみ』石垣市考古ビジュアル版1
- 2010『八重山の民間交易隆盛期 中森期－中国陶磁器・人口の急増－』石垣市考古ビジュアル版6
- 黄慎智 2009「鶴歌狗母鍋研究」『鶴歌陶博物館研究集刊 2008・2009』鶴歌陶博物館
- 大瀬永亘 1999『新川のビロースク（美良底）遺跡とその周辺』『八重山の考古学』先島文化研究所
- 2006『慶田盛村の繁榮と古語』『オヤケアカハチ・ホンカワラの乱と山陽姓一門の人々』先島文化研究所
- 大瀬永寛 2009『先島の14世紀から16世紀の遺跡について』『名蔵シダタル海底遺跡共同研究報告書』先島文化研究所
- 沖縄県教育委員会 1991『上村遺跡』沖縄県文化財調査報告書第98集
- 1999『慶來慶田城跡』沖縄県文化財調査報告書第131集
- 1979『石垣島の遺跡』沖縄県文化財調査報告書第22集
- 1980『神田貝塚』『石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書第30集
- 1984『カンドウ原遺跡－灌・排水工事に係る緊急発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書第58集
- 1985『アラスク村跡遺跡・ウイスズ遺跡発掘調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第62集
- 1994『グスク分布調査報告書（Ⅲ）－八重山諸島－』沖縄県文化財調査報告書第113集
- 沖縄県立埋像文化財センター 2005『首里城跡－書院・鏡之間地区発掘調査報告書－』同センター調査報告書第28集
- 2009『嘉良嶽東貝塚・嘉良嶽東方古墓群』同センター調査報告書第50集
- 片桐千亜紀・山崎真治・藤田祐樹 2011『更新世人骨の発見－沖縄県石垣市白保竿原田原洞穴遺跡－』『季刊 考古学』第114号
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
- 金武正紀 1994『土器→無土器→土器－八重山考古学編年試案－』『南島考古』第14号 沖縄考古学会
- 久貝眞嗣 2006『新城下原第二遺跡II地区下層出土の動物遺体に見られる傷痕』『紀要沖縄埋文研究4』同センター
- 黒住耐二 1987『遺跡出土貝類の生息場所類系化の試み』『石川市吉我知原貝塚』沖縄県文化財調査報告書第84集 県教委
- 合田芳正 1986『八重山式土器についての一試案－与那良、成屋、ヤマバレー遺跡出土土器の分析をとおして－』『南島考古』第10号 沖縄考古学会
- 国立歴史民族博物館 1999『村が語る沖縄の歴史－歴博フォーラム「再発見・八重山の村」の記録－』新人物往来社
- 佐賀県立九州陶磁資料館 1998『沖縄のやきもの－南海からの香り－』
- 島袋綾野 2002『新川の遺跡』『村むら探訪－新川村の移り変わり』石垣市史巡検 Vol. 7
- 2005『近世琉球における「村」と「遺跡」－八重山近世村跡に関する一考察－』『廣友会誌』創刊号
- 新里貴之 2004『先島諸島におけるグスク時代煮沸土器の展開とその背景』『グスク文化を考える』新人物往来社
- 瀬戸哲也・玉城靖・仁王浩司・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007『沖縄における貿易陶磁研究－14～16世紀を中心に－』『紀要沖縄埋文研究5』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 高宮廣衛 1981『編年試案の一部修正について』『南島考古』第7号 沖縄考古学会
- 田中克子 2002『博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その二）－福建省閩江流域、及び以北における窯跡出土陶磁－』『博多研究会誌』第10号 博多研究会
- 玉口時雄・西村正衛・大川清・浜名厚ほか 1960『石垣島<山原貝塚>』『沖縄・八重山』滝口宏編
- 陳建中 1999『徳化民窯青花』文物出版社
- 那須孝徳・趙哲済 2003『地層の見方』『環境考古学マニュアル』同成社
- 西川寿勝 2008『陽杯考（後編）－軍杯の考古学－』『大阪文化財研究』第33号（財）大阪府文化財センター
- 西中川駿 1991『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』文部科学省科研費研究成果報告書
- 福建博物館 1997『漳州窯－福建漳州地区明清窯址調査発掘報告之一－』福建人民社
- 向井互 2003『タイ黒褐釉四耳壺の分類と年代』『貿易陶磁研究』No.23 日本貿易陶磁研究会
- 森 親 2001『大坂城下町跡 SK01』『季刊考古学』第75号 雄山閣



1. 完掘後全景（東より）



2. 完掘後全景（西より）



3. 遺構プラン検出状況（東より）



4. 完掘後西側（西より）



5. 4グリッド完掘状況

図版9 調査区全景



1. 土坑墓 1 平面プラン検出状況



2. 土坑墓 1 半断状況



3. 土坑墓 1 人骨検出状況



4. 土坑墓 1 完掘状況



5. 土坑墓 1 人骨検出状況（拡大）

图版 10 土坑墓 1



1. 土坑墓 2 平面プラン検出状況



2. 土坑墓 2 人骨検出状況



3. 土坑墓 2 人骨検出状況（拡大）



4. 土坑墓 2 完掘状況



6. 焼土遣横堆積状況



5. 焼土遣構完掘状況

図版 11 土坑墓 2・焼土遣構



1. 土坑 1 完掘状況



2. 土坑 1 半裁状況



4. 土坑 2 半裁状況



3. 土坑 2 完掘状況



6. 土坑 4 断面



7. 4 グリッド I 層下部出土集中地点

図版 12 土坑 1・2・3・4



1. 土坑 8 断面



2. ピット 1 断面



3. ピット 23 断面



5. グリッド南壁断面



4. ピット 36 土器出土状況

5. グリッド南壁断面



6. 2～4グリッド南壁断面

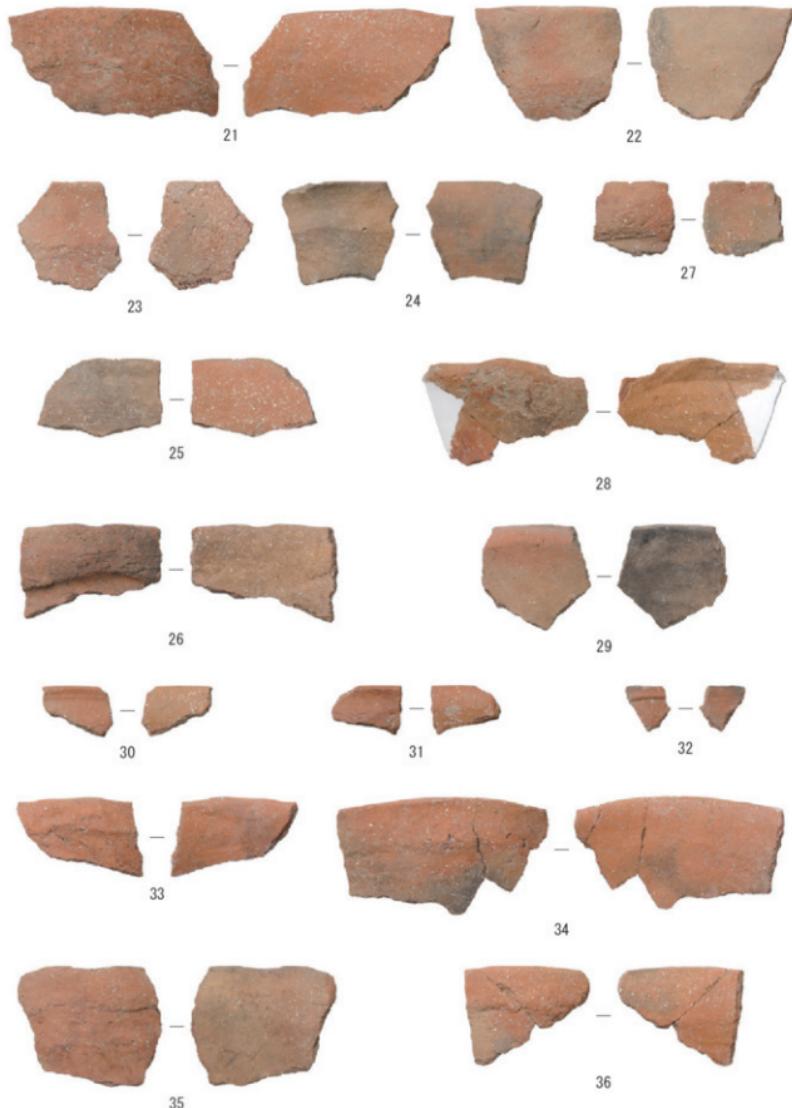


7. 2グリッド南壁断面

図版 13 土坑 8 ピット 1・23・36 2～4グリッド断面



图版 14 土器 (1)



図版 15 土器 (2)



37



38



39



40



41



42



43

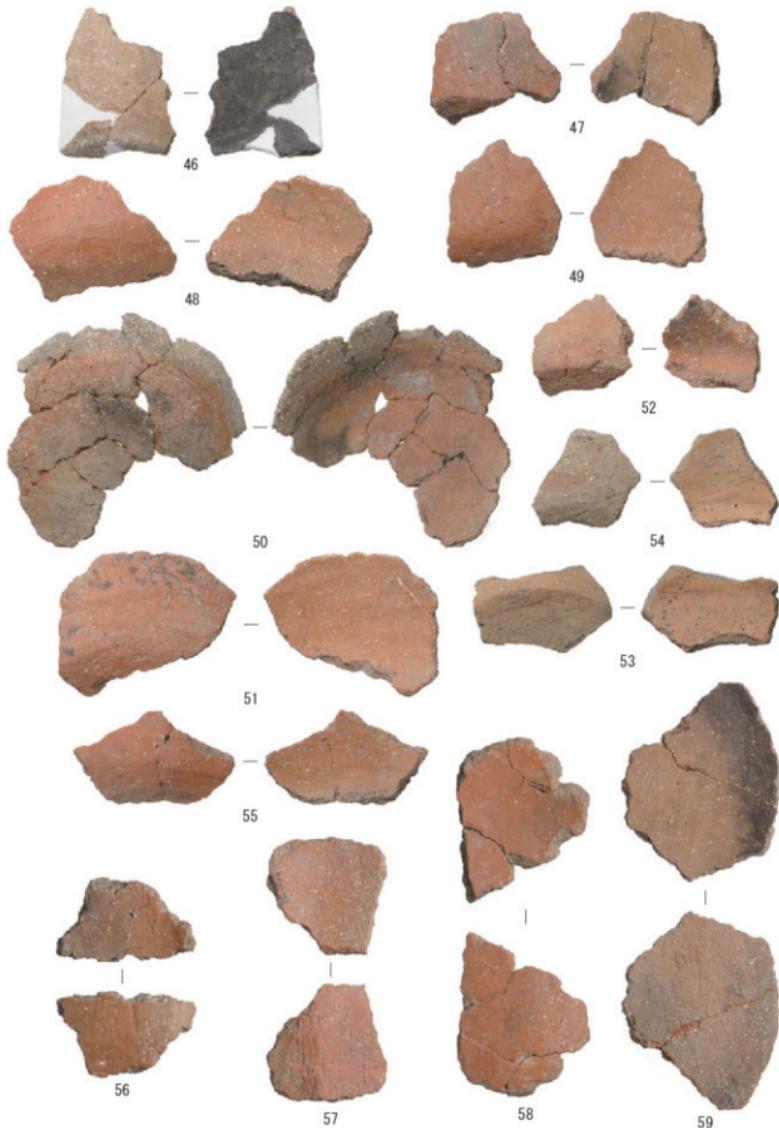


44



45

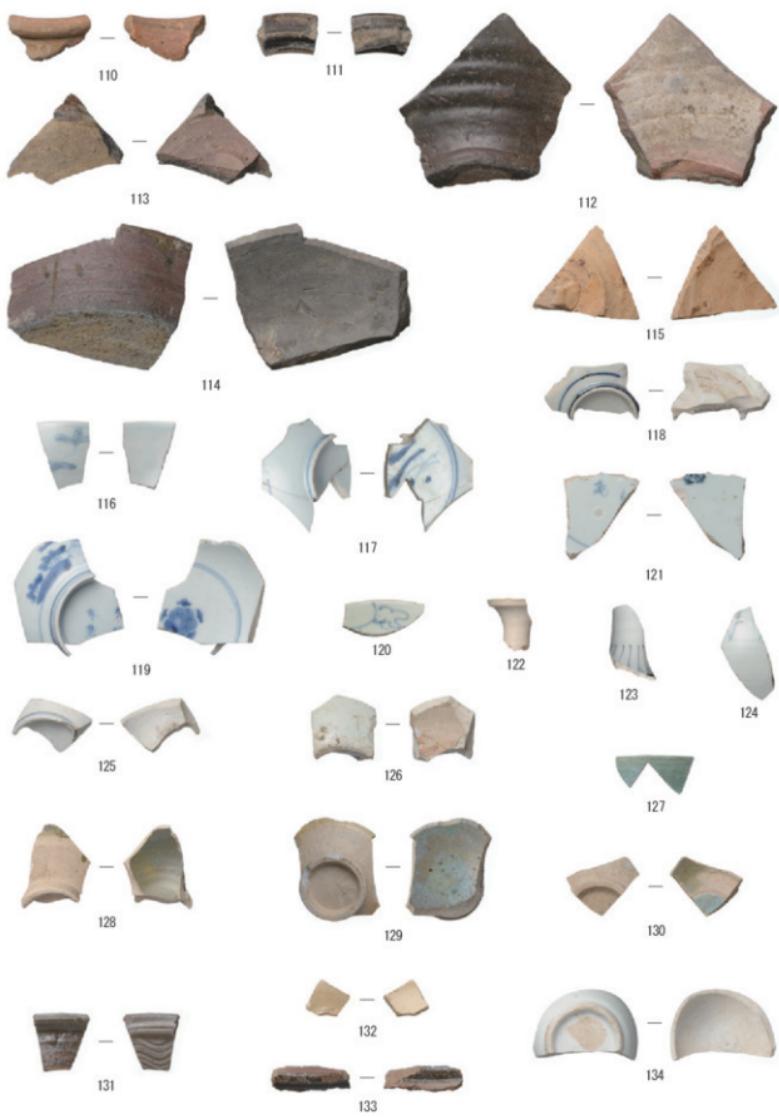
圖版 16 土器 (3)



図版 17 土器 (4)



図版 18 青磁 (60~71)・白磁 (72~82)・青花 (83~107)・中国産色絵 (108・109)



図版 19 中国産褐釉陶器 (110~113)・タイ産褐釉陶器 (114)・台湾産陶器 (115)・本土産陶器 (116~134)



図版 20 沖縄産施釉陶器 (135~161)・沖縄産無釉陶器 (162~170)



図版 21 沖縄産無釉陶器 (171~184)・陶質土器 (185・186)・金属製品 (187~190)・骨製品 (191・192)
石製品 (193・194)



图版 22 近代陶磁器 (196~216)



図版 23 骨製品 (195)・貝製品 (217~244)・円盤状製品 (245~250)

報告書抄録

ふりがな	きだもりいせき						
書名	喜田盛遺跡						
副書名	平成22年度 県道真栄里新川線街路改良工事に伴う記録保存目的の発掘調査						
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第59集						
編著者名	瀬戸哲也・片桐千亜紀・徳嶺里江・土肥直美						
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター						
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町上原193-7 TEL 098-835-8752 FAX 098-835-8754						
発行年月日	2011年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
喜田盛遺跡	沖縄県 石垣市 字新川 63-2	47207		24° 20' 46"	124° 9' 10"	20100707 ~ 20100806	50 m ²
所取遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
喜田盛遺跡	集落	中森期 (15~17世紀)	柱穴群、土坑5、土坑墓3	土器・中国産陶磁器(青磁・白磁)・貝類遺体・獸魚骨			平成12・13年度石垣市調査区と隣接しており、県道工事に伴う調査は今回で完了。
		近世~近代	土坑3、礎石	本土産陶磁器・中国産陶磁器(青花)・近代陶磁器・台湾産陶器・金属製品・石製品・骨製品・貝製品・貝類遺体・獸魚骨			
要約	<p>県道真栄里新川線街路改良工事に伴う喜田盛遺跡の記録保存目的の発掘調査を実施した。本遺跡は、既に平成12・13年度に石垣市教育委員会が発掘調査を行っており、中森期を主体とした集落跡の様相がより明確にきた。遺構には多くの住穴群が分布しており、それを避けるように土坑墓が3基確認された。出土遺物の特徴から、中森期でも15世紀後半~16世紀が主体であることも確認できた。近世についてには17~18世紀の遺物は見られるが、それ以降の遺物は少なく、明和(1771年)の大津波の影響を受けたことが想定された。近代には、宅地として利用され、多くの近代陶磁器が出土する中で、台灣産陶器も見つかったことは近代史を考える上でも重要な資料と思われる。</p> <p>総括として、本遺跡が位置する四箇地域の中森期における集落跡の様相をまとめ、15~16世紀に幾つかの集落跡が各々屋敷地的なまとまりを持ちながら、それに近接して数基の墓が営まれていることを確認できた。今後の課題としては、約3km北東に位置するフルスト原遺跡のように、石垣廻いを有する集落跡との関係性などについて検討していく必要があろう。</p>						

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第59集

喜田盛遺跡

平成22年度 県道真栄里新川線街路改良工事に伴う記録保存目的の発掘調査

発行年月日 2011年3月31日
 編集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町上原193-7
 TEL 098-835-8751-8752
 印刷 株式会社 東洋企画印刷
 〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町4-21-5
 TEL 098-995-4444

